

---

# 乙女戦隊 月影

dig

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乙女戦隊 月影

### 【Nコード】

N0428J

### 【作者名】

dig

### 【あらすじ】

学園の平和を守る為に！

戦え！月影！

但し、学業優先！活動は放課後だけだ。

でも、塾はいけないぞ。



## 序章！？（パイロット版）

「今日はブルーだわ」

「呼んだか？」

「いや、そういう意味じゃなくて」

放課後。部活が始まってる時間。

あたしこと結城里奈と、五月雨夏希は、誰もいなくなった校舎内を走り回っていた。

「負の波動は、どこからするんだ？」

夏希は、廊下に漂う波動を探った。

「わからないわ。あまりにも、微弱で…」

あたしも探ったが、わからなかった。

いきなりだけど、あたしと夏希は、この学園をメインに、世界を守る乙女戦隊月影のメンバーなのだ。

乙女レッドがあたしで、乙女ブルーが夏希。

他にも、メンバーはいる。

五人揃わないと、必殺技が使えないけど、まだピンクが見つからないかった。

「今、何時よ」

時間を確認しようとして、携帯を探したけど…。

（そうだ！なかった）

今朝、担任に没収されていたのだ。

そのことが、あたしの気分をブルーにしていた。

（まあ…何とかなるわ）

あたしには兄がいて、しかもこの学校の社会科の教師なのだ。

携帯を取り戻すのは、後でもいい。

あたしは廊下を走りながら、窓から見えるグラウンドと、その向こうで…すべてを染める夕焼けを見ていた。

あたし達乙女ソルジャーは、月の明かりに照らされて、力を発揮できるのだ。

だから、この夕焼けが終わるまで、変身はできない。

「だるい…」

あたしと夏希は、ある教室の前で立ち止まった。

みんな帰った教室内で、1人机の上で胡坐をかきながら、ぼやいて  
いる女が1人。

「まじ〜帰るのが、だるい〜」

「蒔絵！」

あたしは、教室内にいる蒔絵に声をかけた。

「うん？」

あたし達を見た蒔絵が、頭をかいた。

「またあゝあれかよ〜だるい」

花町蒔絵。

乙女グリーンである。

「蒔絵！またあいつらが、現れたのよ」

あたしの言葉に、蒔絵は欠伸をし、

「ぶっちゃけ〜どうでもいいし」

と言う時絵を、あたしは強引に教室から連れ出した。

「きゃああ!」

廊下に悲鳴が響き渡った。

「夏希!時絵!」

あたしは、時絵の腕を掴みながら、悲鳴がした方に走った。

「赤点!赤点!」

と叫びながら、生徒を囲む全身黒タイツの下っぱ戦闘員。

「助けて!」

輪の中で怯える女生徒。

「いくわよ」

あたしの言葉に、夏希が頷いた。

「だりい」

時絵は強引に引っ張っていく。

女生徒に近づこうとしたあたし達に、新手の黒タイツ達が立ちふさ

がる。

「落第！落第！」

タイトに砂や、砂利を入れたというシンプルな武器を振り回し、下っぱがあたし達に近づいてくる。

「どうするの？まだ変身できない！」

勢いよく来たものの、変身できなきゃ…ただの女の子だ。

「月は出たの！」

あたしの叫びに呼応したように、後ろから誰かが走ってきて、あたし達を飛び越えると、下っぱに飛び蹴りを食らわした。

「九鬼！」

着地と同時に、裏拳を下っぱにたたき込んだのは、乙女ブラック―九鬼真弓だ。

「月は満ちたわ！」

九鬼はあたし達に言った。

「とりゃあ！」

囲まれた女生徒の向こうの廊下から、ほうきを持った平城山加奈子が、走ってきた。

ほうきを振り回し、下っぱを蹴散らす。

その隙に、囲まれていた女生徒は逃げる事ができた。

「加奈子！」

加奈子と九鬼が、あたし達の横に並ぶ。

「みんな！いくわよ」

「うん！」

一斉に、蒔絵を除いて頷くと、

「装着！」

あたし達はどこからか、各々色のケースを取り出した。

「馬鹿目！そう毎回、変身させるか！」

下っぱの中から、同じ全身タイツなのに、1人コートを羽織った者が前に出てきた。

「我は下っぱアルバイトリダー！怪人おいなり！くらえ！我が攻撃を！」

怪人おいなりが、コートを開けた瞬間、

「きゃああ！」

あたし達は、変身どころではなくなった。全身に悪寒が走り、あたし達は顔を背けた。

「私のおいなりさんの前では、変身できまい！ハハハ！」

おいなりは、高らかに笑い声を上げた。

タイツはある部分だけ開いていたのだ。

「今だ！やつらを殺せ！」

笑いながら恍惚の表情を浮かべるおいなりは、突然…膝を崩した。

「馬鹿な…」

おいなりのおいなりに、九鬼の正拳突きが入っていた。

「生おいなりに、触れる乙女など…」

おいなりは口から、泡を吹きながら、白目を向き、失神した。

その余りに痛そうな攻撃に、他の下っぱがたじろいだ。

「九鬼！やったね」

倒れたおいなりの顔の部分のタイツを、九鬼は破った。

「こいつは！？」

顔を見たあたし達は、驚いた。

「臨時教員の戸田！」

「あり得ない…先生がやつらの手先なんて」

「なんかだり〜い」

「そうよ！よくぞ、そこまでたどり着いたわね」

下っぱの群れが真ん中で割れ、白衣の女性が腕を組ながら、現れた。

「半田先生！」

弾切れんばかりのナイスバディで有名な半田は、あたしの前に立ち  
はだかった。

そして、あたし達を舐め回すように見ると、

「ガキ！乳臭いガキ！」

「何！」

「どうして！あたしは、こんなところに！本当なら！このナイスバ  
ディを見て、まだまだあおい青少年が、ムラムラして、いろいろ想  
像して、悶える姿を楽しみにしていたのにいい！」

半田は嘆き、

「どうして、女子高なのよ」

肩を落とした。

そして、わなわなと全身を震わすと、

「この満たされない思いを…あの人は救ってくださると、約束してくれたわ！お前達を倒せば、あたしは男子校に転勤できる」

半田は、白衣を脱いだ。

鉄の下着だけになった半田は鞭を持ち、下っぱに命じた。

「やれ！」

下っぱが襲い掛かってくる。

同時刻。

「ありがとうございます」

補習を受けていた竜田桃子は、頭を下げると、教室から出た。

「ああ、気を付けて」

補習を担当することになった結城哲也は、笑顔で桃子の後ろ姿を見送った。

「女だったら、心配はいらないわ！みんな、変身よ」

あたしは号令をかけたが、夏希だけが崩れ落ちていた。

「夏希？」

「胸が…スイカ…」

貧乳である夏希は、胸にコンプレックスを持っていた。

「夏希！胸だけが、すべてじゃないわ！」

夏希のそばで励ましに行ったあたしの胸を見て、夏希は固い握手を求めた。

「あ、あたしは着痩せで…」

と誤解を解こうとしている間、九鬼と加奈子は戦っていた。

蒔絵は廊下の壁にもたれ、メールを打っていた。

「そんな場合じゃない！」

あたしは、夏希の腕を持つと、立ち上がらせた。

「変身よ！」

再び赤いケースを握り締めた。

「お！」

九鬼は無理やり、蒔絵を連れてくると、全員がケースを握り締めた。

「すいません…」

そんな混乱の中、頭を下げながら、桃子が下っぱの間をかきわけて、あたし達のそばを通り抜けようとした。

その瞬間、空中から桃子の頭に、ピンクのケースが落ちてきた。

「痛！」

頭を押さえる桃子より、あたし達はピンクのケースに目を奪われた。

「まさか…あなたが、乙女ピンクなの！」

「え？」

訳が分からない桃子の腕を、無理やり九鬼が掴むと、あたし達の列に並ばした。

もともと流され安い桃子は、一応列に並び、あたし達と同じように、ケースを持ち構えた。

「メンバー増えたけど！いくわよ！装着！」

その時、桃子が歩いて来た廊下の奥から、哲也が姿を見せた。

「里奈!？」

「お、お兄ちゃん!」

目を丸くする哲也に気付いたが、変身は止められない。

ケースから飛び出した眼鏡が、勝手に各々の場所にかかる、各々の色の戦闘服を装着させる。

（お兄ちゃん…）

今は仕方ないわ。

あたしは眼鏡を指で上げると、叫んだ。

「月の明かりを背に受けて、照らす闇を駆逐する」

「誰かの為じゃなく、他が為、みんなの為に!」

「月影に紛れて、悪を切り裂く!」

「だるい」

「えっと…どうしてなんだろう…」

「乙女戦隊月影!」

あたし達は横に整列した。

「月よ！あなたは、見ない方がいい。あたし達の戦いを！美しいあなたには、見せたくないから！」

と言うと、あたしはダッシュした。

「恥じらいキック！」

戦闘服の癖に、なぜかスカートが短いあたしは、蹴りを半田にたたき込んだ。

「パンツが見えてる」

哲也は顔を押さえた。

「恥じらう心があるかぎり、あたしの中の乙女は消えない！恥じらいの乙女レッド！」

あたしは、きりつと敵を睨む。

「気分はいつもブルー！テストは、いつも山が外れる！低血圧の乙女ブルー！」

「だるい…だるびっしゅだわ。まじで…」

という乙女グリーンを下げると、

「闇があるから、あたしがいる！悪より、黒いあたしが、悪を断罪する！月夜の刃！乙女ブラック！」

そして、隣にいたピンクが続く。

「えっと…早く帰りたい。補習が終わった乙女ピンク？」

最後に、加奈子が前に出る。

「男がほしい！欲望の乙女とどめ色！」

語呂が悪い。

いつも、最後は変な空気になる。

それが、乙女戦隊月影だ。

「お兄ちゃん！こ、これはね」

頭をかかえていた哲也は…今度は、深くため息をつき、

「お前達は知ってるのか？乙女戦隊になれる者の資格を」

「え？」

「成績が平均か、それ以下…学年トップは乙女戦隊にはなれん。学業第一だからな…。乙女戦隊になれる者は、別に進学を気にせずに、戦える暇がある者しかなれんのだ」

「え——！」

「お前達が、眼鏡をかけてるのは、せめて…賢く見せる為だ」

目眩を覚える哲也に、半田がきいた。

「魔將軍ザン様。いかにしましょうか」

「そうだな…」

哲也は、あたし達を見つめた。

「魔將軍！？お兄ちゃんが、やつらの幹部？」

絶句するあたしに、哲也は言った。

「里奈…いや、乙女レッド！今は、家庭の事情を挟んでる場合ではない！お前が、正義だと思うなら！自分の道をいけ！」

「將軍！」

「かまわん」

哲也は、あたしに背を向けた。

「お兄ちゃん！」

あたしの声を見捨て、哲也は歩きだす。

「どうして…」

崩れ落ちるあたしに、哲也は振り返らずに、口を開いた。

「今夜は、お前の好きなカレーだ」

うちは、哲也と二人しかいない。

「無事に終われば…食卓で会おう」

去っていく哲也の背中を見送るあたしの視線を、半田は乳を揺らしながら、遮った。

「お前は、カレーを食べれん」

半田は胸の谷間から、携帯電話を取り出した。

「あ、あたしの携帯電話！」

それは、今朝没収された携帯だった。

「いでよ！マジで魔神！ポケホウダイン」

変な粉を振り掛けられたあたしの携帯は、二メートルくらいに巨大化した。

「ネット小説書く時は、ポケホウダイに入りなはれや」

ポケホウダインの画面に、イケメンの顔が映り、口を動かす。

「あたしの携帯を、返せ！」

ポケ Howard インに、回し蹴りを繰り出そうと、足を上げた瞬間、シヤッター音が鳴った。

「お約束のパンチラゲット！」

「え！？」

あたしは蹴りを止め、スカートを押さえた。

「ハハハ！恥じらいのレッドはん！このパンチラをネットに、ばらまかれとうなかつたら、おとなしくしなはれ」

「レッド！」

ブラックとブルーがあたしの横に来る。

「おっと！他の色はんもやで。もし動いたら、痛い内容の文を、登録してあるアドレスに、一斉メールしまっせ」

エセ関西弁を話すポケ Howard インに、特にあたしは手を出せない。

「卑怯だぞ！」

「魔神に卑怯は最大の誉め言葉や」

攻め倦んでいるあたしの横を、誰かが通り過ぎた。

「ピンク！ハンマー？」

首を傾げながら、ピンクは巨大なハンマーを振り上げ、ポケハウダインに向けて、振り落とした。

「何するんや！あんさん」

何とかハンマーを避けたハウダイン。

「あたし…帰りたいんです」

またハンマーを振り上げると、

「友達がどうなっても、いいちゅうんでっか？」

「あたし…この人達、知らないし…別にどうなっても構いません」

確かに、あたし達はピンクとは初対面だ。

「お、同じ戦隊でっしやる！袖触れた…何とかっていいまっしやる！ほんま義理人情もない世界になっただんですなあ」

ポケハウダインは嘆いた。

「わてら昭和世代には、考えられん話ですわ」

ポケハウダインは、ピンクの攻撃を避けた。ハンマーが廊下に突き刺さる。

「昭和世代？嘘つけ！携帯は、昭和にはない！」

ブラックが、ポケホウダインを指差した。

「嘘ちやいまっせ！疑うんでしたら、後ろの製造番号を……」

後ろ姿を見せたポケホウダインは、はっとした。

「あかん！あかん！騙されるところでしたわ。フタ開けて、わたの電池抜こうとしても、そうは問屋が卸しまへん！」

「くそ！」

ブラックは悔しそうに、拳を握り締めた。

「ほんま…今の若い子は怖いですわ。店では甘えてくるのに、外では無視でっせ！ほんまゝ泣けてくるわ」

画面に涙が映るポケホウダインを見て、あたしはあることに気付いた。

「あつ！あたし…携帯止まってる！」

その言葉に、ポケホウダインは愕然とした。

「な、なんやてえ！！」

「ブルー。あたしの携帯にかけてみて」

ブルーが携帯を取り出し、かけると、

「お客様のご都合により」

とアナウンスが流れた。

寒い空気が一同に流れた。

「な、なんちゅうこっちゃ！なんでや！なんで払ってないねん！つながらない携帯なんてー電話ちゃうやん」

肩を落とし、落ち込みポケ Howard イン。

「ごめん」

少し申し訳ない気持ちになった。

だけど…。

「今よ、みんな！ピンクも揃ったし、初めて合体技が使えるわ」

あたしは、嫌がるグリーンも流され安いピンクも無理やり円状に集結させ、野球の始まりのように、お互いの手を重ねさせた。

「くらえ！月の力を！乙女フラッシュ！」

しかし、技が発動しない。

「え！どうして」

「乙女パワーが足りないんだ！」

ブルーは気付いた。

「どうして！みんないるのに」

戸惑いの中、ゆつくりとブラックが手を抜いた。

「ブラック？」

俯き、顔を背けるブラックは、衝撃的な事実を告げた。

「今まで、みんなを騙していてごめんなさい…。あたし」

ブラックの瞳から、涙が零れた。

「男なの」

「え！？」

衝撃の事実、あたしは驚きの声を上げた。

「ここ、女子高だよ！」

「まじまじかよ」

グリーンだけがノリノリで、ブラックに迫り、携帯で写真を取り出す。

「でも、乙女ブラックになれるのは、女の子だけよ」

「そ、それは…」

ブラックは眼鏡を外し、あたし達に見せた。

「不良品だから…」

眼鏡のフレームに、なぜか不良品の文字と、サンプルと書かれていた。

「不良品だから、変身できたと」

ちよつと納得できない。

「まじかよ！どう見ても女じゃんか！」

グリーンのテンションが上がる。

「だから…どこかに、真の乙女ブラックがいると思う」

ブラックが長い睫毛を落とし、

「騙すつもりはなかったの！みんなと戦いたかったの！女の子にもなりたかったの！」

「ブラック…」

ブラックの悲痛な叫びに、暗くなるあたし。

だけど、1人だけ違った。

別の件で、落ち込んでいるポケハウダインに、どどめ色が襲いかかった。

「どどめパンチ！」

ポケハウダインの画面にヒビが入る。

「いきなり、何するんや！精密機械に、パンチなんて頭悪過ぎやで！」

そんなポケハウダインの言葉を無視して、どどめ色はにやりと笑い、武器を取り出した。

「どどめ包丁！」

それは、普通の包丁だった。

どどめ色は、ポケハウダインの足を払うと倒し、馬乗りになった。そして、包丁をポケハウダインに突き刺した。

「何するんや！あんさん！携帯に包丁突き立てるって！よい子が真似したら、どうするんや」

「大丈夫…よい子は、こんな小説を読んでない」

さらに、一突きするどどめ色。

「何言つてんねん！これは、大手の投稿サイトに投稿されてるんやで！」

もう話を聞いていないどどめ色。

「どどめ♪どどめ♪どどめ♪色の戦士♪どどめ♪どどめ♪刺しまくれ♪」

歌いながら、何度も包丁を突き刺す姿は、さすがに同じ戦隊でも引く。

「今読んでくれている方々は……よい子やでえええ」

それが、ポケハウダインの最後の言葉になった。

合掌。

「あたしの携帯があゝ」

もとの大きさに戻った携帯を、あたしは手に取った。

もう完全に破壊されていた。

「恐るべし！乙女戦隊月影！」

おとなしく様子を見守っていた半田は、脱ぎ捨てていた白衣を拾い、肩に羽織った。

「今日のところは、おとなしく引き下がる！だがな！これを勝利と思うなよ」

半田は、あたし達一人一人を指差し、

「この中に、裏切り者がいる！」

「え！」

「まだ本人も自覚はないようだが…数を数えてみる！お前達は五人のはずだろ」

「あつ！」

あたし達は、同時に声を出した。

レッド、ブルー、ブラック、グリーン、どどめ色…そして、新しく加わったピンク。

「六人だあ！」

と気付いた時には、もうピンクはいなかった。

どうやら、いつのまにか帰ったらしい。

「ハハハ！誰が、敵なのか！互いに、疑心暗鬼に陥るがよいわ！ハハハ」

高笑いをしながら、半田は保険室に戻っていく。下っぱも踊りながら、ついていく。

「あたし達の中に…敵？」

折角、ピンクが見つかったのに…敵が紛れ込んでいるなんて。

それに、真ブラックはどこに。

そして、一番大事なのは、

あたしの携帯が使えないこと。

通話料も払えないのに、新しい機種なんて、買えない。

あたしは、一気にやる気がなくなった。

「乙女レッド…やめよかな」

「うん？」

スーパーで、買い出しをしていた哲也のもとにメールが来た。

携帯を開け、内容を確認すると、

「月影の勝利か…」

哲也はフツと笑うと、じゃがいもを買い物がごに入れた。

「後は…隠し味に…」

スーパーの中を歩き回る哲也。

頭の中に、記憶が甦る。

（俺は、あの日…魔へと落ちた）

月夜の晩。

哲也は、ある部屋に通された。

「待っていたよ。結城くん」

部屋の奥で、背を向けていた男は窓の外で輝く満月を見つめていた。

「君は、私のともだちになってくれるのかい？」

哲也は息を飲んだ。

（その夜…俺は奇跡を見た）

振り返った時、哲也は気付いた。

満月と思っていたのは、王の頭だった。

そして、王は何かを頭に振り掛けた。

次の瞬間、哲也は奇跡を見た。

「これがほしければ、仲間になれ」

哲也は、その日…魔に落ちた。

（なぜなら…俺は）

哲也は、生え際に手を当てた。

そして、次回。

「お兄ちゃん！信じられない！」

確執する兄妹。

「カレーに変なものいれて」

そして、学校に起きた怪異。

「きゃあ！」

乙女の園に、あり得ない物体が。

「流れない程大きな」

犯人は誰。

そして、真のブラックは…。

裏切り者は、誰なのか。

加速するストーリー！。謎が謎を呼ぶ。

次回、乙女戦隊月影 第13話。

### 【どどめ色の裏切り】

そして、特報。

「あんたが…真ブラックなの？」

2泊3日の修学旅行が、恐怖に染まる。

襲い来る魔神軍団。

「数が多過ぎる！」

魔神鹿のフン。魔神ヤツハシ。

そして、魔に支配されたご当地マスコットキャラ軍団。

「著作権は大丈夫なの！」

戦いの中での一つ出会い。

「これ…落としましたよ」

「あ、ありがとうございます」

ブルーに芽生える淡い恋心。

「お兄ちゃん…まさか、お兄ちゃんが！」

そして、最強の敵が現れる。

「変身…するわよ」

加速する戦いの中で、差し伸べられた手。

「いいの？」

「何言ってるのよ！今日は、あなたとあたしで、乙女ブラックよ」

繋がる手と手。

「ダブルブラック！キック！」

「あたし…そんなつもりじゃなかった」

「騙されるやつが、悪いんだよ」

流れる涙。

「乙女に涙を流させるなんて…あたし！絶対に許さない！」

乙女の涙が、新しい力をくれる。

「あたし達六人の最初で、最後の必殺技を」

劇場版、乙女戦隊月影。

【さよなら、友よ！ダブルブラック共闘！】

「九鬼…。あたしにとって、ブラックはあんだだよ…永遠に」

近日公開。

しません…。

E  
N  
D.

## 第1話 乙女レッド誕生！

「ふあゝ！」

窓から零れる朝の日射しを受けて、あたしはベッドの中で背を伸ばすと、ゆつくりと上半身を起こした。

乙女は朝からも、優雅でなければならない。

気品溢れる乙女。

あたしは、そんな乙女を目指していた。

何事にも動じない。

そう何事にも動じない。

あたしは、優雅にベットから起き上がった。

ハート柄のパジャマは、優雅とは程遠いけど、ネグリジエはまだ早い。

兄と二人暮らしのあたしは、たまに起こしに無断で部屋に入ってくる兄に、思春期の体を見せるわけにはいかなかった。

ゆつくりと、あたしは学生服に着替えようとして、絶句した。

目の前にある時計は、完全なる遅刻を告げていたからだ。

あたしは破るかのように、パジャマを脱ぐと、学生服に掴み、部屋のドアを蹴り開けた。

「お兄ちゃん！」

学生服に手を通す途中の段階で、廊下に飛び出したあたしの視線の向こうに、出掛ける寸前の兄を睨んだ。

兄はもうスーツに着替え、鉄製のドアを開けようとしていた。

「おはよう」

冷静に言った兄は、ノブを回した。

「どうして、起こしてくれなかったのよ」

「起こすなと言っただろ」

確かに、昨日言った。

「だけど！」

「遅刻するなよ」

兄は無情にも、外に出ると、ドアを閉めた。

兄である——結城哲也は、あたしの通う大月学園の教師である。

「お兄ちゃん……」

あたしは、まだスカートもはいていない状況で、閉まったドアを見つめた。

その結果。

「結城？お前…何度目だ」

校門の前で仁王立ちする体育教師熊五郎は、あたしを睨み付けた。

あたしはにっと笑い、指を三本示した。

「三回？」

「はあ？」

熊五郎は眉を寄せ、

「五、足りんだろ？」

「はは…8ですか」

あたしは、頭をかいた。

熊五郎は眉を寄せながら、少し顔を近付け、

「×5だ」

「そ、そうでしたけ？」

あたしは、熊五郎から目をそらした。

「あと二回で、落第だ！」

「え？」

熊五郎の警告に、あたしは耳を疑った。

一年の一学期である。

こんな早い時期の落第は、勘弁である。

あたしの名は、結城里奈。

落第に怯える大月学園の一年。

そんなあたしが今日、落第よりもショックな事件に巻き込まれることになる。

しょんぼりしながら、校門を通ったあたしは、学校中が騒ついていることに気付いた。

「？」

教室に着き、扉をガラガラと開けると、教室内の生徒が一步離れて、黒板を見つめていた。

「何？」

教室に入ったあたしは、黒板の方に振り向いた。

そこには、黒板いっぱいに殴り書きがしてあった。

「学園は狙われている…。目覚めよ！乙女ソルジャー達よ」

その文を読んだ後、あたしは首を傾げた。

「何のこっちゃ？」

（この物語は、うら若き乙女の学園生活と世界を守る…若き乙女達の物語である。チャカチャカチャカン！チャカチャカチャカン！）

と、変なアナウンスと効果音がどこからか流れてきて、あたしは耳を押えた。

「何？これ！」

あたしは、黒板の前でもがき苦しんでいたが、他の生徒に変化はない。

「あ、あたしだけ？」

効果音はすぐに消えたが、黒板の文字は中々消えなかった。

「これ…油性マーカーで書かれてる！」

黒板消しで、文字を消そうとした生徒が啞然とした。

黒板に落書きされていたのは、全クラスである。

文字を消す為に、各授業が遅れることになった。

「はい…」

頭を下げ、職員室を出た男は先程から、カバンの奥で鳴り続けた携帯を手に取った。

マナーモードの為、音は出ていなかった。

「はい」

携帯に出た男は目を細めながら、話を聞いていた。

やがて、口を開き、

「その話なら、職員室でも話していましたよ」

またしばらく相手の声に、耳を傾けてから、

「わかっております。マイロードよ…」

男は、足を止めた。

その横を、授業を終えた哲也が通り過ぎた。

男は、哲也が職員室に入るのを確認した後、再び歩き始めた。

「乙女ソルジャーを、覚醒はさせません」

男は口元を緩め、

「まだ普通の乙女であるうちに…始末致します」

携帯をカバンにいれた後、男は廊下の窓から、外を見た。

「まだ…時間はあるな。表の仕事を頑張るか」

男は不適な笑みを浮かべながら、大月学園をひとまず後にした。

「乙女ソルジャーにならないかい？」

放課後、授業を終えたけど、教室に恥ずかしいものを忘れ物したあたしが取りに戻る為、自分の教室を目指していた。

部活に使わない一般校舎は、日が沈みかける頃には、殆んど人がいない。

そんな校舎で、まだ残っていた生徒に片っ端から、声をかけている…

怪しいおっさん。

怪しいおっさん。

ぴちぴちのコスチュームを着た怪しいおっさん。

（ーっていうより！おっさんがいたら駄目だろ！）

ここは、女子高だ。

「変質者か？」

あたしは、足を止めた。

逃げるように、ダッシュする女生徒達。

悲鳴をあげるよりも、避けている。

あたしも逃げたいけど…怪しいおっさんがいるのは、うちの教室の前だ。

どうしよう…。

と悩んでいるあたしと、おっさんの距離は、数メートル。

少しの戸惑いが、事態を急変させた。

おっさんはビラのようなものを、突き出しながら、こっちに向かってくる。

（ヤバイ！）

あたしが逃げようとしたが、動きが遅れた。

仕方なくビラを取ろうと手が出た。

「困ります!」

(え?)

あたしじゃない女の声がした。

おっさんは、あたしを通り過ぎ、なぜか後ろにいた学年でも有名な美人松川さんに、ビラを渡そうとしていた。

松川さんは顔を真っ赤にして、あたしの横を走り抜けた。

遠ざかる松川さんの後ろ姿を、見送るあたしのビラを受け取る形で固まった手に、何も言わずに、ビラが渡された。

その瞬間、ビラが光り輝き、天井から何かが落ちてきた。

「痛っ!」

それは、あたしの頭にぶつかり…廊下に転がった。

それは、赤い眼鏡ケースだった。

その転がるケースを見たおっさんは、目を丸くし、その場でブリッジをした。

「き、君が乙女レッドなのかああー!」

興奮気味のおっさんはブリッジを成功させたのはいいが、起き上がることができなかった。

「乙女…レッドって何?」

頭の痛みで動けるようになったあたしは、廊下に転がる眼鏡ケースを見つめた。

「ほお…。これは、これは」

あたしの教室の隣にある女子トイレから、ハンカチで手をふきながら、背広姿の男が出てきた。

「また変質者?」

あたしは思わず、一歩下がった。

「フッ」

男は笑うと、

「それも…レッドとはな。私には、ツキがあるようですよ」

ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「何？」

男の全身から漂う異様な雰囲気、あたしは身の危険を感じ取っていた。

「気を付ける！乙女レッド！あいつは、怪人だ！」

ブリッジの体勢から動けないおっさんの胸筋の右だけが激しく、痙攣していた。

「わたしの胸筋レーザーが、激しく反応している！間違いない！乙女レッドよ！乙女ケースを取れ！」

「乙女レッドって、誰よ！」

あたしには、状況がわからない。

「フン」

背広の男は足を止め、左側にある窓から、空を眺めた。

「よかったですね。月が出てますよ。まだ明るくはないですけど…」

「月？」

あたしには、意味がわからない。

「本当ならば、乙女ソルジャーになる前に殺せと言われていました

が…どうせなら見てみたい！伝説の力を！」

男は、あたしの教室の前で止まり、じっとこちらを見つめている。

「レッド！チャンスだ！」

おっさんは起き上がるのを諦め、ブリッジを壊すと、背中を廊下に落とした。

そして、転がると、眼鏡ケースを素早く手で掴み、立ち上がった。

「レッド！変身だ！」

おっさんがケースを開けると、赤い眼鏡が飛び出し、あたしの顔に勝手にかかった。

すると、あたしの周りを赤い花びらが舞い、それが全身に張りつくと、戦闘服が変わった。

赤い戦闘服に身を包んで、眼鏡をかけたあたしが廊下に立っていた。

「な、なにが起こったの？」

あたしは突然の出来事に、ただ困惑するだけだった。

「戦え！行け！乙女レッド！」

あたしの後ろに素早く隠れたおっさんは、背広の男を、あたしの肩越しに睨んでいた。

「な、何？」

もおゝすべてが理解できない。

「乙女レッド！その力見せて貰おうか！」

背広の男は、持っていた鞆からある物を取り出した。

「表は、普通のセールスマン！しかし、その実体は！怪人セールスマン！」

「いつしょかい！」

思わず、突っ込んでしまった。

「いつしょではない！表と裏の違い！思い知らせてやろう」

セールスマンが取り出したのは、ある教材だった。

その教材に、セールスマンが瓶から粉を振り掛けた。

すると、教材から黒い文字の大群が飛び出し、あたしの全身に絡みついた。

「え！」

あたしの目に、数列が並ぶ。

「乙女レッドよ！この計算を解かなければ、お前はこの攻撃から逃

れることはできないぞ」

数字の束が、あたしの全身を締め付ける。

「きゃ…」

と悲鳴を上げようとした瞬間、数字の大群は消滅した。

「あれ？」

消滅した数字達に、あたしは驚いた。

「ま、まさか！解いたのか！」

セールスマンも驚いていた。

「あり得ない！」

攻撃を受けた瞬間、あたしから離れたおっさんも驚いていた。

「乙女ソルジャーが、数学をできるはずがない！」

「どういう意味よ！」

あたしは振り返り、おっさんを睨んだ。

「解けたとしても、早すぎる」

男は、手にしていた教材を確認した。

「あれくらい！何とか解けるわよ！ちょっとだけ焦ったけど…」

冷や汗を脱ぐおうとするあたしに、セールスマンの叫びが届いた。

「間違った！こ、これは…小学五年生のドリル！」

「え？」

セールスマンが持っていたのは、小学生の教材だったのだ。

「こ、これではない！」

セールスマンはドリルを投げ捨てると、鞆の中を漁った。

「ない！ない！ないいい！……はっ！そ、そうか！」

セールスマンは思い出した。

「サンプルとして、配り終えたんだった」

ポンと手を叩くと、もう一度鞆の中をチェックした。

「おっ！」

と、一番奥にあった教材を取り出した。

その教材には、大学受験の為と書かれてあった。

セールスマンはあたしの顔を、ちらつと見ると、

「これは…かわいそうだ」

教材をしまった。

「ち、ちょっと！…どういう意味よ！」

少し憐れんだように、あたしを見たセールスマンの視線が許せない。

「助かったな！レッド！」

あたしの後ろで、おっさんがガッツポーズを取った。

「あのねえ！あたしは、比較的数学はいけるの！駄目なのは、英語！」

馬鹿にされてるのがムカッとして、あたしは思わず口走ってしまった。

「英語かあ！」

セールスマンにはやりと笑うと、中学二年の英語の教材を取り出した。

「しまったあ！」

あ逃げようとしたが、英単語が絡み付き、あたしの視界にこの英単語を訳せの文字が踊る。

「アルファベット嫌い！日本語がいい！」

英単語が、全身を締め付ける。

」の文字が、変な感じでスカートを前から捲くし上げた。

「きゃ！見えてる！見えてる！」

パニックになるあたしと、

「お！」

パンツを見て、動きが止まるセールスマン。

そして、前まで見に来たおっさん。

「きゃあ！見るな！変態！」

「わたしは、変態ではない！月の使者！半月ソルジャーだ！」

あたしのパンツをガン見しながら、ポーズを決める半月ソルジャーに、

「見るな！変態！」

あたしは何とか、スカートの捲れをなおそうともがいた。

だけど、もがけばもがく程…なぜかスカートが釣り上がる。

「レッドよ！これは、変態行為ではない！」

視線を真っすぐに外さない半月ソルジャーは、あたしと目を合わせ

ずと言った。

「乙女レッドは恥じらいの戦士！恥じらえば、恥じらう程！パワーが上がるのだ！」

半月ソルジャーは、あたしのパンツに向かって、ガッツポーズを取り、

「ファイトだ！レッド！」

「こ、こいつらあああ！乙女のパンツを見やがってえ！」

あたしのパワーが上がる。

だけど、英単語の鎖は外れない。

「ハハハ！馬鹿目！問題を解かなければ、外れるか！」

半月ソルジャーの隣で、あたしのパンツを見ているセールスマンが、高笑いをした。

そりゃあ…そうだ。

パワーは上がっても、学力は上がらない。

「うつつ…レッド！」

半月ソルジャーは、拳を握り締めると、

「仕方がない！緊急事態だ！月影ロボを発進させるぞ！」

「何!？」

セールスマンが隣で驚いた。

「乙女ソルジャーが戦えないとき、月影ロボが現れるのだ!……もう君のパンツ飽きたし……」

最後は小声で言った半月ソルジャーは、廊下の外……空を指差して叫んだ。

「月影ロボ発進!」

「え?」

「何だと!等身大の戦いで、ロボットだと!卑怯な!」

半月ソルジャーの指差す方を反射的に、あたしとセールスマンは見た。

「見よ!この雄姿!全長135……」

「どこにいるのよ!」

もう暗くなった夜空には、月以外……何もない。

「ぐえ!」

あたしが縛られながら、巨大ロボを探していると、そばで蛙の鳴い

たような声が聞こえた。

前を向くと、セールスマンの体、くの時に曲がっていた。

「センチ！」

半月ソルジャーは夜空から、セールスマンの方へ指先を移動した。

そこには、全長135センチの小さなロボットが、セールスマンの股間に正拳突きをたたき込んでいた。

「ちいちゃー！」

あたしはパンツを晒しながら、月影ロボを見つめた。

その場で崩れ落ちていくセールスマンに向かって、半月ソルジャーが叫ぶ。

「月影ボイス！」

いつのまにか、テレビのリモコンのようなものを持っている半月ソルジャーは、あるボタンを押した。

すると、月影ロボから声がした。それも、半月ソルジャーの声だ。

「この粗チンが！潰すまでもないわ！×××して、××で、それでもって×××だ！」

とても、ヒーローロボとは思えない暴言を吐いた。

だけど、その暴言はセールスマンには届いていなかった。

股間に鉄拳を食らわされるといふ微妙な攻撃に、気を失っていたのだ。

すると、あたしを縛っていた英単語も消えた。

「お、恐ろしい相手だった」

半月ソルジャーは冷や汗を拭くと、あたしの方に体を向け、握手を求めた。

「ナイス！パンツ！じゃない…ナイス、ファイト！」

「ふざけるな！」

あたしは飛び蹴りを、半月ソルジャーに食らわした。

足が、半月ソルジャーの顔面に食い込んだ。

「……ま、また見えてるぞ！」

倒れながらも、パンツを見る半月ソルジャー。

「きゃー！」

あたしは慌てて、スカートを押さえた。

「フッ」

なぜか：鼻血を流しながらも、不敵に笑う半月ソルジャー。

リモコンを操作すると、月影ロボは廊下を歩いて、消えていく。

「月影ロボは、君のピンチのときには、どこからともなく現れる！」

「そんなことより！こいつと、あんた！そして、この姿は何なのよ！」

「それはな！」

半月ソルジャーは鼻血を拭わずに、あたしに背を向けて、話しだす。

「いかがでしたか？乙女戦隊月影！楽しんでくれたかな？まだまだ謎はつきないけど！お兄さん、次回も頑張るぞ」

ガッツポーズをとる半月ソルジャー。

「誰と話してるのよ！」

「次回！乙女戦隊月影！第二話！【新たなる戦士】！！」

「ちょっと！あたしを無視するな！」

「お楽しみに！」

そして、またポーズを決めると、

「月の裁きを、心して見やがれええ！」

と言いながら、ダッシュで廊下を走り抜けていく。

「ちょっと！おい！」

恥ずかしい格好のあたしを一人残して。

何とか眼鏡を外すことで、普通の学生に戻ったあたしは、セールスマンを残して、教室から恥ずかしいものを回収すると、そそくさと学校を後にした。

次の日。

セールスマンはいなくなっていた。

当たり前か。

そして、放課後になり、掃除当番のあたしが教室内の用具箱を開けた時…そいつはいた。

掃除道具の奥に、月影ロボ。

視線を下に向けると、コードがのびていて、目で辿ると、教室のコンセントに繋がっていた。

あたしは、無言で用具箱を閉めると、コンセントまでいき、線を引き抜いた。

つづく。

# 《月影通信》

はあ〜い！よい子のみんな！元気かな？

月影通信のお時間だよ。

このコーナーを担当する、みんなのお姉さんこと、大月学園一年生  
！黒谷蘭花だよ。

これから、よろしくね（＾－＾）

今回始まった乙女戦隊月影！どうでしたか？

え？

戦隊な・の・に…

一人だっ たつてえ。

ごめんなさい！

次は増えるからね。

許して（＾．＾）b

さて、月影通信では、毎回出てきた技や、武器を紹介します！

今回は月影ロボ！

全長135センチ！

小さな体を利用して、死角からのパンチ！

あと、月影ボイスは、五つの言葉を録音できて、相手に精神的ダメージを与えるらしいの。

動力は、電気！六時間の充電でOK！

単3でも動くみたいよ！

きゃ！エコロジー！

じゃあ、次回の乙女戦隊月影も見てね！

みんなのアイドル！蘭花でした。

では、みなさんへまたね (^ε^)  
- Chu!!

## 第2話 新たなる戦士

学園に危機が迫っている！

謎の変なおっさん…半月ソルジャーにより、無理矢理訳がわからない戦いに巻き込まれたあたしは、

なぜかまた恥ずかしいものを忘れて、途中まで帰っていたのに、また逆戻りすることになってしまった。

校門に着いた時、嫌がらせのように月が出ていた。

いつも綺麗と眺めていた月を、怨むことになるなんて…。

しばらく、月を見上げていたあたしは、ため息をつき、

「やっぱ…帰るか」

後ろを向こうとした時、

声がした。

「この物語は、学園を守る乙女レッド！結城里奈、結城里奈の恥じらいと青春の物語である。結城里奈、結城里奈」

前みたいに頭の中に響いてるのかと思ったら、校門の向こう体育館の真横で、拡声器を持った半月ソルジャーが、叫んでいた。

「人の名前を連呼するな！」

あたしはわなわなと震えながら、怒りで駆け出した。

拡声器を持った半月ソルジャーは、逃げる。

「待ちやがれ！」

あたしは、校内に再び入ってしまった。

罨にはまったのだ。

乙女戦隊月影 第二話。

【新たな戦士】

スタート。

半田響子は、焦っていた。

もう2ピー歳である。

後がない。

スタイル抜群！ナイスバディである自分が、行き遅れるとは……多分、神様も予定外のはずだ。

女子高に閉じ込められているというのが、最大の理由であろう。

保健室に勤務している半田は、悶々とした日々を過ごしながら、出会えない生活からの脱却を望んでいた。

だから、今日はお見合いコンパなるものに参加したのだ。

妙な雑居ビルの一室に集められた八人の男女。

大人の色気を基準値以上に持ち合わせる半田は、無敵なはずだった。

しかし、人生には誤算がつきものだ。

参加メンバーを見た時、半田は絶句した。

（わ、わかい！）

多分、皆…十代である。

しかし、男側はチャライ！

教師ならば、注意したくなる程の半端ないチャラさである。

これは、ホストクラブに紛れ込んだマダムのノリである。

しかし…しかし…、

しか——しである。

半田は、考え方を変えた。

（チャライから、遊び易いわ）

もう食べてやると、女狼の如き目になった半田。

だけど、誤算があつた。

隣に座つた女である。

その女は、自己紹介もしていないうちに、こう言い放つた。

「今日、あたし…お持ち帰りOKです！」

（え！？）

いきなりの爆弾投下に、逆に凍り付く男達。

あまりの言葉に、無言になる場を、意味が通じていないからと勘違いした女は、さらに追い討ちをかけた。

「今夜、やれます！」

「え！？」

女性陣からも声がした。

「え？マジ！いいの！」

男達の中で、一番残念な男が聞き返すと、

女は笑顔を向けながら、

「お前に言ってねえね！殺すぞ！ボケ！」

細めた目から、刺すような鋭い視線が、残念な男を射ぬいた。

半田はその瞬間、隣に座る女の制服に気付いた。

（あたしの学校！？）

その女生徒の名は、平城山加奈子。

勿論、お見合いコンパは、加奈子のせいで、おかしい空気になり…  
そのまま終わってしまった。

「いい女を…抱く根性もないのかいよ」

会場を出るとき、男性陣に唾を吐きながら、鞆を背負い帰っていく  
加奈子の後ろ姿に、

半田は、何か運命のようなものを感じていた。

「半田先生」

会場を出て、雑居ビル内の廊下で立ちすくみ、加奈子を見送っていた  
半田は、後ろから突然声をかけられて、振り返った。

「あ、あなたは！」

その出会いが、半田の運命を変えることとなる。

そして、物語は冒頭に戻る。

半月ソルジャーを追い掛けて、校舎内に戻ったあたしは、ある教室の前まで、誘導された。

半月ソルジャーは身を屈めると、教室内を指差した。

「な、何？」

教室内を覗いたあたしは、その中で、補習を受けている生徒の姿を見つけた。

そして、

「お兄ちゃん！」

教壇に立ち、補習を担当しているのは、あたしの兄…結城哲也だった。

「男の方ではない」

半月ソルジャーの言葉で、あたしは補習を受けている生徒を見た。

「夏希!？」

たった一人で補習を受けているのは、同じクラスの五月雨夏希だった。

「あの子…補習受けてたんだ」

驚くあたしに、半月ソルジャーはさらに驚く言葉を発した。

「彼女は、乙女ブルーだ」

「え!？」

あたしは、目を見張った。

机の横にかけられている鞆の中から、青い眼鏡ケースが見えた。

「夏希が、乙女ブルー!？」

衝撃の事実には、驚いてると、半月ソルジャーはあたしのスカートを引っ張った。

「もう一人…乙女ソルジャーを見つけている」

半月ソルジャーは、中腰になりながら、あたしのスカートを引っ張っていく。

「ち、ちよつと…」

あたしはスカートを押さえながら、教室の前を後にした。

「あ、あんだね!」

補習をやっている教室から離れたあたしは、半月ソルジャーの頭を叩こうとした。

あたしのパンチを避けると、半月ソルジャーはスカートから手を離し、廊下を走りだした。

「待ちなさいよ！」

あたしも、廊下を走りだした。

そんなあたしを照らすように、廊下の外では、もう月が出ていた。

「うーん」

夏希は、頭を抱えていた。

それは、補習の問題が難しいからではなく、

その逆だった。

すらすら解けるのだ。

いつも、テストの問題は解けないけど…他は解ける。

やまが外れてるのだ。

そんな自分が、情けないのだ。

「は、こつやれば…」

黒板に、要点をまとめている哲也は、チョークを置くと、

「これを書き終わったら、今日は帰っていいです」

夏希に顔を向けた。

「……」

夏希は目を細目ながら、黒板に書かれた文字を、必死にノートに写していた。

そんな様子を優しく見守る哲也は、突然扉を叩く音に気付いた。

「うん？」

哲也はそれに気付き、扉に近づくと、ゆっくりと開けた。

「はい？」

その瞬間、哲也は顔にスプレーで、何かをかけられた。それは、催眠ガスだった。その場で崩れ落ちた哲也は、素早く廊下へと出され、扉は一度閉まった。

そんな一連の出来事も、夏希は気付かなかった。

最近、視力が落ちてきたのか…黒板の字が見えなくなってきた夏希は、必死に目を細め、文字と格闘していたからだ。

だったら、一番前に座ればいいのだけど、

それは、夏希のプライドが許さなかった。

（でも、見にくいのもねえ）

だんだんと疲れて来た夏希は、あることを思い出した。

（そうだ！さっき、変なおっさんに会って…天井から、眼鏡ケースがああ！）

夏希は鞆に手を伸ばし、眼鏡ケースに手を伸ばした。

度が合っていないかもしれないけど、物は試し。

夏希は、眼鏡をかけてみることにした。

「すまないな…先生！」

哲也に催眠ガスをかけたのは、用務員のおじいさんだった。

「今、教室にいる女は、乙女ソルジャー！」

おじいさんは、哲也を廊下に横たえたと、フツと笑い、

「しかし…まだあやつは、自分を乙女ソルジャーだとは気付いていない」

おじいさんは着ていた作業服を脱ぎ捨てた。

全身に蔦を巻き付け、下半身には針をモチーフにしたカップをつけたパンツという露な姿を晒した。

「今の内に、この怪人植木蜂が、貴様を殺す！ハハハ！」

高笑いをしながら、扉を開けた植木蜂は、目玉が飛び出す程、驚いた。

なぜなら、乙女ブルーの姿をした夏希が、一心不乱にノートにペンを走らせていたからだ。

「お、乙女ソルジャー！」

予想外の出来事に、思わず後ろに下がった植木蜂は、何かにぶつかった。

「怪人だな？」

耳元に響く低い声に、はっとして振り向こうとした植木蜂は、首許に手刀をたたき込まれた。

「お、お前は……」

意識を失う寸前、崩れ落ちていた植木蜂は、そばに立つ黒い影を確認した。

「……」

無言で、倒れていた植木蜂の頭を踏みつけた黒い影は、開いた扉より、教室の中を見た。

「ブルー……」

廊下の騒動に気付かずに、必死に黒板を睨んでいる夏希を見つめた。

「よく見えるわ！これ！」

夏希は変身して、身体能力が向上したことに素直に喜んでいた。

「だり〜い…帰るのが、だり〜い」

誰もいなくなつた教室で、無造作に並べた机の上で寝転んで、天井を見上げているは、花町蒔絵。

あたしのクラスメイトである。

なのに、なぜか今、蒔絵がいるのは、まったく違うクラスである。

多分ここまで来て、帰るのがだるくなつたのだろう。

「彼女が、乙女グリーンだ」

半月ソルジャーの言葉に、あたしは目を丸くした。

「あの子があ？」

あたしは、思い切り頭を横に振った。

「無理！無理！絶対無理！あの子は、絶対無理！」

あたしがそう言っても、半月ソルジャーは肩をすくめて、

「無理だな。乙女ソルジャーを選出するのは、月の神だからな」

「月の神？」

「そう…月の女神が、決めるんだよ」

「何よ！それ」

あたしが、半月ソルジャーに詳しく問い詰めようとすると、  
どこからか笑い声がこだました。

「ハハハハハハ！」

「何よ！このお決まりの登場の仕方は！」

あたしは、笑い声がした方を見た。

廊下の一番端に立つ男。

「あ、あやつは！」

半月ソルジャーの胸筋が、ピクピク動いていた。

「レッド！あやつは、怪人だ！」

と言うと、半月ソルジャーはあたしの後ろに隠れた。

「怪人？」

あたしは、首を傾げた。

ゆっくりとこちらに近づいてくる男は、どう見てもあたしと同じ学生だ。

「ハハハ！」

学生は笑いながら、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「今日…神は、僕を救ってくれた。電車で、この学園の生徒に触った僕に！警察に通報されかけた僕に！救いをくれた」

「チカン？」

あたしは一瞬、たじろいだ。

「ありのままでいい！ありのままの君でいいと！」

学生は、ものすごいスピードであたしに、向かって走ってくる。

「レッド！変身だ！」

「え!!」

よく変わらないけど、乙女の本能が危険を感じた。

あたしは慌てて、ポケットから眼鏡ケースを取り出し、変身した。

「遅い!」

乙女レッドに変わった瞬間、あたしの胸をわしづかみにする学生の手に気付いた。

「我が名は、怪人チカン!」

にやりと笑うチカンに、

「きゃああ!」

あたしは、悲鳴を上げながら、蹴りを放った。

しかし、チカンは左腕で蹴りを捌くと、

右手を一度離れた。

そして、回り込むように、今度はあたしのお尻を触った。

あたしの全身に、悪寒が走る。

「いやああ！」

あたしの絶叫に、教室内にいた蒔絵は気付いたけど、

「だりい」

顔を上げて、廊下を見ることすら、する気が起こらなかった。

「くそ！」

赤の戦闘服を身に纏い、身体能力が上がったはずのあたしの攻撃を、チカンはことごとくかわしていく。

「この動きは！」

半月ソルジャーは、目を見張った。

あたしの攻撃を、巧みなステップで避けながら、何度もあたしは、胸を触られていた。

その腕の動きが見えない。

「この動き…ボクシングか！」

半月ソルジャーの言葉に、チカンはフツと笑った。

「いかにも」

そして、またあたしの胸を揉む。

「あ、あんたね！スポーツマンが、こんなことしていいと思うの！」

あたしの攻撃は、華麗な足さばきに、当たらない。

「僕のリングは、満員電車。このステップは、満員電車の中でも、すばやく動く為！このジャブは、どんな時でも、一瞬で、尻を触る為！」

チカンは、目に見えない細かいジャブで、何度もあたしのお尻を触る。

「スポーツマンが、エロくないと思うなよ！思春期の男は、エロでいっぱいよ！」

「ち、調子に乗るな！」

あたしもパンチを繰り出すけど、簡単に避けられる。

「どんなにスピードがあろうが、素人のパンチが当たるかよ！」

チカンは、触って揉むと、一度は離れる。

そのような攻撃を繰り返す。

「チカンであることを認め、社会的な立場も捨て、進学も諦めた男の恐ろしさ！思い知るが、いいわ！ハハハ！」

チカンはにやけながら、触り続ける。

「ふざけるな！」

あたしはキリツとチカンを睨むと、チカンの見えないストレートを掴んだ。

「何！」

驚くチカンの拳を握り締めながら、

「例え…見えなくても、同じところを、何度も触られたら、次の攻撃は予測できるわよ！」

チカンは、あたしの胸とお尻しか触っていない。

「な、なるほど」

チカンは口元を緩めると、強引にあたしの手から、拳を抜くと、距離を取った。

「ならば、究極のチカンを見せてやろう！」

チカンは、また突進してくるが、今度はボクサースタイルではなく、身を屈めて、あたしの足を取りに来る。

「男の夢アタック！」

チカンがあたしの短いスカートに手をかけようとした時、

あたしの膝蹴りが、チカンの顔面にヒットしていた。

よくプロレスラーが、負けるパターンである。

鼻血を流しながら、倒れるはずのチカンは、踏張った。

「パンツ！」

膝蹴りの瞬間、もろに見えたあたしのパンツを、ガン見したチカんに、あたしは回し蹴りを首筋にたたき込んだ。

今度は、腕で捌くこともしないで、喰らったのに、チカンは不動の形で、あたしのパンツだけを見ていた。

「恐るべし！怪人チカン！」

半月ソルジャーは同じ男として、理解していた。

「恥ずかしさで、パワーが上がるレッドに対して、あやつは興奮する度に、強くなるのだ！」

半月ソルジャーは拳を握り締め、

「恥じらいと欲望の戦い！どちらが勝つ！」

「この！変態があ！」

あたしが放ったドロップキックを、いとも簡単に受けとめると、チカンは笑った。

「こんな大技が、実戦に有効だと思ったか！」

チカンは、両手で掴んだあたしの足を無理矢理広げると、各足を脇に挟んだ。

「男の夢シリーズ！こんなことをやってみたい！くらえ！この技を！」

チカンは回転しだした。

ジャイアントスイングだ。

「きゃあ！」

狭い廊下で、回転するあたしのスカートが、風圧でめくれた。

「ありがとう！神よ！」

チカンは至上の喜びを感じながら、神に感謝した。

回転したまま、突然足を離されたあたしは、勢いで廊下を転がった。

チカンも、目が回ったらしくて、ふらふらになりながら、廊下の壁に激突した。

しかし、なぜか顔は満足感に溢れていた。

動けないチカンを見て、半月ソルジャーは叫んだ。

「乙女ソルジャーに危機が訪れた時、あいつが現れる！」

半月ソルジャーは、リモコンを股間から取り出すと、

「出でよ！月影ロボ！」

半月ソルジャーの要請に答えて、普段ならすぐに現れる月影ロボが現れない。

「ロボ！」

心配になって、駆け出した半月ソルジャーは、廊下を曲がった瞬間、途中で止まっている月影ロボに気付いた。

半月ソルジャーが急いで、月影ロボに駆け寄った。

充電が切れていた。

それを知った半月ソルジャーは、泣きながら、ロボにすがりついた。

「だ、誰が…コンセントを」

半月ソルジャーは、ロボを抱き締めた。

「神よ…夢が叶いました」

涙を流しながら、恍惚の表情を浮かべるチカンは、立ち上がり、歩き出した。

「今日はもう…満足しました」

清々しい表情で、帰ろうとするチカンは、なぜか動けなくなった。

「な、な、舐めるな」

あたしは、倒れながらもチカンの足を掴んでいたのだ。

立ち上がる瞬間、力任せに、チカンをほおり投げた。

チカンは、廊下の壁に頭を打った。

立ち上がったあたしは、蹴りをチカンの鳩尾に入れると、

「何度も、何度も、乙女のパンツを見やがって！胸を触りやがって！」

今度も胸ぐらを掴み、無理矢理立たすと、頭突きを食らわした。

「舐めるなよ！」

何度も頭突きをくらわし、

あたしは最高にキレた。

「レッド！」

近くの教室のコンセントに、月影ロボをつないでから、

半月ソルジャーはあたしのところに戻ってきた。

そして、そこで行われた惨劇に、引いた。

額から血を流し、血塗れになっているあたしを見て。

のちに、この戦いで女性恐怖症になった…元怪人チカンこと田中孝治（仮名）は、当時を振り返り、こう語ったという。

「女は、怖いですよ。柔らかい柔らかいと思っていたんですけど…無茶苦茶固いです。あそこで何度も何度も殴られて…恐ろしい！！だから、あの日から、私はチカンを辞めました…。振り返ったら、またやられそうで…。あつ！今は、専門学校に通ってます。勿論、バイク通学で」

「レッド…大丈夫か」

あまりの状況に、震えてしまう半月ソルジャーを、あたしは、睨ん

だ。

これが、のちに怪人達に裏で、恐れられることになる恥じらいのレッドの誕生であつた。

頭突きのレッド。

血塗れのレッドと…。

「何か？文句あるの！」

凄むあたしに、たじろぐ半月ソルジャー！。

「な、何も…」

愛想笑いを浮かべながら、後退つた半月ソルジャーは、引きつりながらも、後ろを向いて、話だした。

「というわけで…次回の乙女戦隊月影は…」

「次回って、何よ？」

「え！あ、えつと…予告を…」

「予告！？」

額から血を流しながら、半月ソルジャーの胸ぐらを掴んだあたしに  
怯え、

「ご、ごめんなさい！」

半月ソルジャーは何も言えなくなった。

そんなあたし達の後で、教室の扉を開け、出てきた時絵は、何事にも  
気付かなかったように、歩きだした。

「だり〜い」

と欠伸をしながら。

第二話 終わり。

「あんだ…制服はどうしたの？」

家に帰り、すぐに食卓についた夏希は、ご飯を食べながら、母親の  
言葉に首を傾げた。

「じいちゃん」

食事を終え、父親の驚く顔も気にせずに、テレビを見た後、夏希は自分の部屋に入り、制服を脱ごうとして、絶句した。

青い戦闘服を着た自分が、部屋の鏡に映っていたのだ。

夏希は首を傾げた。

「こんな服…持ってたかな？」

つづく。

## 《月影通信》

はあゝい！

皆さん、月影通信のお時間ですよ。

このコーナーを担当する！みんなのアイドル、黒谷蘭花です！イエ  
イ！

今回は、女の敵！チカンでしたね。

みんなはチカンとかは絶対、してはいけないよ！社会的に、抹殺さ

れるよ。

もし、そういうことをしたくなったら、彼女つくって、二人で部屋で楽しんじゃえ！

キャハ（o^o^o）

今回は、乙女ブルーが登場しました。

変身しなかったけど、グリーンも！

これからが、みんな！楽しみだね。

今回の乙女戦隊月影は、

【闇夜の刃！】

お楽しみにね。

月影通信でした。

また来週！

（^ε^） - Chu!!



### 第3話 闇夜の刃

何事もなかったように、校門を潜り、家路を帰る蒔絵に、誰かが声をかけた。

「お帰りのところ、すいませ〜ん！ちょっとお時間いいですか？」

携帯を打ちながら、歩く蒔絵の前に、現れた男は名刺を差し出した。

「怪しい者じゃないんですよ。わたくしは、眼鏡の買取販売をしているな・か・のと申します！」

「…」

蒔絵は無視するかのように、歩き続けるけど、別にスピードを上げる訳でもない。

「あのですねえ〜。あなたが持つてる緑の眼鏡！あれは、大変貴重な物となっております…」

「…」

「今でしたら、大変お高く買い取らせて頂きますけど…」

「……だりい……」

「あのですね。買い取らせて…」

「だりい」

「……………」

「だりい」

「き、貴様！」

男はキレた。

「だりい」

「さつきから、だりいだりいを連発しやがって！もうやめた！やめた！」

男はスーツのネクタイを緩めると、

「我が名は、サギシ！この名を聞いて、生きていた者はいない」

サギシは、万能ナイフを取り出した。缶詰めとかも開けれるやつだ。

「ふあゝあ…だりい」

ナイフを向けられても、欠伸をして、携帯を打ち続ける蒔絵。

「き、貴様あ！」

サギシは、蒔絵の携帯を左手で払った。

蒔絵の手から、携帯が落ちた。

「携帯依存性か！この現代っ子があ！」

「…」

落ちた携帯を見つめる蒔絵の肩が、わなわなと震え出す。

「さあ！眼鏡を渡せ！」

ナイフをちらつかせるサギシに、蒔絵はゆっくりと顔を向けると、絞りだすように声を出した。

「ウザイ」

その瞬間、蒔絵の鞆の中で、眼鏡ケースが開き、眼鏡が飛び出した。

「き、貴様！変身できるのか！」

狼狽えるサギシの前に、乙女グリーンが光臨した。

「ウザイ」

きりつとサギシを睨むグリーンに、サギシはわなわなと震えながら、ナイフを両手に持ち、

「死ね！」

襲い掛かった。

「てめえ…ウザイ！」

睨むグリーンの目から、突然光ると、ビームを発射した。

「うぎゃあー！」

サギシは吹っ飛んで、丸焼けになり、その場で倒れた。

乙女グリーン。

光線技のグリーンと言われ、全身からムーンビームを出すことができる唯一の戦士。

純粹な破壊力ならば、乙女ソルジャー1である。

蒔絵がウザイと感じると、勝手に変身し、睨む相手をビームで撃ち殺すという自動システムを完備。

その時、関係ない人を見てたら、その人を撃ちます。

恐るべき戦士だが、如何せん…本人にやる気がなかった。

蒔絵は携帯を拾うと、何事もなかったように歩きだしたが、携帯の電池が切れた。

「ウザイ」

蒔絵が顔をしかめた瞬間、光線がでて、近くにあった自動販売機を破壊した。

「ウザイ！ウザイ！ウザイ！」

蒔絵がウザイと言うのに飽きるまで、破壊は続いた。

「最近…この学園に不審者が、多数目撃されている」

授業中、熊五郎は生徒達に注意を促していた。

「昨日も、学園の外だが、自動販売機や、選挙ポスターが破壊されるという事件が起こっており！十分、注意するように」

「へえ」

あたしは席につきながら、大欠伸をした。

別に、あたしには関係ない・・・はずだから。

第三話【闇夜の刃】スタート！

「…というわけで、最近不審者が多いから、気を付けるように」

「はあ？」

半月ソルジャーの言葉に、あたしは顔をしかめ、

「あんたも、そのうちの1人でしょ」

休み時間、あたしと夏希は半月ソルジャーに呼び出されていた。

まあ…夏希はあたしが連れて来たんだけど。

朝登校してくると、眼鏡で変身したことを興奮気味に話してくる夏希に、

あたしは、机に頬杖をつけながら、赤いケースを見せたのだ。

「今回、呼び出したのは他でもない。乙女ソルジャーが、レッド、ブルー…今日はいないが、グリーンが揃ったことにより、やつらも本腰をいれてくるだろうからな」

半月ソルジャーの言葉に、あたしは首を傾げ、

「やつらって、なんなの？」

「そ、それは…」

半月ソルジャーは、口を濁した。

「あのお…あたし、まだ意味がわからないんだけど」

あたしと半月ソルジャーの間で、夏希はただ首を捻っていた。

「あたし達の戦う理由って、何？」

あたしは腕を組み、焦って汗だくになっている半月ソルジャーを見つめた。

「それは、正義の為だ！」

半月ソルジャーはその質問には、即答した。

「ククク…正義だと？」

どこからか、声がした。

「え？」

あたし達しかいないと思われた屋上に、いつのまにかハゲ散らかした小さいおっさんがいた。

多分、月影ロボと同じくらいだ。

あたし達と距離を取り、佇むおっさんを見て、半月ソルジャーは目を見開いた。

「お前は…バーコード」

「久しいな。半ケツ」

バーコードは口元を緩め、

「最後に会ったのは…お前が、組織を抜ける前になるな」

「ク！」

気まずいような顔をしている半月ソルジャーを放置して、あたしはバーコードに近づいた。

「組織を抜けるって、どういう意味ですか？」

あたしの質問に、バーコードは答えた。

「やつは元、我が組織の怪人半ケツ仮面。ある日、開発中の小型ロボと、折角組織が回収した…眼鏡ケースを持って、やつは脱走したのだよ」

「脱走？」

「そう、こいつは組織の裏切り者！」

「ち、違う！我は月の使者！半月ソルジャー」

ポーズを決めて、会話を遮ろうとした半月ソルジャーを無視して、あたし達は会話を続ける。

「こいつは、研究所から、乙女ケースを盗み出し、逃げたのだ！我々は、この学園まで追い詰めたのだが…」

ここで、回想シーン。

月影ロボで応戦しながら、学園内に逃げ込んだ半月ソルジャーが両手に抱える数個の眼鏡ケース。

必死に走る半月ソルジャーは突然、何も無いところで転んだ。

倒れた衝撃で、腕の中から飛び出す眼鏡ケース達。

そのまま、地面に転がると思われたが、

なんと！眼鏡ケースは空中に浮かび…各々学園の中に飛び去って、消えたのだ。

「貴様のせいで、三人もの乙女ソルジャーを目覚めさせてしまった…しかし、まだ全員が揃ったわけではない！今ならば、貴様達を倒し、眼鏡だけを回収すれば！」

バーコードは、着けていたカツラを取った。

「え？ハゲ散らかしてるのは…カツラ？」

あたしが驚いていると、カツラを脱いだバーコードの頭は、ガラスのようにきらきらと輝く…スキンヘッドになった。

「ハハハ！月のご加護がなければ、乙女ソルジャーにはなれまいて！しかし、我は違う！太陽こそが、我に力をくれる」

怪人バーコードの頭は、ソーラー電池内蔵だ！

どうせハゲたのなら、太陽を直に浴びるのならばと組織に改造された彼は、携帯やiPodを充電できる優れものだ。

それだけではない。

「くらえ！」

「え？」

頭から伸びた光が、あたしの手の甲に当たった。

数秒後、

「熱！」

あたしは思わず、手を光から離れた。

バーコードの頭は、虫眼鏡のように、紙とかを燃やすことができるぞ。

だけど、燃やすには時間がかかる。

「地味な攻撃しやがって！」

あたしは、乙女ケースを取り出した。

「変身！」

だけど、眼鏡が装着されない。

「無駄だ！月の光がないと、乙女ソルジャーにはなれんわ」

バーコードはフツと笑うと、脱いだカツラを手にして、裏返した。

「くらえ！汗と加齢臭パンチ！」

それを手に巻き付けると、あたしに向かってくる。

「ひえ〜！」

ツンと鼻に来る臭いをさせて、迫り来るバーコード！

「これは…何なのよ！？」

夏希には、何がどうなってるのかわからない。

逃げるあたしから、対応が遅れた夏希に、ターゲットを変えたバーコードは、夏希の顔面にパンチをたたき込んだ。

恐るべき臭いにより、夏希は気を失った。

「夏希！」

あたしは、夏希に駆け寄ろうとしたけど、カッラを振り回すバーコードに近付けない。

「レッド！」

半月ソルジャーは、股間に手をいれると、リモコンを取り出した。

「出だよ！月影ロボ！」

半月ソルジャーの叫びに呼応するかのように、屋上の扉を開けて、颯爽と登場した月影ロボ。

「馬鹿目！」

バーコードも股間から、リモコンを取り出した。

「何！？」

混乱する月影ロボ。

そして、

月影ロボは、半月ソルジャーの股間に鉄拳を食らわした。

「向こうの方が、最新型か…」

泡を吹いて、倒れる半月ソルジャー。

「半月ソルジャー！」

あたしは、カツラから逃げながら、舌打ちした。

「逃げられぞ！レッド！」

変身できないあたしを挟むように、バーコードと敵になった月影ロボが困んだ。

「敵が…増えてるじゃないのよ！」

夏希と半月ソルジャーは、気を失っている。

「さあ！さつさと乙女ケースを渡せ！これは、もともと我ら組織のもの！」

右手でカツラを振り回し、左手でリモコンを持つバーコード。

別に、乙女ケースなんか渡してもいいのだけど…

あのカツラだけは勘弁してほしい。

あたしは、自分のいるところを確認した。扉は近い。

乙女ケースを投げて、その隙に逃げようと考えていると、何かがあたしの上空を飛び越えた。

それは、屋上の入口の上からだった。

黒い影があたしの頭上を飛び越えて、バーコードの頭の上に、着地した。

「誰だ？」

いきなり頭の上に乗られて、腰が下がるバーコードが上を見ようと首を動かした瞬間、

上に着地した人物は、頭を蹴ってジャンプすると、床に着地するまでに、バーコードの首筋、そして、リモコンを持つ左手に、蹴りを入れた。

リモコンが中に舞う。

そのまま軸足を変えると、汚いカツラも蹴り飛ばした。

その間、数秒！

後ろに倒れるバーコードと、床に落ちたリモコンを踏み潰すのは、同時だった。

「あ、あなたは？」

驚くあたしに、謎の人物は黒の眼鏡ケースを見せた。

そして、倒れているバーコードを睨み、

「闇があるから、あたしがいる！悪より、黒いあたしが、悪を断罪する！」

そして、またジャンプすると、バーコードの頭を踏みつけた。

「月夜の刃！乙女ブラック！」

ソーラー電池の頭が割れた。

「お、乙女ブラックだと！」

バーコードはブラックの足を払い、何とか立ち上がると、わなわなと震えだした。

「大丈夫？レッド」

あたしの方をちらりと見た横顔で、ブラックが誰なのかわかった。

「生徒会長！」

大月学園生徒会長九鬼真弓。

漆黒の腰まである黒髪に、長い睫。スレンダーでしなやかな体に、クールな佇まいは…大月学園付き合いたい人、No.1だ。

まあ…女子高だけど。

「九鬼先輩が…ブラック！」

驚いているあたしに、九鬼は言った。

「呼び捨てでいいわよ。同じ戦隊の仲間なんだから」

九鬼はあたしに微笑むと、バーコードには冷たく鋭い視線を浴びせた。

「そ、そうか！ここ最近、この学園に送り込まれた怪人達がことごとく倒されていたのは、貴様の仕業だったのか！」

バーコードは震える手で、九鬼を指差した。

「あたしは、この学園を守る生徒会長！そして、乙女ブラックでもあるわ。この学園を汚す者を許す訳には、いかない」

九鬼は、ゆつくりと腕を前に出すと、指で手招きした。

「かかってきなさい」

「調子に乗るなよ！変身できない女子高生ごときに、我が負けるか」

バーコードはカツラを九鬼に向かって投げた。

「フン」

九鬼は軽く避けた。

しかし、その行動は誘いだった。

「くられ！」

バーコードは頭を突きだした。

禿げた頭が、太陽の光を反射して、眩しいくらいに輝いた。

あたしは、あまりの眩しさに視界が真っ白になった。

「死ね！」

にやにや笑いながら、九鬼の足を取ろうと、バーコードは腰を屈め、タックルの体勢になった。

「え？」

バーコードは驚いた。

目の前に、九鬼がいない。

「お前達の行動など、予想できる」

九鬼は目をつぶりながら、ジャンプしていた。

そして、膝を曲げると、腰を屈めたばかりのバーコードの背中に落下した。

「ぐぎゃあ！」

背中が変な感じに曲がったバーコードから離れると、

九鬼は回し蹴りをバーコードの顎にヒットさせた。

「馬鹿な…っ、強い…」

バーコードは一瞬、意識を失った。

その一連の動きに、あたしは啞然としていた。

明らかに強い。

変身していないのに強い。

九鬼は倒れているバーコードに、腕を組みながら、近づくと蹴り起こした。

「！」

はっとして、意識が戻ったバーコードは慌てて立ち上がった。

「馬鹿な…馬鹿な…違う…違う！私は負けてない」

バーコードは明らかに、怯えていた。

それも九鬼を見てではない。

九鬼は訝しげに、眉を寄せた。

「わ、わたしは…嫌だああ!」

屋上から逃げ出そうとするバーコードは、突然体を痙攣させると、動きを止めた。

すると、空から黒い物体が落ちて来て…バーコードの頭から覆い被さった。

「わたしは…なりたいたくない…下っぱに」

その声も虚しく、バーコードは全身を黒タイツに包まれた。

「キイイ!」

怪しい奇声を発しだしたバーコード。

それに、呼応したかのように、屋上の金網をよじ登って、他の黒タイツ達が現れた。

「何これ…」

突然現れた黒タイツ軍団に、気持ち悪くなるあたしと違い、

九鬼は鼻を鳴らすと、

「なあ〜んだ。下っぱになっただけか」

残念そうに肩を落とした後、ゆっくりと息を吐き、身構えた。

「キイイ!キイイ!」

奇声を発する下っぱ達を睨み付け、

「負け犬が、吠えるな！」

九鬼は、襲いかかってくる数十人の下っぱを迎え撃つ。決して自分からは、攻撃しないで…。

数分後、屋上に転がる下っぱ軍団。

「す、凄い…」

あたしは、感動した。

カウンターってやつだろうか？

九鬼は、ほとんどその場を動くことなく、全員を倒したのだ。

「驚くことはないわ」

下っぱ達が動かないのを確認してから、九鬼はあたしを見た。

「あたしは、あなた達の先輩で…生徒会長。学園を守る為には、それ相当の力があるのよ」

「で、でも…何か…強すぎるような」

あたしの言葉に、九鬼は苦笑すると、

じつとあたしを見て、

「あたしは、月夜の闇と同じ黒…。あなた達、他の色は、夜空を彩る星と同じ。輝いているのよ。特に、あなたはレッド！輝く星…恒星と同じ」

九鬼はにこつと笑い、

「あなたは、誰よりも強くなるわ」

「…」

九鬼の言葉に、あたしは何も言えなくなった。

なぜなら…微笑む九鬼の瞳の奥が、とても悲しそうだったからだ。

「九鬼…さ」

まだ呼び捨てにできないあたしに、いきなり九鬼は抱きついた。

「危ない！」

あたしがいた場所が、破裂した。

「フッフ…流石は、乙女ソルジャー。我の一撃をかわすとはな」

空中に浮かび、銃口をあたしに向けている謎の怪人…ではなかった。  
明らかに、人とは違う生物。

腰に帯刀し、左手は銃口になっていた。

目は一つしかない。

「ま、まさか…魔神か！」

九鬼はあたしを庇いながら、真上を見上げた。

「いかにも！私は、下っぱや怪人より上の階級にいる魔神！ジュウトウホウイハンダーだ！」

「ジュウトウホウイハンダー…？」

あたしは、空に浮かぶ魔神を見上げた。

「フッ」

ジュウトウホウイハンダーは、不適に笑うと、

「ジュウトウホウが名字で、名がイハンダー！気軽にイハンダーと呼んでくれたまえ」

気軽というわりには、銃口はあたし達に向いている。

「レッド」

九鬼はあたしを背にして、

「あなたは、まだ…戦い方を知らない。乙女ソルジャーという戦士の戦いを」

九鬼は乙女ケースを、イハンダーに向けて突きだした。

「何の真似だ？月がなければ、変身できまいて！」

だけど、九鬼は口元を緩めると、

「変身」

呟くように言った。

黒い薔薇の花びらが舞いながら、九鬼を包むと、

そこに戦士が姿を見せた。

「乙女ブラック！？」

あたしは、変身した黒の戦闘服を身に纏った九鬼の後ろ姿を見つめた。

「乙女ブラック…参る」

次回！

乙女ブラックの技が、闇を切り裂く！

そして、もう一人の戦士が現れる！

次回、乙女戦隊月影！第四話

【乙女ソルジャーの秘密】

にご期待下さい。

《月影通信！》

はあゝい！

皆、元気かな？

月影通信のお時間ですよ。

このコーナーを担当する黒谷蘭花です

今回は、生徒会長が出てきたから、ちょっと雰囲気違ったね。

あの人真面目なんだよねえ。

さて、今回出てきたのは、魔神！

怪人を上回る強さを持つ恐ろしい敵です。

でも、乙女ソルジャーは負けないからね。

今までは、ただの変態だったからね…。スタッフも、もう変態が思い付かないみたい。

フェチ関係はでるかもよお！

今のところわかっているのは、

レッドは恥じらうほどパワー上がる！

グリーンは、ビームです。

レッドの頭突きは必殺技といえるのでしょうか…。

というわけで、次回もまたお会いしましょうね（＾ 3 ｾ）  
・

## 第4話 乙女ソルジャーの秘密

「乙女ソルジャー…参る！」

ブラックは、キリツと上空に浮かんでいるイハンダーを睨んだ。

「あり得ん！月の光がないのに、どうして変身できる！」

イハンダーは銃口をブラックに向けると、銃弾を乱射した。

「…」

ブラックは、両手を円を描くように旋回させると、すべての銃弾を叩き落とした。

「な！？」

啞然としているイハンダーを無視するように、ブラックは後ろにいるあたしに言った。

「乙女ソルジャーの身を包むムーンエナジーを制御できれば、鉛の玉くらい恐れることはない」

「クッ！」

銃弾を装填し直したイハンダーが、銃口を向けた時には、ブラックは上空にジャンプしていた。

「乙女レッドが、無限にパワーを上げれるならば、ブラックはスピ

ードを上げれる」

イハンダーが、ジャンプしたブラックに合わせて撃った時には、もう前にいなかった。

「速い！しかし！」

イハンダーは剣を抜くと、真後ろに向けて横風に振るった。

「遅い！」

ブラックの蹴りが、イハンダー背中にヒットした。

「ぐぎゃあ！」

イハンダーは空中から、屋上の床に激突した。

ブラックも床に着地すると、そのまま前転しながら、イハンダーに向かっていく。

回転力をつけ、またジャンプし、体を捻った。

「ブラックルナティック！キック！」

鞭のようにしなった右足のすねに光の刃ができた。

その刃を、レッグラリアットのように首筋に叩き込む。

これが、乙女ブラックの必殺技である。

「クソ」

イハンダーは、キックが決まる瞬間、消えた。

「チッ」

蹴りが虚空を切り裂き、ブラックは着地した。

その瞬間、ブラックは九鬼に戻った。

「やはり…限界か」

あたしは、今までの戦いとあまりにもレベルが違うから、その場から動けなくなっていた。

そんなあたしを、九鬼は横目で見つめていた。

#### 第四話【乙女ソルジャーの秘密】

「馬鹿な…月の光なしで、どうして…」

テレポートしたイハンダーは、謎の校舎内にいた。

大月学園に似ているが、人の気配がなかった。

廊下で息を整えていると、廊下に足音が響いた。

リズムよい音は、確実にイハンダーに近づいていた。

「誰だ！」

イハンダーは銃口を、音が近付いてくる方に向けた。

細長い廊下の向こうから、ゆつくりと近付いてくる男。

きちんとスーツを着ている男が近付いてくる度に、廊下の外の時間が変わる。

日が落ち、夕暮れになり…そして、月が出ていた。

赤い月が…。

男は、イハンダーと3メートル程距離を開けて止まった。

「あ、あなたは…」

銃口を向けたイハンダーの腕が、震えていた。

男の赤く光る瞳が、イハンダーを射ぬいた。

「魔將軍ザン！」

「オホホ！」

イハンダーの真横から笑い声が聞こえた。

振り向くと、廊下の窓が開いており、その向こう…空中に、女が浮かんでいた。

「魔將軍！ビューティー！」

更に、後ろから殺気を感じ、振り返ると、

禿げ頭のグレイのスーツを着た男がいた。

「魔將軍…教頭！」

1人だけ素性が明らかだ。

「なぜ、逃げた？」

教頭の禿げ頭を見つめていたイハンダーに、魔將軍ザンが話しかけた。

「え！そ、それは…」

怯えるイハンダーに、魔將軍ザンは冷たく言い放った。

「怪人と違い…魔神は恐怖の象徴でなければならない。逃げた恐怖など、必要ない」

「月がなくても！変身できるなど聞いていない！」

イハンダーの言葉を、魔將軍ビューティーがせせら笑った。

「そんなに長く変身できるわけがないじゃない。もう少し粘ったら…倒せたのに」

「今の若い者は、忍耐を知らん！」

教頭は、顔をしかめた。

「よって…貴様に罰を与える」

魔將軍ザンは、手を前に差し出した。

その手に握られているものは…！？

「変身」

数秒後、イハンダーの断末魔が廊下に響き渡った。

「生徒会長…九鬼真弓。あなたが、乙女ブラック！？」

あたしは、悠然と佇む九鬼を見つめた。

九鬼は何も言わず、あたしの方に体を向けると、優しく微笑んだ。

「あ、あのおー」

あたしは何か言おうとした瞬間、次の授業を告げるチャイムが、校内に鳴り響いた。

九鬼はあたしに軽く頭を下げると、

「ご機嫌よう」

背中まである黒髪を翻し、屋上の出入口向けて歩き出した。

「あ、あのお…」

呼び止めようとしたけど、何から話していいかわからなかった。

ちょうど、気を失っていた夏希が目を覚ましたので、あたしは九鬼を止めることができなかった。

まだ白目を剥いて倒れている半月ソルジャーと、活動を停止している月影ロボがなんか、虚しかった。

あたしはまだ朦朧としている夏希に肩を貸すと、屋上を後にした。

半月ソルジャー達は、そのままにして…。

「ああ。男がほしい」

コンパに明け暮れていた加奈子は、学校の帰り道…あまりの成果のなさに落ち込んでいた。

毎回勝負下着だし、お泊まりOKを、あたしをなぜ食べないのか？

加奈子は、疑問を持っていた。

もしかして…顔がいけてない？

と思い、鏡を見たけど…まんざらでもない。

それなのに…。

コンパ三昧の日々に、少し嫌気が差し出した加奈子は、ついに禁断の扉を開けようとしていた。

出会い系サイトだ。

加奈子が、携帯を開き…アクセスしようとしたその瞬間！

「もしもし…そこの方！」

横合いから、声をかけられた。

ナンパかと、反射的に笑顔で振り返った加奈子が見たものは！

電柱の影に隠れる老婆だった。

「お主にいいものをあげよう」

と老婆が言ってるのに、加奈子はコンマ一秒で、見切りをつけ、もう前を向いて歩き出していた。

女には、用はない。

加奈子は、携帯をいじりだした。

「おのれえ〜！」

完璧に無視された老婆は、自らの顎に手をかけると、顔の皮をひっぺがえした。

すると、若い女の顔を現れた。

女は、加奈子の後ろ姿を睨み、

「さすがは、コンパクラッシャー加奈子！女に興味はないか」

フツと笑うと、女はどこからか巨大な皮を召喚させた。

その皮が、全身を包むと、

「ヘイ！彼女！」

茶髪のイケメンに変身した。

「俺と遊ばない？」

軽い口調で、加奈子に声をかけた。

すると、数十メートルは離れていた加奈子が、いきなり目の前に来た。

それから…女の記憶がない。

気づくと、2人は朝の日射しの中…ベッドの中にいた。

女は、加奈子に腕枕されていた。

朝のコーヒーを飲みながら、

「よかったよ…今までの男と違って」

加奈子は微笑んだ。

「今夜のことは、忘れない」

女にウィンクすると、携帯で時間を確認した。

「おっと！もうこんな時間か。素敵な時は、すぐ過ぎてしまう」

加奈子は制服を着だした。

そして、鞆を掴むと、まだベッドの上にいる女にウィンクし、

「先にいくね」

部屋を出る前に、加奈子はあるものを女に示した。

「このプレゼント…君だと思って、大切にするよ」

それは、眼鏡ケースだった。

そして、部屋を出る前に、加奈子は言った。

「おっと！おいらのことは、忘れてくれ…。世界中の男が、おいらを待ってるんでね。この体は、君1人のものじゃないんだ」

加奈子は投げキッスをすると、部屋を出た。

女は啞然としながらも、加奈子が出たのを確認すると、

「何とか…ケースを渡せたわ」

一気に疲れを感じた。

それに、大切な何かを失った。

全身男のようにしていたけど…

女にあれはついていない。

身に纏っていた皮を身に脱ぐと…皮はえらいことになっていた。

「あの女…」

えらそうに帰っていったけど…

「絶対…男を知らない」

ラブホを出た加奈子は、眼鏡ケースを握り締めながら、ガッツポーズを決めた。

「念願の男GET！」

そう喜びが、偽りであることを…加奈子を知るのは、先の話である。今はただ…どどめ色に輝く眼鏡ケースが、朝日に照らされ、さらに輝いていた。

「なぜ、わたし達をほったらかしにした！」

放課後、屋上にあたしを呼び出した半月ソルジャーは疲れ果てた顔で、睨み付けた。

どうやら、他の生徒に見つかったみたいで、夕方まで逃げ回っていたらしい。

激しく息を荒げながら、詰め寄る半月ソルジャーを、あたしは腕を組み、眉をよせながら見つめた。

「学校にずっといるからでしょ？放課後まで、離れたらいいじゃない」

あたしの言葉に、半月ソルジャーは言い返した。

「お前達、乙女ソルジャーは、月がなければ、力を発揮できない。だから、わたしが、それまで警備しなければならぬ」

「はあ？」

あたしは顔をしかめ、

「あんた…知らないの？」

「な、何をだ」

あたしの不審そうな顔に、半月ソルジャーはたじろいだ。

あたしは、半月ソルジャーをじっと見つめ、

「別に、月が出てなくても、変身できるんでしょ…本当は」

疑いの目を向けるあたしに、半月ソルジャーは目を見開き、

「な」

本気で驚いてるみたいだった。

「そんなば、馬鹿な…」

「この男は、すべてを知らないわ」

唖然としている半月とあたしの前に、出入口の上から九鬼が降り立った。

「誰だ！」

半月は、突然現れた九鬼に思い切り怯んだ。

そんな半月を一瞥すると、九鬼は黒縁眼鏡を、あたしに示した。

「え」

半月は眼鏡を見て、大袈裟に体を仰け反らした。

九鬼は、あたしに説明した。

「この眼鏡は、夜月明かりを当てておくと、ムーンエナジーを貯めることができるの。でも、3分くらいしか変身できないけど…」

そついうと、九鬼は苦笑した。

「なぜ…お前が、そんなことを知っている！」

気を取り直した半月は、九鬼に食って掛かった。

「フッ」

九鬼は、眼鏡をケースにしまうと、

「研究したのさ。この学園を守る為には、自らの力を知らなければならぬ。己を知らねば、誰とも戦えないからな。だから…あたしは、乙女ソルジャーの能力を研究した」

九鬼は拳を、半月ソルジャーに突きだすと、

「乙女ソルジャーについては、ある程度は理解した！だけど、わからないことがある」

「な！」

半月を見つめる九鬼の目の強さに、思わず後ろに下がった。

「なぜ！この学園に、やつらは現れる？乙女ソルジャーがいるからでは、説明がつかない！やつらは、何を探している！それも、夕方から！それは何故だ？」

「え…」

「乙女ソルジャーが、月の力で変身できるのとは関係あるのではないのか？」

九鬼の問いに、半月は何も言えない。ただ焦るだけだ。

そんな半月に、九鬼は目を細めると、

「やはり…お前は知らないか…。ならば」

九鬼は後ろを振り返った。

口元を緩めると、

「貴様にきこうか？」

「え？」

あたしも、顔を向けた。

「イハンダー！」

九鬼は、そのまま眼鏡ケースを取り出した。

いつのまにか、屋上の端にイハンダーが立っていた。

その全身は、傷だらけであり、明らかに昼間とは違った。

「ま、魔神……！？」

イハンダーを見た半月はその場で震えだし、いつものように逃げることもできない。

「いくわよ！レッド！」

九鬼は、眼鏡ケースを突きだした。

「え！あ……う、うん」

あたしもつられ、慌てて眼鏡ケースを取り出した。

「変身！」

あたしと九鬼は声を揃え、変身した。

「月夜の刃！乙女ブラック！」

「ええって…は、恥じらいの…お、乙女レッド！」

赤と黒の戦士が、屋上に降臨した。

「乙女ソルジャー…」

イハンダーの一つ目が、夕焼けの最後の輝きを受けて、光った。

「昼間の失態を…貴様らの死をもって償う！」

イハンダーの体が変わる。

左腕の銃がマシンガンに代わり、右腕が剣そのものになった。

そして、銃口を向けると、乱射した。

「レッド！エナジーを使って！」

ブラックの言葉に、あたしはどうしたらいいのかわからない。

「え、え！」

ただオロオロするあたしを守るように、九鬼は盾になると、銃弾を両手で受け止めた。

「クッ！」

昼間より、弾数も威力も増した銃弾は、ブラックの動きを止めた。

「甘いわ」

突然、ブラックの死角に、イハンダーが現れ、剣を突き立てて来る。

「ブラック！」

「チッ！」

ブラックは舌打ちすると、長い足で、迫って来るイハンダーの肩口を蹴った。

リーチの差で、何とか剣が刺さる前にイハンダーを、蹴り飛ばしたけど、

その為に体勢を崩したことにより、銃弾を数発浴びてしまった。

「な！」

九鬼は、痛みで片足をコンリートにつけた。

「ブラック！」

何もできなかったあたしを、嘲るようにイハンダーは、笑った。

「乙女ソルジャーと言っても、ただのガキ！戦いに関しては、素人もいいところだ」

顔をしかめるブラックと、何もできないあたしをいたぶる為か…

銃弾の雨は止まった。

しかし、イハンダーの肩から外れた銃の腕が、あたし達の周りを浮かびながら、回転していた。銃口を向けながら。

「分離できるのか」

ブラックは、銃弾が当たった部分を押さえながら、状況を把握した。

「ブラック！」

あたしは、ブラックに駆け寄った。

本当は、迂闊に動いてはいけないのだが、

ブラックはあたしを庇ったのだ。

「心配するな！レッド」

ブラックは顔をしかめながら、近づいてくるあたしを手で止めた。

でも、あたしは止まらない。

ブラックへと、走っていく。

「甘過ぎるわ！」

中に浮かぶマシンガンが、あたしに狙いをつけた。

「レッド！」

ブラックは目をつぶった。

「まず！一人」

イハンダーがにらりと口元を緩めるのと、

ブラックが笑らうのは、同時だった。

ブラックは、近寄ってくるレッドのスカートを捲った。

コンマ数秒で、あたしは絶叫した。

あたしの叫びは、屋上内に轟き、突然の事態に驚いた。

すると、マシンガンから撃たれた銃弾を、あたしの全身が跳ね返した。

「何!」

絶句するイハンダーを無視して、ブラックは立ち上がると、体を捻り、回し蹴りをマシンガンに叩き込んだ。

「ルナティックキック!」

光の刃がすねにでき、マシンガンを切り裂いた。

そして、そのまま後方に回転しながら、ジャンプすると、あたしを飛び越えて、イハンダーにレッグラリアットを喰らわす。

しかし、イハンダーは避けることなく、ブラックの蹴りを胸板で跳ね返した。

ぶっ飛ぶブラック。

「レッド!」

「え?」

恥ずかしさで、真っ赤になっているあたしに、ブラックは言った。

「あたしの蹴りを蹴り返せ!」

空中で反転すると、ブラックはドロップキックのように足を揃え、あたしに足の裏を向けた。

「ええええい！」

あたしは戸惑いながらも、向かってくるブラックの足の裏を蹴り上げた。

「トオ！」

ブラックは、天に向かって、飛び上がった。

そこには、姿を見せたばかりの月がいた。

月と、ブラックの体が重なった時…ブラックの体が消えた。

「何！？」

見上げながら、ブラックの動きを追っていたイハンダーは、絶句した。

ブラックを見失い、焦るイハンダーは数秒後、目の前に、現れた足に、目を見開いた。

「月影キック！」

ブラックの右足が、イハンダーの胸板を貫いていた。

イハンダーは気づかなかったようだけど、

あたしは気づいていた。

満月が、三日月に一瞬変わったことを…。

「ぐは！」

イハンダーはぶっ飛んだ。

後ろに回転しながら、着地したブラックは、鼻を鳴らした。

「1人で、駄目なら、2人の力で！それが、乙女戦隊…月影だ」

キリツと睨む頃には、イハンダーは倒れ、起き上がることができなかった。

ブラックはゆっくりと、イハンダーに近づくと、

「さあ…教えて貰おうか！お前達の目的を！」

土手っ腹に、穴があいたイハンダーを見下ろした。

イハンダーは、自分の体を確認すると、冷笑を浮かべた。

そして、あたしとブラックを見ると、

「…月は、いつからある？その答えを探せ…」

それだけを告げた。

「なんだ！その意味は！」

ブラックが近寄ろうとした瞬間、イハンダーは笑いながら、自らの剣を、首筋に突き立てた。

「見るがよい！敗者の末路を！」

「イハンダー！」

ブラックが駆け寄るよりも速く、イハンダーはそのまま屋上を囲む金網を突き破り、地上へと落下していた。

「クソ！」

ブラックは、破れた金網から、下を覗いた。

しかし、三階建ての校舎の下に、イハンダーの姿はなかった。  
消えていた。

「チッ！」

舌打ちしたブラックは、屋上の出入口に向かって走る。

途中、変身が解け、制服に戻った。

「ごめん！今日も補習でさ」

頭をかきながら、夏希が屋上のドアを開けて、姿を見せた。

その横を九鬼がすり抜け、階段を飛び降りるように、下へ向かった。

「また…何かあったの？」

九鬼の思い詰めたような表情を見た為、夏希があたしにきいた。

「ま、まあね…」

あたしは、眼鏡を外した。

戦闘服から、制服に戻った。

ため息をつくと、破れた金網を見た。

そばで、固まっていた半月は、まだ震えていた。

唇も、微かに痙攣していた。

そんな口元から、半月は呪いのように、同じ言葉を繰り返していた。

「やつらが…来る…。やつらが…来る」

一階につき、イハンダーが落ちたと思われる場所に來た九鬼は、奇妙な殺氣を感じ、振り返った。

「!？」

月の光に一瞬、反射した物体が、九鬼の顔を狙ってきた。

咄嗟に首を曲げ、それを避けた九鬼は、向かってきた腕を掴んだ。

結構がつしりした腕は、包丁を握り締めていた。

「あ、あなたは!？」

九鬼は腕を極め、回転して、そのまま包丁を手から落とそうとした。

しかし、信じられない力が、九鬼を吹き飛ばした。

「な!」

九鬼は、校舎の壁に激突した。

受け身をとることもできず、肩を強打した九鬼は、痛みに顔を歪めながら、自分を攻撃してきた相手を見た。

茶色に近い色をした戦闘服を纏った女が、立っていた。

手には、包丁を持って…。

「お、乙女ソルジャーか…」

九鬼は肩を押さえながら、その女を見つめた。

次回！

乙女戦隊 月影

第五話！

【くすんだ戦士に、恋しくて

ご期待下さい。

《月影通信》

な・ん・か！

シーラカンス…シリアスが、多くなあい？

脚本家、変わった？

月影ののりじゃなくなあゝい？

べ、別に読者減ってもあたしは構わないけどさあゝ

って！

始まつてるじゃない！

言えよ！AD！

こんばんは！

みんなのアイドル黒谷蘭花です。

今回も面白かったね！

次回もよろしくお願いします！

蘭花でした（＾ 3 ＾） -



## 第5話 くすんだ戦士に、恋しくて

「乙女ソルジャー！しかし…」

壁に強打した肩を押さえながら、九鬼は包丁を持つ戦士を凝視した。  
茶色に見えるし…赤みがかった深紫にも見えた。

「乙女…ディープパープルか？」

目の前にいる乙女ソルジャーの色をそう判断しようとした瞬間、乙女ソルジャーは包丁を投げつけてきた。

避けれたけど、壁に包丁が突き刺さった位置は、明らかに九鬼の額だった。

（殺しに来てる！）

九鬼は眼鏡ケースを取りだし、変身しようとしたが、眼鏡がかからなかった。

「チッ」

九鬼が舌打ちした瞬間、乙女ソルジャーは目の前で、拳を握り締めると、体を捻るように回転した。

「乙女ビンタ！」

バックアンドブローのようなビンタが、空気を切り裂き、風圧で、校舎の窓ガラスがサッシごと、決り取られた。

その威力と自らの状況を冷静に判断した九鬼は、後方へとジャンプした。

すると、破壊された窓の近くの出入口から、携帯をいじりながら、蒔絵が校舎から出てきた。

「グリーン！」

九鬼と謎の乙女ソルジャーの間で、足を止めた蒔絵は顔をしかめた。

「え！」

「逃げて！」

九鬼が叫んだが、目を輝かせた蒔絵は振り返り、

「まじかよ！」

走りだし、携帯で破壊された窓をカシャカシャと撮影した。

「すげえ〜！まじ、すげえ〜」

と興奮した後、映り具合を確認しながら、その場を後にした。

別に、九鬼や乙女ソルジャーを見ることもなく…。

ちよつと唾然とした九鬼は、ほおつと胸を撫で下ろした。

「まあ…いいわ。怪我さえしなければ」

九鬼は息を吸うと、ゆっくりと吐き出し、呼吸を整えた。

月影キックで、エネルギーを使ってしまった為、しばらくは乙女ブラックにはなれない。

生身で、相手しなければならない。

（ここは…生徒の出入りが多い！場所を変えないと）

九鬼は、手を拝むように前に出すと、謎の乙女ソルジャーとの距離を計りながら、ゆっくりと摺り足で後ろに下がっていった。

「乙女アイロン！」

謎の乙女ソルジャーは、巨大なアイロンを召喚した。蒸気をはっしながら、赤く燃えた表面を向けて、九鬼に突進してくる。

（勝負は一瞬！）

九鬼は、軸足を確認した。しっかりと地面を踏み締めると、向かってくるアイロンではなく、乙女ソルジャーの目をみつめた。

（…）

攻撃のイメージを頭でシミュレーションする。

「乙女クラッシュ！」

謎の乙女ソルジャーが、アイロンを突きだした刹那、

九鬼は後ろに上半身をのけ反り、アイロンを避けると、ブリッジのように地面に両手をつけると、軸足を蹴り、回転するように、一回転した。

その時、右足は乙女ソルジャーの眼鏡を蹴り上げていた。

九鬼が回転し、地面に着地すると、

眼鏡が空中に浮かぶのは、同時だった。

勢い余って、九鬼の横を通り過ぎた乙女ソルジャーの変身が解けた。

九鬼は落ちてくる眼鏡を、キャッチした。

「危なかった…。きちんと、フレームを調節されていたら…取れなかった」

掴んだ眼鏡を見つめ、九鬼は後ろを振り返った。

変身が解け、気を失っている女を見て、九鬼は驚いた。

「平城山さん!？」

九鬼は、加奈子を知っていた。不純異性交遊の加奈子。

問題児として、生徒会内で有名だった。

「彼女が、乙女ソルジャー！」

倒れている加奈子に近寄ろうとした九鬼は、背中に悪寒が走り、振り返った。

いつの間にか……女が立っていた。

九鬼は、その容貌に絶句した。

いい歳した大人の女が、猫耳をつけ、フリフリのピンクのドレスを着て、立っているのだ。それも、腕を組み、偉そうに少し体を仰け反らしていた。

「……」

九鬼は無視することにして、加奈子に駆け寄った。

「平城山さん」

加奈子を抱き起こそうとした九鬼に、影が落ちた。

「無視するな」

いつのまにか、九鬼の前に、猫耳の女がいた。

見上げた九鬼は、猫耳の瞳の冷たさに、絶句した。

乙女ソルジャー月影

【くすんだ戦士に、恋しくて】

スタート！

「あ、あなたは？」

気丈を装い、九鬼は加奈子を抱き起こそうとしたが、  
突然吹っ飛ばされた。

何もされていない。

猫耳の目を見ただけで、吹っ飛ばされたのだ。

九鬼は何とか受け身を取ると、回転しながら立ち上がった。

「貴様は何者だ！」

一瞬で敵だと判断した九鬼は、構えた。

その様子に、猫耳は鼻を鳴らした。

そして、加奈子の腹を踏みつけると、

「ある時は、ナンパ師！ある時は、イケメン！そして、ある時は猫耳のかわゆい女子！その正体は！」

猫耳は、ピンクのドレスを破り、脱ぎ捨てた。

その瞬間、月が赤に変わった。

「魔將軍！ビューティー！」

全身を黒い鱗のようなものに覆われ、鋭い爪が赤く輝いていた。猫耳が頭の上で、蠢いていた。

「魔將軍ビューティー！」

九鬼は苦々しく、その名を口にした。

「乙女ブラック！九鬼真弓！」

ビューティーは、鋭い爪を九鬼に向けると、

「貴様には、送り込んだ怪人達をことごとく！倒された恨みがある！」

「クッ！」

「同じ乙女ソルジャーで、始末させてあげようと思ったけど…」

ビューティーは、足に力を込めた。加奈子の腹に食い込んだ。

「さすがだわ！他のソルジャーと、年季が違う！」

ビューティーはにやりと笑い、

「だから、特別にあたしが殺してあげるう！」

爪がさらに伸びた。

「覚悟しな！」

「フツ」

九鬼は笑った。

「何がおかしい！」

「あんたを笑ったんじゃないよ」

九鬼は、踏みつけられている加奈子を見ながら、

「うちの生徒が踏まれているのに…震えているあたし自身に笑ったのさ」

九鬼は唇を噛み締め、

「この学校の生徒であり、乙女ソルジャーの仲間である加奈子から、足をのける！」

そう叫ぶと、九鬼はビューティーに向かって走り出した。

そんな九鬼を、ビューティーはせせら笑った。

「変身できない！小娘が、吠えるな！」

「変身！」

九鬼は自らの乙女ケースに、加奈子の眼鏡をつけた。

すると、乙女ケースが輝き、黒い眼鏡が飛び出した。

加奈子の眼鏡から、ムーンエナジーをチャージしたのだ。

「何！？」

驚くビューティーに向けて、ジャンプした九鬼の体が乙女ブラックに変わった。

「ルナティックキック！」

ビューティーを危険と感じたブラックは、いきなり必殺技を繰り出した。

「馬鹿目！魔神に通用しない技が、あたしに通用するか！」

ビューティーは余裕で、両手を広げた。

ブラックは空中で、さらに回転を加えた。

回転する体が、ドリルのようになり、

「二式！」

ブラックは蹴りを放つ瞬間、弓の如くしなりも加えた。

「何いいい！」

ルナティックキック二式を、無防備に食らったビューティーの胸の鱗が、吹き飛んだ。

ブラックはそのまま、ビューティーの真後ろに着地した。

「あたしの鎧が…」

露になった乳房を見て、ビューティーはわなわなと体を震わした。

ブラックは振り向き、もう一度蹴りを放とうとした。

が、

突然、ブラックの体が傷だらけになると、爆発した。

「な！」

自分に何が起こったかわからずに、ブラックは九鬼に戻った。

ダメージは大きくて、九鬼は頭で理解できないまま、膝を落とした。

「オホホ！」

ビューティーは笑いだした。

崩れ落ちた九鬼に、体を向けた時には、胸元はもとに戻っていた。

「だから言ったのよ！胸もない小娘が！あたしに勝てると思ったのか！」

笑う度に、ビューティーの胸が揺れた。

「クソ……」

九鬼はすぐに、立ち上がった。

「あたしは、この学園の生徒会長！生徒が倒れているのに、あたしが倒れるわけにはいかないわ！」

九鬼はまた、乙女ケースを握り締めた。

「まだやる気！」

ビューティーは呆れた。

「へんし…」

「そこで、何してるの！」

突然、九鬼の後ろから声がした。

「チッ」

ビューティーは舌打ちした。

「早く帰りなさい」

その声に振り返った九鬼は、こちらに近付いてくる結城哲也に気づいた。

「先生！」

九鬼は、哲也に叫んだ。

「逃げて！」

「何を言ってるだ？生徒会長といえども、とっくに下校時間は過ぎているぞ。早く帰りなさい」

「先生？」

哲也の普段と変わらない様子に、九鬼ははっとして、振り返った。

「!？」

ビューティーは消えていた。

「誰かいたのか？」

哲也は、九鬼の向こうを見た。

「九鬼さん！」

校舎から、飛び出して来た夏希は、啞然としている九鬼と後ろにいる哲也に気付き、足を止めた。

「どうなったの？」

夏希に遅れて、飛び出てきたあたしは、九鬼の後ろにいる哲也と目があった。

「お兄ちゃん……」

「里奈……」

哲也はあたしに気付いて、顔をしかめた。

「お前も早く帰りなさい！」

「は、はい」

あたしは慌てて、固まっている九鬼の腕に手を回すと、無理矢理その場から動かした。

「行きましょう」

引きずるように、九鬼を連れていくけど、

九鬼はある一点を見つめながら、呟くように言った。

「あり得ない…」

「え？」

あたしは、九鬼の視線の先を目で追ったけど、別に変なところはない。

首を傾げたあたしは、知らなかった。

窓が、破壊されたのに…もとに戻っていたことに。

九鬼ははっとして、

「平城山さん！」

あたしの手を振りほどくと、倒れている加奈子に向かって走った。

気を失っている加奈子を背負うと、九鬼は歩き出した。

「どうしたんだ！その生徒は、大丈夫なのか！」

加奈子に近付こうとした哲也を、場の空気を読んだ夏希が止めた。

「だ、大丈夫ですのぞ」

夏希が壁になっているうちに、あたしは九鬼と頷き合つと、走り出した。

校門を出て、しばらくすると、九鬼は加奈子を道に降ろすと、学園の外壁にもたれさせた。

「この子は？」

あたしは、気を失っている加奈子の顔を覗き込んだ。

知らない子だ。

一年ではない。

「あたしと同じ、二年の平城山加奈子だ」

九鬼は、加奈子の体勢を変え、背中側から両肩を掴むと、気合を入れた。

「そして、乙女ソルジャー」

「乙女ソルジャー！」

あたしは驚いた。

九鬼は頷き、

「敵の幹部に、操られていた」

「う、う、うん…」

加奈子は気がついた。

ゆっくりと目を開けた加奈子は、いきなり視界に映った九鬼に、声を上げて驚いた。

「ま、真弓！」

座りながらも、手だけで加奈子は九鬼から逃げた。

「な、何もしてないからね！け、今朝は何かあったけど…い、今はし、してない」

しどろもどろになる加奈子を、九鬼は冷静に見つめ、

「体はどう？大丈夫？」

加奈子の全身を確認した。

「そ、そりゃあ、昨日のあたしとは、違うけど……って、どうしてあんたが知ってるのよ！ま、まさか！あんた、見たと、とか」

妙に、狼狽える加奈子を見て、九鬼はほっとした。

「何とか……大丈夫のようね」

微笑みながら、九鬼は眼鏡を返した。

加奈子は受け取った眼鏡に、目を落とした。

「こ、これは？」

「フッ」

九鬼は立ち上がった。

「今日はもう遅い。明日説明するわ」

そう言つて、加奈子から離れようとした時、

校門の方から、悲鳴が聞こえた。

「夏希！」

悲鳴は、夏希の声だった。

あたしと九鬼は、校門に向かって走った。

「え！ど、どうしたの！」

置いてきぼりになった加奈子は、九鬼達の背中に手を伸ばした。

「夏希！」

あたしと九鬼が、校門をくぐるとすぐに、夏希がいた。

母から、蛇が生えているという異様な外見をした魔神がいた。

夏希は、無数の蛇に絡み付かれていた。

「ぬるぬるするようお！」

夏希は、あまりの気持ち悪さに泣きそうになっていた。

「うちの生徒に、なんてことを！」

九鬼が、あたしより前に出た。

「私は、魔神ヘビイチゴ！乙女ソルジャーよ！この場で死ぬがよいわ」

ヘビイチゴは、蛇を飛ばしてくる。

九鬼は蹴りで、蛇を叩き落とすと、

「いくわよ」

「う、うん！」

気持ち悪いけど、やるしかない。

あたし達は、乙女ケースを突きだした。

「変身！」

「え！？」

あたし達を追いかけて来た加奈子の目の前で、乙女ソルジャーに変わる。

「闇夜の刃！乙女ブラック！」

「恥じらいの乙女レッド！」

あたし達は、ヘビイチゴに向かって、突進する。

ブラックは速い。

ヘビイチゴの表面の穴から、体毛のように生えている蛇達の攻撃を、

すべてかわすと、夏希に絡み付いている蛇の束を、手刀で切り裂いた。

「大丈夫？」

そのまま、夏希を抱き抱えると、ブラックはジャンプした。

啞然としている加奈子の前に、着地すると、夏希にまだ絡み付いている蛇の破片を払った。

「真弓……」

加奈子は、乙女ブラックになった九鬼を見つめた。

「きゃあ！」

「おのれええ！」

腹いせなのか、すべての蛇が、あたしに絡み付いた。

ものすごい力で、締め付けると、蛇達は舌であたしの全身を舐めまわした。

「き、気持ち悪いよぉ〜」

「レッド……」

九鬼は、あたしに駆け寄ろうとしたけど、どこからか闇に紛れて現れた下っぱ達に囲まれた。

「な、何よ！これ」

加奈子は、全身黒タイツで、棍棒を持った下っぱを見回した。

「チッ！」

ブラックは、夏希と加奈子を背にしながら、下っぱと対峙した。

蛇の舌は異様に長く…首筋や、耳の裏を這い、そしてスカートの中に入っていく。

「い、いつも、あたしだけ」

またお約束のように、スカートが捲れていく。

下っぱは囲みながらも、なかなか近寄って来ない。

少し苛立つブラックに、夏希が言った。

「ブラック！あたしも、戦います！」

夏希は、ブルーの乙女ケースを取り出した。

「変身！」

眼鏡が飛び出し、夏希は乙女ブルーに変わった。

「え！」

加奈子は、夏希の変身に目を丸くした。

「で、でも…どうしたら」

下っぱを見て、おろおろするブルーに、ブラックが言った。

「乙女の武器を召喚するのよ！」

「え！で、でも…どうしたら！」

狼狽えるブルーに、

「月に願うのよ！」

それだけ言うと、ブラックは下っぱに向かっていく。

回し蹴りを、下っぱに食らわすブラック。

「い、意味わからない！」

ブルーはさらに狼狽えた。

「月に手を掲げる!」

裏拳を叩き込むと、ブラックはブルーに顔を向けた。

「きい!きい!」

棍棒を振り上げて、ブルーに襲いかかる下っぱ達。

「きゃあ!」

ブルーはパニックになりながらも、月に手を上げた。

すると、何かが手の中に現れた。

ブルーは、それを下っぱに向けた。

すると、霧のようなものが出て、下っぱ達が苦しみだした。

「これは?」

ブルーは、召喚したものを見た。それは、スプレーだった。

乙女スプレー。催涙ガスを噴射するぞ。

「えい!」

ブルーは、周囲に催涙ガスを噴射した。

ブラックは、空中に飛び上がり、何とか避けた。

「ききいい！」

だけど、中には我慢強い下っぱがいた。

催涙ガスをもとめせずに、ブルーに襲いかかる。

「いやあ！」

ブルーはスプレーを、そいつに投げつけると、また月に手を向けた。

また何かが召喚された。

それを、ブルーは近付いてきた下っぱに、叩き込んだ。

青白い光が、下っぱとブルーの間で発生した。

それは、電流だった。

手にしたのは、乙女スタンガンだ。

ブルーは、右に持ったスタンガンを確認すると、左手を月に向けた。

すると、また何かが召喚された。

ブルーが、それを発動させると、ものすごい音が周囲を震わした。

乙女ブザー。

これで、夜道も安全だ。

「あ、あたしの武器って…すべて、防犯グッズかよ！」

ブルーは、ブザーを捨てると、スタンガンを次々に下っぱに叩き込んだ。

「こうなったら、やけくそよ！」

下っぱ達と戦うブラックとブルーを見つめながら、加奈子は手に持った眼鏡を握り締めた。

「真弓」

特に、ブラックを見つめながら、加奈子は思った。

（あたしは…生徒会長になりたかった…）

コンパばかりに、明け暮れている加奈子だが…

一年の時はこの学園の為に、働きたいと思っていた。

だけど、同年代に九鬼がいた。

誰よりも、この学園のことを考え、特に生徒の為に、身をこにして

働く九鬼を見て、敵わないと思った。

一年にして、圧倒的な票を集め、生徒会長に当選した九鬼。

そんな光を浴びて、働く九鬼…。それなのに、九鬼にはどこか影があった。

こんなに恵まれているのに、満足していないように見えた九鬼が、加奈子は気に入らなかった。

（だけど…）

九鬼は戦っていたのだ。

学園の…生徒の為に…。

（あたしは…）

加奈子は、手のひらの上にある眼鏡に、目を落とした。

下っぱ達は、ブラックの攻撃で、加奈子には近寄れない。

（あんたに…守られるだけなんて嫌だ）

加奈子は、眼鏡をかけた。

（あたしは、あんたと対等でいたい！）

加奈子の姿が変わる。

それは、くすんだ色だった。

普通の人は、この色を知らないだろう。

だけど、加奈子は知っていた。

まだフィットしていない眼鏡を人差し指で上げると、

キラッと前方を睨んだ。

「乙女どめ色！行くぜ！」

加奈子は、前に出た。

「加奈子！」

ブラックは、変身した加奈子を見た。

「真弓……いや！ブラック！こいつらは、任せろ！早くレッドのもとへ」

その言葉に、ブラックは頷いた。そして、ジャンプすると、下っぱの群れを飛び越えた。

どめ色も頷くと、手を月に向けた。

そして、召喚された武器を下っぱの1人に突き立てた。

乙女包丁。

下っぱの腹に、突き立てた包丁を抜くと、リアルに血がふき出した。

血を見て、にやりと笑うどどめ色に、味方であるブルーも引いた。

下っぱも思わず、どどめ色の周りから離れた。

「白か！つまらんな！どうせ、毎回見られるのなら、もっと色っぱいのをはきなさい！」

あたしのパンツを見てる癖に、説教臭く言うヘビイチゴに、ムカついてきた。

「舐めるな！」

あたしのパワーが上がり、蛇の束を一気に引き千切った。

そして、あたしはヘビイチゴに突進すると、頭突きをぶちかました。

「うぎゃあ！」

ヘビイチゴの頭天边が、あたしの額の形にへこんだ。

「私の鋼鉄のボディが！」

「あたしを舐めるな！」

あたしは、蹴りをくらわした。

ヘビイチゴの体が、バランスを崩し、ふらついた。

「レッド！」

頭上から、ブラックの声がした。

「ブラック！」

あたしの正拳突きと、空中から落下してきたブラックのかかと落としが同時に、ヘビイチゴに決まった。

特にブラックのかかと落としは、あたしが頭突きをくらわした場所に、ピンポイントに当たった。

ブラックが、地面に着地すると、

ヘビイチゴの体に亀裂が走った。

「どどめよ！」

ブラックは再び、ジャンプすると、あたしに向かって足の裏を揃えた。

「いけえ！」

あたしは、ブラックの足を蹴り上げた。

天に浮かぶ月に、ブラックの体が重なると、消えた。

数秒後、光輝くブラックの右足が、ヘビイチゴに炸裂し、

「月影キック！」

ヘビイチゴの体が、爆発した。

「やったあ！」

あたしが、歓声を上げると、ブラックは着地して、九鬼に戻った。

魔神が倒された為、下っぱ達は退散していく。

どどめ色に刺された下っぱは、担架で運ばれていった。病院に直行だ。

「真弓！」

「加奈子」

変身が解けた2人は、ただ頷き合った。

あたしと夏希も、そんな2人を見て、頷き合った。

「みんな」

九鬼は、あたしと夏希を見ると、拳を差し出した。

「月影も、揃ってきたわ！このメンバーで、頑張りましょう」

「はい！」

あたしも、夏希…加奈子も拳を突きだし、

4人は拳を合わせた。

「乙女戦隊月影始動ね」

あたしは頷き、戦うことを誓った。

「あれ？なんか…忘れてるような…」

あたしは首を捻った。

乙女戦隊 月影 第五話。

終わり。

そして、次回！

やっと始動した月影に、早くも別れが！

乙女戦隊 月影 第六話

【あばよ！】

にご期待下さい。

《月影通信》

はあゝい！

蘭花です。

月影通信始まるよ。

なんと！乙女戦隊 月影が早くも！

劇場版の公開が決定しました！

みんなのお陰です！

劇場版は、本編よりも数ヶ月先のストーリーとなるようです！

数々の謎が、明らかに！？

では、皆さん！

蘭花でした。

またね。

## 第6話 あばよ！

「月影キック！」

あたし達は、新たな仲間を得て、見事！

魔神を倒すことができた。

だけど…。

「月は、いつからある！その答えを探せ！」

イハンダーの謎の言葉。

そして…。

「ルナティックキック！二式！」

ブラックの新技を喰らっても、びくともいない相手。

「オホホ！」

魔將軍ビューティー。

魔神さえも超える存在に気付き、あたし達は自分達の未熟さを知っ

た。

あたし達は、まだまだだ…。

「し、しまった！」

あたしは、がばっとベッドから、飛び起きた。

時計を確認して、愕然とした。

遅刻確定である。

ベッドからなかなか出られないで、うだうだ考えていると…

時間は過ぎてしまった。

一瞬、枕元に置いてある目覚まし時計の針を遅らそうとしたけど、そんなことをしても無駄と気付き、肩を落とした。

「ど、どうしよう…」

朝礼が始まる前の一年の教室に、

突然九鬼が入ってきた。

「生徒会長！」

教室内に、緊張が走る。

「何かあったのか？」

ひそひそ話の中、生徒の目も気にせずに、

九鬼は蒔絵の席目指して、歩き出す。

「花町さん！」

クラス中の注目の中、九鬼は蒔絵の真横で立ち止まり、

「あなたに、確かめたいことがあるの」

九鬼が話しかけても、携帯をいじることをやめない蒔絵を見下ろし、

「昨日撮った写真を魅せて、欲しいの」

「はーあ？」

蒔絵は、九鬼を見上げ、首を傾げた。

それだけの動作をした後、蒔絵はまた携帯に目を落とした。

少しいらつときたけど、生徒会長たるもの…それくらいで、キレてはいけない。

九鬼は冷静に、口調を荒げることなく、言った。

「教室内での携帯の使用は、禁止されています」

九鬼は手を差し出し、

「携帯を没収します。放課後、生徒会室に取りに来てください」

口調は変えなかったけど、威圧的ではあった。

「はあ？」

無理矢理、蒔絵から没収した携帯を、悪いと思いつつも、九鬼は生徒会室に戻ると、昨日の撮影記録をチェックした。

「やつぱり…」

九鬼は画像を確かめると、携帯を閉じた。

破壊された窓の画像が残っていた。

しかし、登校時も確認しに行ったけど…破壊された形跡はない。

「復元したとかじゃないわ…そんな次元じゃない…」

敵は一瞬で、直せる能力を持っていると考えられた。

「恐らくは…魔將軍ビューティ…」

底知れぬ敵の能力に、九鬼は携帯を持つ手に、汗が滲んでくるのに  
気付いた。

「御姉様」

その時、後ろから声をかけられた。

不意をつかれて、九鬼は一瞬身構えながら、振り返ってしまった。

「如何なさいましたか？」

扉の前に、副会長である桂美和子が、立っていた。

訝しげに、首を傾げる美和子に、九鬼は緊張を解き、微笑んだ。

「何でもないわ」

九鬼は微笑みながら、携帯を没収箱である金庫に入れると、

美和子の横をすり抜け、生徒会室を出ていった。

そんな九鬼の後ろ姿を見送った後、美和子は蒔絵の携帯が入った金

庫に視線を移した。

乙女戦隊 月影 第六話。

【あばよ】

スタート。

なんて、世の中ってやつは、不憫なんだあああああああ！

いい大学にいたって、何になる！

結局！

俺みたいなネクラは、もてないし！

明るい未来なんて、ないんだあ！

だけど、そんな俺に神は、力をくれた。

今は、なんて…爽快な気分なんだろうか！

特に、  
下が！

たまらないぜ！

この開放感は！

八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
！

「ここで、臨時ニユースをお伝え致します。今朝未明…突如現れた下半身を露出した男は、××線の女性専用車両を占拠した後、都市部を疾走し、大衆浴場の女風呂を襲撃しましたが…営業前だった為…店主の佐助さん65才の男性に、下半身を見せつけたそうです」

テレビ画面に、トレーナーを上にかくり、袋のように頭の上で、結んだ男が映し出された。

都市部の中央通りを逆走している。

「特報です！只今、犯人の知り合いである悪の組織から、犯行声明が届きました。犯人は、怪人です！繰り返します！犯人は、怪人です！怪人名は、モロダシ・ダン！最近、身売りされた企業の有名ヒーローを思われる怪人名に！関係者から、苦情が寄せられております」

怪人モロダシ・ダンは、下半身から出るビームで、道路を寸断。

駆けつけた警察車両を破壊、後ろからは悪臭を放ち、道行く人々をパニックに落としいていた。

「なお…犯行声明によりますと、怪人モロダシ・ダンは、今の日本を憂い。国会の早期解散を求めるとともに、俺のあそこは小さくない！世の中に認めさせてやると、社会に対する苛立ちを露にしております」

モロダシ・ダンは、お尻の割れ目に挟んでいるブーメランを尻筋だけで、飛ばした。

ブーメランは、上空を飛んでいる報道各局のヘリコプターを破壊した。

「え、映像が途切れました！只今、映像が途切れました！怪人モロダシ・ダンは、最後に、世界の素人女を憎むと叫んでいる模様！お店の女の人は、優しかったと…歓楽街は、避けているそうです！」

映像が途切れ為、一旦CMに入っただけ、そのタイミングが、少し遅れた。

その為、キャスターの本音が聞こえた。

「馬鹿らしい」

怪人モロダシ・ダンの大暴れを知るはずもないあたしは、いつもの如く、退屈な授業を受けていた。

今は、授業より、シャーペン回しに夢中だ。

前の夏希は、一生懸命の黒板の文字を写していた。

後ろの蒔絵は、命より大切な携帯を取り上げられた為、放心状態になっていた。

変わらない退屈な日常は、突然教室に響いた校内放送によって、打ち消された。

「臨時ニュースをお伝えします。警察から連絡が入りました！恐ろしい力を持った怪人が、女性専門のフィットネスクラブを襲撃した後、こちらに…当校に向かって来ている模様です！繰り返します。変態…もとい、怪人がこちらに向かって来ております。全校生徒は、直ちに避難して下さい！繰り返します！全校生徒は、直ちに避難して下さい！」

放送が終わった瞬間、静かだった教室がざわめき、一斉に立ち上がる。

あたしと、時絵は座っている。

「みんな！慌てずに、ゆつくりと避難するんだ！」

熊五郎に引率されて、生徒達は教室を出ていく。

「里奈！」

夏希が、あたしに駆け寄ってきた。

あたしは、シャープンを回しながら、

「怪人でしょ…どうせ、戦うでしょ」

ため息をつき、

「怪人なんて、ただの変態だから…」

そう言った後、あたしははっとして、スカートをめくった。

「き、今日は、大丈夫」

下着もOKだ。

あたしは、拳を握りしめ、

「来るならこい！変態！じゃなくて、怪人！」

一応、ヒーローっぽく言ってみた。

だけど、かなりやる気はない。

「はあゝ」

深いため息をついたのは、ワンカップ片手の半月ソルジャーだ。

「賢明なる読者は気付いていたと思うけど…前回、わたしは出ていない…」

ぐいっとワンカップを飲み干すと、空になったカップを投げ捨てた。

屋上の出入り口の上に座る半月ソルジャーの後ろに、無数のカップが転がっていた。

「わたしがいなくて！何が月影だ！お前も、そう思うだろ？」

もう泥酔寸前の半月ソルジャーの隣には、月影ロボが座っていた。

何も言わない月影を、しばらく見つめた後、半月ソルジャーはリモコンを向け、ボタンを押した。

月影ボイスだ。

月影ロボは、話した。

「この×××野郎が！てめえなんて××××だ！××××で××××だ！」

半月ソルジャーは、無言でボタンをもう一回押した。

月影ロボは電源が切られ、屋上に風の音だけが、響いていた。

半月ソルジャーは、新しいワンカップを開けると、また一気に飲み干すと、

「あいつのせいだ！あいつが出てから、わたしのポジションが奪われたのだ！」

半月ソルジャーは、ワンカップを握り潰そうとしたが、ガラスであることを思いだし、やめた。

行き場のない怒りを、拳を握り締めることで、我慢した。

「おのれ！乙女ブラック！九鬼真弓！」

「怪人…」

校内に、避難するのが遅れ、取り残された生徒がいなかったかを確認していた九鬼は、廊下の途中で立ち止まった。

そして、まだ太陽が眩しい外を見つめた。

「生徒会長！」

風紀委員である刈谷章子が、大声を上げながら、廊下の向こうから走ってきた。

「どうしたの？刈谷さん」

九鬼は窓から顔を、かけよってきた刈谷に向けた。

息を切らしながら、九鬼の前で止まった刈谷は、重大な事実を告げた。

「裏門！いえ、すべての脱出口が、黒タイトの男達に塞がれて…外に出れません！」

刈谷の報告に、九鬼は奥歯を噛み締めたが、表情には出さずに、

「状況はわかりました。皆さんを体育館に誘導して下さい」

冷静に、指示を出した。

「わ、わかりました！だ、だけど、黒タイトの男達は…」

「心配いりません」

九鬼は刈谷に微笑み、

「やつらの目的は、生徒達をここに足止めすることです。それに…」

九鬼は、刈谷に背を向けると、

「やつらが、危害をくわえるようなら…あたしが、許しません」

九鬼は、表情を引き締めた。

「会長！」

「生徒会は、皆さんの避難を最優先にして下さい。後のことは、すべてあたしに任せて！」

九鬼は、廊下を歩き出した。

正門の方に向かって。

ムーンエナジの充電は、最近の頻繁に起きた襲撃により、されてなかった。

つまり、乙女ソルジャーにはなれない。

だからといって、ここから逃げる訳にはいかない。

九鬼は、制服のネクタイを緩め、戦闘モードへと切りかえ、廊下を走ろうとした。

その時、いきなり横の階段から、何かが転がり落ちてきた。

思わず、足を止めた九鬼の目の前に、肉団子と思わせる小太りのおっさんが、激しく廊下の壁にぶつかりながらも、むくつと立ち上がった。

「あなたは!？」

九鬼はとつさに、構えた体を崩した。

千鳥足のおっさんは、九鬼を指差し、

「お、お前とは、キャラがかぶっているんじゃない！」

駄目出しをした。

そのおっさんの名は、半月ソルジャー。

「途中から、参加して!リーダーずらしやがって!」

半月ソルジャーの言葉に、九鬼はフツと笑うと、廊下の窓を開けた。

「あたしは、リーダーではないわ!ただ…みんなを守りたいだけ」

そして、開けた窓から、外へと飛び降りた。

「逃げるか！卑怯者！」

九鬼は半月を無視すると、一気に正門へと走り出した。

校舎の左側を斜めに走ると、正門までは一直線だ。

九鬼は視界に、正門をとらえたところで、足を止めた。

一度、呼吸を整えた。

正門のさらに向こうで、巨大な砂埃と、時折光る…一筋の光。

光線を発する怪人。

「魔神に近いか…」

生身の体で、それを喰らえば…アウトだ。

「だけど…あたしは、生徒会長」

九鬼は、覚悟を決めた。

ゆっくりと歩き出す九鬼の後ろから、声がした。

「九鬼！」

「生徒会長！」

校舎から飛び出して来たのは、里奈と夏希だった。

そして、里奈に引きずられて、放心状態の蒔絵もいた。

「み、みんな！」

九鬼の嬉しそうな顔に、あたしは微笑んだ。

「1人で、格好つけないでよ！」

「あたし達もいますから！」

いつのまにか、戦う覚悟を決めた夏希は、ガッツポーズをつくった。

「ありがとう」

感動からか…少し泣きそうになる九鬼に、あたしはえらそうに何度も頷いた。

九鬼はすぐに、少し滲んだ涙を拭くと、前を睨んだ。

「怪人が来るわ！だけど、そいつは、今までの怪人と違う！だけど、今…あたしは、変身できない！」

苦々しそうに、猛スピードで近づいて来る砂埃を口惜しそうに、睨む九鬼の肩を、あたしが叩いた。

「みんなのムーンエナジーを集めれば…大丈夫よ」

あたしは自分の眼鏡ケースを、九鬼に差し出した。

夏希もそれに従う。

「あなた方は…」

感動する九鬼の様子に、あたしはじゅんと来るものがあつたけど、内心はにやつと笑っていた。

（あんまり…戦いたくないのよね。あたし…いつも、パンツを世間に晒しているし）

今日は、見せパンをはいているとはいえ、

あたしは乙女だ。

何度も見せる気はない。

「みんなのムーンエナジー…使わせて貰うわ」

基本的に、人を疑うことのしない九鬼は、素直にあたし達の好意を受け取った。

そして、あたし達の眼鏡から、ムーンエナジーをチャージしようと

したが、

「……」

チャージできなかった。

固まる九鬼。

それを見て、気まづくなつたあたしは、夏希に逆ギレした。

「あんた！ちゃんと、夜中！月が見えるところに、眼鏡ケースを置いておいたの！」

自分のことを棚にあげて、怒るあたしに、夏希もキレた。

「あたし！そんな設定知らないし！」

そりゃあゝそうだ。教えてない。

少し怯んでしまったあたしに、夏希は言った。

「あんただって、充電してないじゃん！あたしと違って、知ってたのに！」

それを言われると、あたしは一瞬、呼吸が止まった。

（そりゃあゝそうだ）

あたしは、心の中では納得した。

言い争いをしているあたしと、夏希の間を一瞬、光が走った。

「え!？」

気づいた時には、南館の横にある創立者の胸像が爆発した。

「ビーム兵器か!」

一歩も動けなかった九鬼のこめかみに冷や汗が、流れた。

いつのまにか、正門の前に、下半身を剥き出しにしたモロダシ・ダ  
ンが立っていた。

そして、そそりたつ×××をあたし達に向けていた。

「モザイクなしかい!」

あたしは、冷静な突っ込みに関係なく、×××の照準を、こちらに  
向けた。

「クッ!」

九鬼は唇を噛み締め、モロダシ・ダンとの距離を計り、絶望してい  
た。

向こうの攻撃距離と、あたし達の攻撃距離が違い過ぎる。

「何とか！ビームを避けて、接近戦に持ち込んでみるわ」

覚悟を決めた九鬼が走ろうとした時、後ろから声がした。

「真弓！携帯、持ってきたわよ！」

蒔絵の携帯を、九鬼に頼まれて生徒会まで取りに行っていた加奈子が、走り寄ってきた。

突然の怪人の来襲に、蒔絵に返す暇がなかったのだ。

「それを、花町さんに！」

「誰？」

一瞬、加奈子は蒔絵がわからなかった。脱け殻になっている蒔絵に気づき、初対面だが…この子だろうと、携帯を渡そうとした。

「加奈子！」

助走に入った九鬼の真横を、光が走った。慌てて、振り返った九鬼の目に、加奈子の手から、煙が立ち上っているのが映った。

「熱い！」

加奈子は思わず、携帯を離れた。

半分になった携帯が、アスファルトの上に転がった。

それが、放心状態の蒔絵の目にも映った。

その刹那、

がばつと立ち上がった蒔絵の顔に、眼鏡がかかり、

乙女グリーンへと変身させた。

それと同時に、グリーンの眼鏡からビームが放たれ、

発射したばかりのモロダシ・ダンの股間に当たった。

「うぎゃあ!」

苦悶の表情を浮かべ、膝を落としたモロダシ・ダンに向かって、九鬼はダッシュした。

「もらった!」

生身の体をカバーする為に、加速をつけた九鬼は、ジャンプして、膝をモロダシ・ダンのトレーナーで隠されている顔面に叩き込もうとした。

しかし、なんとすぐに立ち直ったモロダシ・ダンは、九鬼の膝をかわすと、そのまま…信じられない速さで動くと、啞然としているあたし達の横をすり抜け、校舎の中へと逃げ込んだ。

「チッ！」

舌打ちした九鬼は、着地すると、体を反転させ、校舎へと走り出す。

ビームを発射したグリーンは、それでムーンエナジーを使いきったようで、変身が解け、蒔絵に戻る。そして、破壊された携帯を手に取り、肩を落とした。

「結城さん！五月雨さん！やつの兵器は破壊したわ！今のやつは、ただの怪人！変身しなくても、戦えるはずよ！」

九鬼の言葉に、あたしと夏希が頷いた。

「あつ！」「ごめんなさい……」

責任を感じ、携帯の前であたふたしていた加奈子は、遠ざかっていくあたし達の背中を見て、

「ごめんなさい！」

自分も、後を追うことを決めた。

手には、乙女ケースを持って。

「…」

破壊された携帯を握りしめた時絵の心に、怒りの嵐が吹き荒れた。

「ぶっ殺す！」

何に対してもやるきのない時絵が、初めて正義の為に（？）戦うことを決意した瞬間だった。

【CM】

ついに出了！

乙女ソルジャーのすべてを、あなたに…。

乙女ケース！

飛び出す眼鏡！

「装着！」

変身！乙女ブラック！

「月影キック！」

あなたも今日から、乙女ソルジャー！

眼鏡を取ると、筆記用具も入る。

お弁当にも。

乙女ケースシリーズぞくぞくと登場！

（注：眼鏡に度は入っていません）

そして、乙女戦隊パジャマシリーズも発売中。

校舎内を、お尻を振りながら、疾走するモロダシ・ダン。

だけど、誰も追ってこないことに気付き、足を止め、後ろを振り返った。

「そっちには、誰もいないわよ」

突然前から声をかけられて、はっとしたモロダシ・ダンは振り返った。

腕を組んだ九鬼が、廊下を塞いでいた。

「あなたの武器は、封じたわ。もう何もできないはず」

モロダシ・ダンは慌てて、来た道に戻ろうとしたが、

今度はあたしと夏希、加奈子が退路を塞いだ。

「袋のネズミね」

ゆっくりと構えながら、近づく九鬼は、蹴りを放つタイミングを計っていた。

焦るモロダシ・ダンのあそこが、怯えた猫の耳のようになる。

「おとなしく……」

九鬼が回し蹴りを放とうとした時、

あたしと夏希の間を押し退けれて、蒔絵が登場した。

「ぶっ殺すぞ！てめえ！」

目が血走った蒔絵は、怒りから人相も変わっていた。

突進してくる蒔絵のプレッシャーに、モロダシ・ダンはさらに怯え

出し、逃げようとするけど、前に九鬼がいる為、その場で地団駄を踏んだ。

「死ねや！」

蒔絵の蹴りが、モロダシ・ダンの後ろから股間を蹴り上げた。

「い、痛そう」

御愁傷様ですと、心の中で合掌したあたしは、突然うつとなった。

廊下に、充滿するガス。

どうやら、蒔絵の蹴りによって、モロダシ・ダンはおならをしたらしいかった。

「くさ！」

あたしと蒔絵は、鼻を摘まんだ。

なぜか平気な加奈子は、慌てて廊下の窓を開けた。

「蒔絵！九鬼！？」

おならの風力を得て、スタートダッシュしたモロダシ・ダンは廊下から消えていた。

至近距離から、もろに直撃を受けた蒔絵は、気を失って、うつ伏せ

に倒れていた。

「む、無念…」

無敵の生徒会長も、窓ガラスにもたれながら、崩れ落ちた。

「恐るべし…」

あたしは、鼻を摘まみながら、廊下中の窓を開けた。

「只今！臨時ニュースが、入りました！」

テレビのアナウンサーが、渡された原稿用紙を読み上げた。

「市内を暴れ回ってありました怪人モロダシ・ダンは、有名女子高を占拠致しました。怪人モロダシ・ダンが、女子高を占拠致しました」

そのニュースは、日本中を駆け巡った。

「尚…怪人モロダシ・ダンは、その学園の生徒5人を人質にして、立て籠っております！」

テレビ画面に、大月学園が映り、

警察の車両が校門から入っていく様子が、映されていた。

「人質にされている女子高生の安否は、不明ですが…目撃者の証言

によりますと…倒れている者もいるようです」

カメラが切り替わり、現場からの中継になる。

マイクを持った女が慌てながら、様子を伝える。

「こちらは現場です。犯人が立て籠っている校舎の窓から、謎の黄色いガスのようなものが、流れている為…我々報道陣も、校舎に近づくことはできません」

「それは、毒ガスですか？」

スタジオからの質問に、

「まだ…わかりません」

少しためて答えるレポーター。

「大丈夫なんですか！」

「一応、周囲の住民の方には、注意を促しております！まだ警察からの発表は、ありませんが…辺りには、物凄い悪臭が漂っております」

それが…ただの屁であると、分析されるのは、少し時間がかかることになる。

そして、あたし達が…世間では、人質扱いされているとは、夢にも思わなかった。

「くそぉ」

何とか臭いがおさまった廊下では、直撃を受けた蒔絵は戦線を離脱…

そばにいた九鬼もまた、大きなダメージを受けていた。

残るのは、変身できないあたしと夏希…そして、加奈子だけだ。

「ははは！」

いきなり笑いだしたモロダシ・ダンは、倒れている蒔絵を踏み越えると、あたし達の前に立ち、

「貴様達が、乙女戦隊月影だな？我が神がおっしゃったように、月がなければ、変身できないようだな！」

「くっ！」

妙に下半身突きだして、えらそうに言うモロダシ・ダンに、あたしはなんかムカついた。

「神とは、誰のことだ？」

あたしの後ろにいた加奈子が、前に出て、

モロダシ・ダンの下半身を睨んだ。

「神は、神！生きることに悩んでいたわたしに、すべてを晒し！が  
んじがらめにされていた日常から、解き放ってくれた！絶対的な  
存在だ！」

モロダシ・ダンは、激しく腰を振った。

その卑猥な動きに、一応…あたしと夏希は顔を逸らしたが、

加奈子はガン見する。

そして、口元に笑みを浮かべ、嘲るように言った。

「生えてもないものを自慢気に！経験者のあたしに、偉そうに言  
うな！」

ヒーロー番組とは思えない台詞を吐いた加奈子に、モロダシ・ダン  
は少したじろぎ、

「き、貴様！大人の階段を上ったのか！」

「フッ」

加奈子は勝ち誇ったように、腕を組んだ。

「ち、畜生！」

モロダシ・ダンには悔しいさのあまり、片膝を落としかけたが、何とか踏みとどまり、

「そ、そうだとしても！生えてないは、認めん！」

あれを突き上げると、

「わたしは、神の力によって、生まれ変わったのだ！よく見てみる！」

「何？」

顔を近づける加奈子に、正直…あたし達は引いた。

「た、確かに！」

そこには、産毛が！

驚愕した加奈子の一瞬の隙を、モロダシ・ダンは見逃さなかった。

「エレファントアタック！」

あれが、顔を近づけていた加奈子の頬を強打した。

「きゃあ！」

吹っ飛んだ加奈子に、モロダシ・ダンの笑い声がこだまする。

「甘いわ！無用心すぎるぞ！」

「ああ…」

あたしは、そのやり取りを見ながら、

「よいこは読まないわ」

と、この小説の行く末に不安を覚えた。

「犯人に告げる！大人しく、人質を解放して、出てきなさい！」

お決まりの台詞をはく警察官が、拡声器を向けていた。

あたしは窓から、外を見ると、校舎の前には数台のパトカーと装甲車が止まっていた。

あたしが顔を出すと、

レポーターが叫んだ。

「人質は、無事ですよです！」

「人質？」

あたしは、眉を寄せた。

「国家の犬どもが！」

窓から、下半身を突きだしたモロダシ・ダンに、こちらにカメラを向けていたマスコミが、騒然となる。

その模様は、お茶の間にダイレクトに映った。

赤ん坊のようなあれは、しばらくして…ネットで論議を醸し出す。

あれは、剃っていたのかと。

「は、犯人は、下半身を露出しながら、女子高生のそばにいます！」

後に、これも論争になる。

下半身丸出しの男がいるのに、平気な顔をしていたあたしは、どうなんだと！

「馬鹿な…やつらだ」

モロダシ・ダンは、窓から離れると、あたしと夏希の方を向いて、

「お前達を倒した後、わたしはズボンをはいて、裏口から脱走する」

モロダシ・ダンの尻から、何かの容器が飛び出してきた。

「そうすれば、誰かわかるまいて！そして、神の薬を使えば、ふさに！もう絶対にわかるまいて！」

楽しそうに、高笑いをするモロダシ・ダン。

しかし、次の瞬間、彼は凍りついた。

「忠司！お願い！もうやめて！」

拡声器から、聞こえてきたのは、女の声だった。

「なっ！」

絶句したモロダシ・ダンが、窓から下を覗くと、

拡声器を握り、涙を流す女性がいた。

「か、母さん……」

「忠司！早く自首して頂戴！」

母親の悲痛な叫びに、絶句したモロダシ・ダンこと忠司のあれが、頂垂れた。

「ど、どうして……俺が、もと忠司だと……」

正体が露出したことが、信じられない忠司に向かって、母親は拡声器を警官に持って貰うと、あるものを広げ、上に掲げた。

「そ、それは!？」

忠司は驚いた。

シミのついた…それは、まさしく!

「俺のパンツ!」

「そうよ!あなたが、脱ぎ捨てたパンツよ!」

母親が掲げるパンツには、名前がマジックで書いてあったのだ。

「あ、ああ…あれは!俺の自由を奪っていた拘束具!俺の傷!」

「あなただよ!忠司い!」

2人のやり取りを端から見ていたあたしと夏希は、ここにいることが恥ずかしくなってきた。

「帰る?」

夏希の言葉に、

「そうね」

あたしは、頷いた。

2人で回れ右をして、帰ろうとすると、

「逃がすか！」

忠司が、こちらに下半身を向けた。なぜか、元気だ。

「もう正体が、ばれた俺は、普通の世界には戻れない！せめて…最後は怪人として、貴様を倒す！」

元気なあれを、あたし達に向けて、

「モロダシ！アタック！」

突進しようとした。

「ぎゃあ！」

あたし達は、逃げようとしたが、

なぜか、忠司は助走の格好で、固まっていた。

「逃がすか…」

いつのまにか変身していた乙女どめ色の持つ包丁が、後ろから忠司のお尻の割れ目に突き刺さっていたのだ。

乙女どめ色は、包丁を突き刺さすとすぐに変身が解け、加奈子に戻り…気を失った。

「うつうつ…」

悶えだす忠司は、絶叫した。

「ケツが、本当に割れたああああ！」

その忠司の叫びは、外の警察にも聞こえた。

何かあったと異変を察知すると、

「突入！」

警察は一斉に、校舎に飛び込んだ。

「……」

あれの元気もなくなり……お尻を突きだした形で、悶える忠司。

「……」

なんか……あたし達も逃げるタイミングを失い、ただ突き刺さってる包丁を見つめた。

「あれは……痛いわね」

あたしが顔をしかめると、

「そ、そうだね……」

夏希も顔をしかめた。

その時、廊下の向こうから、誰かが飛び出してきた。

ピチピチのタイツぽい戦闘服を着た…半月ソルジャーだ。

「月のイケメン！乙女戦隊の兄貴！半月ソルジャー参上！大丈夫かあ！諸君！」

半月ソルジャーはどうやら、様子を見ていたようで、偉そうに胸を張りながら、こちらに近づいてくる。

「わたしが来たからは、もう安心だ！ハハハ！」

半月ソルジャーは高笑いをする、目だけで忠司の状況を探り、

「怪人め！我が攻撃を受けろ！」

突き刺さっている包丁を掴むと、押し込んだ。

「ひどー！」

あたしは、半月ソルジャーを睨んだ。

「わたしの勝利だ！」

さらに包丁を押し込めると、半月ソルジャーが笑った時、廊下に地響きが起こり…大勢の警官が、前から後ろから現れた。

「え？」

驚いてる半月ソルジャーに、警官が飛びかかると、一瞬で廊下の床に倒すと、腕を決め、取り押さえた。

「確保！」

あたしと夏希を保護するように、警官が前に立ち、

「大丈夫か！」

と聞いてきた。

気を失っている九鬼や、蒔絵、加奈子も保護された。

警官の1人が無線に叫んだ。

「被害者は無事です。気を失っている者もいますが…外傷はありません」

「待て！何をする！わたしは、正義の味方だぞ！」

半月ソルジャーがもがき、正義を主張しても、お尻に突き刺さった包丁を握り締めたおっさんの言うことをきくはずがない。

「犯人に、包丁を臀部に突き刺さっていた不審者も、現行犯逮捕致

しました」

警官は報告を終えると、無線を切った。

「わ、わたしは、月の使者だ！」

無情にも…半月ソルジャーの腕に、手錠がかけられた。

「まあ…仕方ないか」

あたしは納得した。

担架に乘せられて、運ばれる時絵と加奈子。

九鬼は何とか立ち上がり、頭を押さえていた。

「わたしは、月の戦士だ！正義の味方だ！」

半月ソルジャーの主張も、警官には通用しない。

2人の警官に両脇を決められて、連行されていく半月ソルジャーが、あたしと夏希の前を通る。

「お、お前達！わたしの無実を証明してくれ！」

半月ソルジャーの心からの叫びに、あたしと夏希は軽く目を逸らし

た。

「レッド！ブルー！」

半月ソルジャーは、あたし達の前で激しく抵抗する。

その様子に気付き、警官の1人がきいてきた。

「失礼ですが…お知り合いですか？」

その言葉に、思い切り嫌な顔をしたあたしを見て、警官は被っていた帽子を脱いだ。

「あたし達は、知りません」

あたしは気分を害したように、警官を軽く睨んだ。

絶対、世間的に知り合いだとは、思われたくない…その思いが、あたしの形相を恐ろしいものに変えていた。

警官は頭を下げ、あたしから離れた。

「レッド！」

半月ソルジャーの叫びに、あたしはまったく反応をしないようにした。

レッドって何だろう？知りません！あいつ、気持ち悪い。

首を傾げ、顔をしかめて…そんな感じを演じて見せた。

「レッド！」

空しい叫びが、廊下にこだました。

そして、あたしの前を、包丁が刺さったままの忠司が、お尻を突きだしたままの形で、担架で運ばれていった。

「怪人と変人を逮捕致しました！変人は、最近…この学園にでるという変質者だと思われます！」

警官が、無線で報告していた。

「レッド…」

階段を降りる為、廊下を曲がる瞬間、半月ソルジャーは悲痛な顔を、あたしに向けた。

だけど、あたしは半月ソルジャーの方を見ない。

階段を降り、姿が見えなくなると、あたしはやっと顔を向けた。

そして、一言…。

「あばよ…！」

乙女戦隊 月影

第6話 あばよ

完。

屋上では、月影ロボが一台…沈みかけた太陽に照らされていた。

《月影通信》

はあ〜い！

蘭花です。

よい子の皆さん…

今回は下ネタばかりで、ごめんなさい！

蘭花も大嫌いだよ！プンプン

さて、

ついに、乙女戦隊 月影

劇場版は公開されます！

よろしくお願いします！

最近、蘭花の変な噂があるけど、うそだからね！

次回も、みんなに会いたあい！

蘭花でした（^ 3 ^） -

．．．．あるのかな．．．。

劇場版！乙女戦隊 月影 さらば、友よ！ダブルブラック共闘！

集中治療室で、横たわる少女。

うつすらと開けた瞼から見えるのは、手術着を着た医師の姿。

閉じた瞼…。

次に少女が、瞼を開けた時…

少女は知った。

自分に自由がなくなったことを。

動かなくなった手足。

一命はとりとめたが…少女は自由に動くことはできなかった。

その事実を知った時、

体についた傷が癒え、包帯が取れても、

手足が動かないことを実感した時、

少女は絶望の中に落ち、二度と上がることはない、思い知らされた時…。

少女は涙も流れなくなった…そんな時、

1人の訪問者を迎えた。

「あらあ？」

付ききりの介護を続けていた母親が、病室の扉を開けた。

そこに花束と、あるものを持って立つ…学生服の女。

「生徒会長さん？」

## 序幕

「ルナテイクキック！0式！」

「死にな！」

真上に三日月が輝く夜空の下…大月学園の体育館の屋根の上で、激しく激突し合う二つの影。

一つは乙女ブラック・九鬼真弓。

もう一つは、魔將軍ビューティーである。

「乙女ドライバー！」

乙女ブラックの蹴りを受け止めたビューティーの腕を支点にして、爪先を絡めながら回転したブラックは、空中でビューティーの両足を掴んだ。

そして、半転すると、ビューティーの頭を屋根に向けて、落とそうとする。

「舐めるな！」

ビューティーの体が光り、乙女ブラックの体を吹き飛ばそうとする。しかし、それさえ見越した乙女ブラックは、体勢を変え、投げ技へと切りかえた。

「大月学園落とし！」

学園ラブのブラックが編み出した必殺技だ。

「し、しまった！」

ビューティーの体は、回転しながら、体育館の屋根をそれで、グラウンドに激突した。

回転させることによって、受け身を取らせないこの技を喰らって、立ち上がった者はいない。

凄まじい砂ぼこりを上げて、頭から落ちたビューティー。

普通の人間なら、即死だろう。

しかし、ブラックは確信していた。

だからこそ、とどめの一撃を砂ぼこりの中に、浴びせた。

「月影キック！」

一度真上に向けたかかどが、ムーンエナジーを得て、光り輝き…火の玉とともに、上空から急降下で落下する稲妻！

それが、月影キックだ。

「クッ！」

グラウンドに小さなクレーターができ…その中心に立つビューティーの姿が、砂ぼこりの中に消えた。

「この程度では！」

ビューティーは腕をクロスにして、月影キックを受け止めていた。

しかし、ブラックは防御したビューティーの腕の弾力を利用して、もう一度飛翔し、回転すると、

「月影二弾キック！」

間髪を入れずに、二発目の蹴りを入れた。

「きゃああああ！」

悲鳴を上げて、ぶっ飛ぶビューティー。

回転し着地したブラックは変身が解け、九鬼へと戻った。

（チッ）

勝手に変身が解けたことに、九鬼は心の中で舌打ちした。

しかし、その動揺を悟られる訳には、いかない。

九鬼は自分で眼鏡を外すと、倒れているビューティーを睨んだ。

「さすがだわ…御姉様…」

ふらつきながらも立ち上がったビューティーの姿は、大月学園の制服を着た学生に変わっていた。

「あたしを倒す者が…いると…す、すれば…御姉様しか…考えられなかった…」

その制服を、九鬼は見つめ、呟くように言った。

「美和子さん…」

桂美和子…。大月学園生徒会副会長。

「お、御姉様…いや、お兄様と呼んだ方がいいのかしら？」

美和子の瞳から涙が溢れ、

「いえ！違う！あたしにとっては、最高の御姉様！誰よりも…」

溢れる涙に、九鬼の姿が映る。

「誰よりも…素敵な…お、ね、え……うぐあ！」

美和子は最後まで、言葉を発することができなかった。

「み、美和子さん！」

美和子の胸に、どこから飛んできた包丁が突き刺さっていたのだ。

「…大好き…」

崩れ落ちる美和子を、駆け寄り抱き締めた九鬼。

「美和子！しっかりして！」

しかし、包丁は心臓に正確に突き刺さっており、美和子はほぼ即死だった。

「敗者には、死を！それが闇の掟だ」

頭上から声がした。

「美和子さん」

九鬼はぎゅっと抱き締めると、頭上を睨んだ。

「どうして、殺した！加奈子！」

月を隠すように、体育館の屋根に立つ平城山加奈子。

元乙女ソルジャー。

「気安く呼ぶな！月の使者よ」

黒いマントを翻し、赤き瞳が、九鬼を見下ろしていた。

「それに、我が名はもう…加奈子ではない！」

加奈子の手には、闇より深いサングラスが握られていた。

「我が名は、闇の女神、災禍<sup>サイカ</sup>！」

「！」

「月の女神に、従う者よ！闇に仇なす者よ！我は、月を破壊し、真の闇を与える者なり！」

加奈子は、サングラスを前にかざした。

「闇の力！思い知るがよいわ！」

「加奈子！」

ゆつくりと美和子を地面に横たえと、九鬼は乙女ケースを握り締めた。

その乙女ケースを見て、加奈子は鼻を鳴らした。

「よい余興を思いついたわ！」

にやりと笑うと、加奈子はサングラスを制服の胸ポケットにしまった。

そして、逆に手に取ったものは、

どどめ色の乙女ケース。

「装着！」

屋根から飛び降りた加奈子の全身を、どどめ色の光が包み、グラウンドに降り立った時には、乙女ソルジャー…乙女どどめ色が、九鬼の前にいた。

「クッ！」

九鬼も変身しようとしたが、乙女ケースが開かない。

「変身しないのか？ならば、こちらからいくぞ！」

どどめ色の周りに、無数の包丁が出現する。

「どどめ包丁！乱れ桜！」

数百の包丁が、九鬼に向かって放たれた。

「チッ！」

九鬼はとっさに頭を、心臓を腕でガードする体勢を作る。

「そんな腕で！切り落としてくれるわ！」

包丁が、九鬼に突き刺さる瞬間、銀色の光が九鬼の前に現れた。

「はっ！」

その光は、人形になると、気合いだけで、包丁達を消し去った。

「き、貴様は！」

加奈子は目を見開いた。

九鬼の前に立つ…銀色の戦士。

「乙女シルバー！」

加奈子は思わず、後ずさった。

「馬鹿な！月の守護神が、どうして、ここに！」

乙女シルバーは、加奈子を睨んだ。その眼光の鋭さに、加奈子は舌打ちした。

「おのれえ！」

そう言うと、マントを翻し、その場からテレポートした。

「加奈子…」

加奈子がいた場所を見つめた後、九鬼はその視線をシルバーの背中に向けた。

「久しぶりですね」

シルバーはゆっくりと振り返ると、九鬼に微笑んだ。

「生徒会長」

おいでやす

あたしとこ…結城里奈は、ベッドの中にいた。

唐突だけど…今日から修学旅行だ。

準備は万端だ。

昨日の晩、すべての用意を済まし、ちゃんと鞆も枕もとに置いてある。

このまま、飛び起きてもいいくらいだ。

大体、どうして奈良や京都なのよ！

女だけで、大仏や寺とか見ても仕方ないじゃないか！

それに、高校生になって、国内はないだろ！

ベッドの中で、ぐずるあたし。

ベッドの中…？

ううん？

お、おかしいぞ！

さっきから、画面があたしから動かない！？

アテレコしてるけど…画面が、切り替わらない！

ま、まさか！

あたしはがばっと、ベッドから起き上がった。

時計を確認すると、10時半で止まっていた。

10時半…。

秒針が動いていない。

「まさか！やっぱり…お約束の…」

あたしは、鞆の横に置いてあった携帯を手に取った。

「と、止まってる！」

馬鹿な！あり得ない！先々月、払ったはずだ！

先々月…先々月…。

あたしは、顔を手でおおった。

「それから、払ってないわ」

なんて、タイミングなんだ！

目覚まし時計も、携帯も止まるなんて…。

「これが…劇場版か！」

つて、おい！

主人公不在かよ！

最近、九鬼の方が人気あるかもしれないけど…。

「あたしが、主人公よ！」

つて、おい！

ここで、画面が変わるのかよ！

「おい！」

劇場版 乙女戦隊 月影。

くさらば友よ！ダブルブラック 共闘く

スタート！

「というわけで、結城は来てないのか」

熊五郎は、ため息とともに、出席簿を閉じた。

ここは、新幹線の中。

五月雨夏希や花町蒔絵は、車内にいた。

「今回は、引率の先生が少ないから、特別に生徒会長に参加して貰っているというのにな」

熊五郎の横には、九鬼と…平城山加奈子がいた。

「突然、事故で亡くなった副会長の代わりに、平城山さんも参加してくれた！みんな！先輩達の言うことをきくようにな」

熊五郎を挟んで、平然と立つ加奈子を見て、

夏希が、隣に座る蒔絵を肘で突つついた。

「裏切り者が、よくもまあしゃしゃと」

声を潜めて呟く夏希を見ずに、時絵は携帯をいじりながら、

「うざい」

とだけ言った。

「各自、車内では静かにすること！」

熊五郎が一番前に座ると、その横に加奈子が座った。

九鬼は無言で、通路を挟んで、隣の座席に座った。

窓側には、1人の生徒が座っていた。

「ご迷惑をかけます。生徒会長」

九鬼に向かって、頭を下げたのは、牧野早奈英。

早奈英は足が悪く、普段は車椅子で移動していた。

だけど、少しは歩けるので、みんなといっしょの車内にいた。

「いいのよ」

九鬼は微笑んだ。

今回、九鬼が引率で参加した理由のは、早奈英の面倒を見ることがも

含まれていた。

それから、九鬼は無言になった。

通路の向こうにいる加奈子を気にしながらも、決して隣を向くことはなかった。

その空気を察して、早奈英も口をつむんだ。

新幹線は、そんな者達を乗せて、京都を目指していた。

「さあ！着いたぞ！」

巨大なカメが暴れたことで有名な京都駅に着いた一向は、新幹線からバスに乗り換え、一路旅館を目指す。

九鬼は車内では、折り畳んでいた車椅子を広げると、早奈英を乗せた。

少しバス停まで距離があるからだ。

「九鬼！せ、先輩！」

普段呼び捨てにしている為、先輩をつけにくい。夏希は、九鬼に駆け寄ると、耳元で囁いた。

「どうします?」

夏希は、熊五郎の横にいる加奈子を睨んだ。

「一応…気をつけているから…。できるだけ、そばにいるし…」

九鬼も、加奈子を見た。

そんな視線に気づいたのか…加奈子の口元が緩んだ。

「か、怪人だ!」

「きゃあああ!」

どこからか、悲鳴が聞こえ、突然駅内が、パニックになる。

上空にあるガラスの天井が割れ、何が降ってきた。

それは、白い物体だった。

「豆腐!?!」

夏希は首を捻った。

「我が名は、魔神湯豆腐!」

巨大な湯豆腐は、横から手が生えると、自らの体を千切り、周囲に投げつける。

「熱い！」

「熱い！」

湯豆腐が当たった相手だけでなく、投げている湯豆腐も叫んだ。手が真っ赤になっている。

「夏希！」

「うん！」

頷き合うと、九鬼は車椅子を押して、バスへと向かう。

「会長！あたしも！」

車椅子を押す九鬼に、振り返った早奈英。

「あなたは、ダメよ」

九鬼の目の前に、逃げる人混みの中で、笑う加奈子がいた。

どこからか、黒タイツの下っぱも現れ、人々に襲いかかる。

謎の粉を下っぱに振りかけられると、人々の顔が真っ白になり、下っぱ舞妓…別名マイコーになった。

マイコーは、逃げる人々に襲いかかる。

「チッ！」

九鬼は加奈子の横を通ると、パニックになっている生徒達をなんとか、バスへと引率している熊五郎に、車椅子を渡した。

「お願いします！」

「おい！九鬼！」

人混みを掻き分けて、流れを逆走する九鬼の耳元に、

加奈子の声が聞こえた。

「頑張れ！」

「クソ！」

九鬼は、加奈子の声を無視して、走った。

「装着！」

青の乙女ケースをかざして、夏希が乙女ブルーに変身した。

「おいでやす！おいでやす！」

湯豆腐の入ったタイツを振り回して、下っぱがブルーに襲いかかる。

「乙女スプレー！」

催涙ガスが、辺りに立ち込める。逃げ遅れた一般人も苦しみ出す。

「あつ！ごめんなさい！」

ブルーは空になった乙女スプレーを、下っぱに投げつけると、乙女スタンガンを召喚した。

「うりゃあ！」

スタンガンを構えながら、魔神湯豆腐に向かっていった。

「装着！」

九鬼は乙女ケースを取り出したが、眼鏡が飛び出さない。

「充電はしたはずだ」

九鬼は変身を諦めると、左足を軸にして回転すると、回し蹴りの人々を襲うマイコーに叩き込んだ。

「変身できなくても」

九鬼は構えた。

人々を襲っていたマイコーが、一斉に九鬼に向かってくる。

「きゃ！」

湯豆腐を顔にぶつけられ、眼鏡が豆腐まみれになった夏希が、尻餅をついた。

「ははは！とどめだ！」

魔神湯豆腐は、体を千切ると、また投げようとしたが、

「熱！」

思わず、湯豆腐を落としてしまった。

「えい！」

九鬼の膝が、マイコーの顔面に決まった。

崩れ落ちるマイコー。

「きりがない！」

マイコー達は、もとは一般人である。

あまり手荒な真似はできない。

「黒タイツを倒さないと」

辺りを探る目が、粉を撒いている下っぱを見つけた。

「そこか！」

九鬼は、気を失ったマイコー達を飛び越えると、下っぱのもとへ走り寄る。

しかし、その前に加奈子がいた。

「加奈子！」

九鬼の叫びに、加奈子は笑いながら、横へと移動し、道を開けた。

「チッ」

舌打ちすると、九鬼は着地し、加奈子の横を通り過ぎた。

「とう！」

全力で走り、助走をつけ、ジャンプすると、膝を下っぱに叩き込んだ。

下っぱは、一撃で崩れ落ちた。

「きゃあ！」

夏希の悲鳴が聞こえた。

「夏希！」

九鬼が振り返ると、豆腐まみれになった夏希が、眼鏡を探していた。顔が真っ白になっていて、目が見えないようだ。

「眼鏡！眼鏡！」

豆腐まみれの足元を、手探りで眼鏡を探す夏希。

「ははは！乙女ブルー敗れたり！」

最初の大きさから、半分になった魔神湯豆腐が高らかに、勝利宣言をした。

「とどめだ！」

両手に、少し冷め始めた湯豆腐を持つと、魔神湯豆腐は、それを投

げた。

その時、黒い風が人混みをすり抜けた。

普通の人間には、とらえきれない程の速さで、夏希を抱き抱え、魔神湯豆腐の攻撃から救った。

「あれは！」

九鬼は目を見開いた。

「乙女ブラック！」

乙女ブラックは、夏希を安全圏に避難させると、そのまま人混みに消えた。

「まだ終わんねえのかよ！まじだりーい」

携帯をいじりながら、頭をかいていた蒔絵に気づき、はっとした九鬼は、現状を理解すると、頷いた。

蒔絵に駆け寄ると、携帯を奪い、魔神湯豆腐に投げるふりをした。

「いつもいつも！何するんじゃない！」

怒りで、自動変身し、乙女グリーンに変わった時絵を誘導するように、九鬼は魔神湯豆腐との対角線上に立った。

乙女ビームが発射された。九鬼は横に避けると、ビームは魔神湯豆腐を直撃した。

「そんなあほな！」

魔神湯豆腐は、爆発し…湯豆腐は焼き豆腐になった。

魔神の敗北を見て、下っぱ達は退散した。

「まったく学校の周辺以外で、怪人がでるなんてな」

何とか騒動が治まった京都駅から、バスに乗り込んだ生徒達。ほっと胸を撫で下ろした熊五郎。

九鬼は、一番前で黒の乙女ケースを見つめていた。

「今さっき、黒谷も合流したしな…。後は、結城だけか」

熊五郎はまた、ため息をついた。

一番後ろに乗り込んだのは、黒谷蘭花。

普段は、芸能活動をしているアイドルの卵である。

何でも理事長の孫であるということ、あまり出席をしなくてもいいという特別待遇を受けていた。

今日も広島で、仕事を終えて、京都駅で合流したのだ。

「クツ」

九鬼は乙女ケースを握り締めた。

「生徒会長…」

その様子を、隣で見つめる早奈英。

九鬼の持つ乙女ケースは、いわば不良品である。いつおかしくなっても、不思議ではない。

（乙女ブラックに…なれないかもしれない）

それに、京都駅で見た…もう1人の乙女ブラック。

（あれが…真の乙女ブラック）

九鬼の持つ乙女ケースが、反応しなくなったと同時に、乙女ソルジヤーになれなくなった。

それは、何かを暗示しているように思えた。

「生徒会長……」

苦悩する九鬼の手に、そつと早奈英は手を添えた。

「早奈英さん？」

はつと我に返つて、顔を上げた九鬼は、微笑む早奈英と目が合った。

その様子を横目で、加奈子が見ていた。

## 清水寺

まず最初に、バスが止まったのは、清水寺の近くだった。

「しみずでら？」

しおりを見て、首を捻った夏希に、横を通った蘭花が言った。

「きよみずでらよ」

バスの停留所を出ると、清水寺までの石畳の階段が続く。

ご当地。ティちゃん人形を売る店や、抹茶アイス専門店などが並んでいる。陶器でつくったビアカップや、猫の陶器。

いろんな店が並んでいる中、清水寺の近くにあるお土産屋さんは、お茶がタダで飲め、八つ橋やアラレなどを試食できる。

せこい人は、そこで一服し、お腹いっぱい食べるらしい。

中は広くて、店の数も多いし、種類もいっぱいある。

「まじうまー！」

いつのまにか、店内でコップを持って、試食している時絵がいた。

「こら！花町！勝手に、店に入るな！」

熊五郎が注意しようと、店に入ろうとした時、後ろから巨大な影が現れた。

「え？」

妙な殺気を感じ、振り返った熊五郎は、絶叫した。

「ぎゃあああ！」

顔に似合わない甲高い声を上げた熊五郎の後ろに、巨大な八つ橋が立っていた。

「てめえら！タダ食いをやめろ！金払え！八つ橋を買え！」

京都のお土産を守る魔神八つ橋が、出現した。

「きゃあ！」

人で、ごった返していた店内が、一瞬でパニックになる。

「また怪人！？！」

お茶を手にして、アラレに手を伸ばしていた夏希が、慌てて飲み干すと、

乙女ケースを手にした。

「で、出番が多いのはいいけど……」

乙女ブルーになった夏希が、八つ橋に飛びかかる。

「邪魔だ！」

魔神八つ橋のビンタで、ブルーはふっ飛んだ。

「あたし…やられ役じゃないの…今回？」

ブルーは石畳の階段を、転がり落ちていく。

「夏希！」

早奈英を背負っていた九鬼が、魔神八つ橋の前に立つ。

「生徒会長！」

早奈英を背負ったままでは、魔神と戦えない。

「まじうま！」

店員もいなくなった店内で、1人食べまくる蒔絵。

「チッ」

九鬼は、早奈英をおろす場所を探していたが、逃げ回る人々が多く  
つて、安全な場所がない。

「あたしに構わず、戦って！」

早奈英の言葉も、九鬼は聞いていない。

魔神八つ橋と睨み合う。

「まったく…騒がしいことだぜ」

九鬼と魔神八つ橋の間に、金髪の女生徒が割り込んだ。

「十夜さん？」

間に入ってきたのは、十夜小百合。

十夜は、魔神八つ橋の体を下から上まで、目で確認すると、苦笑した。

「こっちの魔神は、捻りがないな」

「貴様！」

魔神八つ橋が、十夜に襲いかかる。

十夜は笑いながら、魔神八つ橋に背を向けた。

そして、九鬼を見つめ、

「お前を倒すのは、俺だ。こんな雑魚に、怯むな」

「俺を無視するな！」

ピンタを喰らわそうとした八つ橋の体が、突然細切れになった。

「十夜……」

九鬼は、十夜を睨んだ。

「フン」

鼻を鳴らすと、十夜は階段を上がっていった。

九鬼はちらりと、魔神八つ橋の残骸を見た。

弾力のあるもちもちしている魔神八つ橋の体が、綺麗に切断されている。

「腕を上げたな」

九鬼は、遠ざかっていく十夜の背中を見つめた。

「おのれ！八つ橋！」

階段から駆け上ってきたブルーが、無惨な姿になった魔神八つ橋に、驚いた。

「え？ 終わり？」

呆気にとられているブルーを置いて、九鬼は石畳を上がっていった。

「ち、ちよつと！」

後を追おうとするブルーに、戻ってきた参拝客が、携帯を向けて、撮影を始めた。

仕方なく、魔神八つ橋の残骸の横で、ブルーはポーズを決めた。

「ここからは、自由行動だ！」

何とか気を取り直した熊五郎の言葉に、生徒達は清水寺内に散らばった。

ほとんどの生徒が、有名な縁結びに向かっていく。

本堂の横の階段の上にある2つの離れた石。

目をつぶって、石から石までたどり着くことができれば、恋が実る

といわれていた。

「あたし…見てきます。生徒会長は、休んでいて下さい」

気を使ってか…早奈英は1人で縁結びに向かった。

「気をつけて！階段があるわよ」

「大丈夫です！」

笑顔でこたえた早奈英のもとに、出遅れた夏希が駆け寄った。

「す、すいません」

夏希は、早奈英に肩を貸した。

本当は、つねにそばにいないければいけないのだが、

九鬼は少しだけ1人になりたかった。

清水寺の舞台の一番端で、手摺にもたれた九鬼は、深いため息をついた。

「どうやら…変身できないようだな？」

九鬼の横で、十夜が手摺にもたれた。

「十夜さん…」

九鬼は十夜を見ずに、

「何度も言ってるけど…あなたの髪は、校則違反よ」

「フッ」

九鬼の言葉に、十夜は笑った。

「違反は…俺にとっては、誉め言葉だ」

十夜は、九鬼のそばから離れた。

九鬼は、大きく息を吐くと、体を反転させ、清水寺の舞台から、京都の町並みを眺めた。

「やってみるね！」

夏希ははしゃぎながら、石の前に立つと、目を瞑った。そして、ゆっくりと歩き出す。

「頑張つて！」

早奈英の応援を受けて、夏希はバランスを取りながら、歩いていく。

「やった！」

夏希の爪先に、石が当たった。

目を開けて、向こう側の石にたどり着いた夏希が、振り返ると、

1人の男が立っていた。

「落しましたよ」

夏希に差し出されるハンカチ。それは、明らかに夏希のものだった。どうやら、目をつぶって歩いている間に、ハンカチをポケットから落としたようだ。

真面目そうで、高校生だと思われる男は、夏希に微笑みかけていた。

「す、すいません！」

夏希は慌てて、男の手から、ハンカチを奪い取った。

どうしてか、顔が真っ赤になっているのが、自分でもわかった。

「う、ごめんなさい！」

夏希は恥ずかしさから、頭を下げた。

「そ、そんなに謝らなくても」

困ったような男の前から、夏希は逃げるように離れ、早奈英に駆け寄ると、縁結びの境内から出ていった。

その夏希の後ろ姿を、男はじっと見送っていた。

「九鬼！よろしくね」

まだ緊張している夏希は、早奈英を九鬼の前まで連れて来ると、どこかへ消えていった。

その頃、蘭花は清水寺の出入り口にある三本の滝の前で、如雨露を突き出していた。

民間伝承であるが、三本はそれぞれ…頭が良くなる。病気が治る。綺麗になると、効果が違っていた。

蘭花は迷わず、真ん中の滝の水を飲んだ。

それは、綺麗になるだ。

一方、時絵は…。

「まじうま！」

まだ試食を続けていた。

店員の冷めた視線を、気にもせず。

## 哲学の道

なぜか…マイナーな銀閣寺に来た大月学園ご一行。

「銀閣寺…銀」

実際は、お金がなかった為、銀は貼られなかった寺。

手摺から、切なく見つめる早奈英の横顔を、九鬼は見つめていた。

「ここからは、完全自由行動だ！夕方4時までには、ここに戻ることに」

熊五郎は、クラスの班ごとに、1日バス乗り放題券を手渡した。

当然、九鬼と早奈英、蒔絵と夏希は同じ班になった。

そして、もう2人…十夜と蘭花もなぜか加わった。

「お約束ね」

蘭花が笑った。

「あつ！それと、結城が来たら、お前達の班な！」

熊五郎が、九鬼を呼び止めた。

「なぜか知らないけど…。お前達がいると、魔神や怪人がでるからなあ…。それと、お、乙女戦隊だったか？あいつらも、お前達がいなくてないしな…。どうしてだ？」

熊五郎は、首を捻った。

「それでしたら、黒谷さんと十夜さんは、私達のそばにいないほうが、よろしいのでは？」

九鬼の言葉に、

「黒谷から、一緒になりたいと言い出してな！十夜は…」

熊五郎と九鬼の間に、お土産の木刀が差し込まれた。

「でなければ、斬る！」

いつの間にか、2人の横に十夜がいた。

「そ、そうだ」

冷や汗を流す熊五郎を見て、フンと鼻を鳴らすと、十夜は離れていった。

「も、問題児ばかりだけど、よろしく頼むな！生徒会長」

熊五郎は愛想笑いを浮かべながら、九鬼から離れようとした。

「先生！待って下さい！加奈子…いや、平城山さんは」

熊五郎は足を止め、

「あいつなら、他の班だ。引率者が、同じ班はおかしいだろう？」

「加奈子は…別の班？」

考え込む九鬼の真後ろに、十夜が立ち、背中をつけてきた。

「無防備だな？乙女ブラック」

十夜は口元を緩め、

「俺が、その気なら死んでいたぞ」

「十夜！？」

油断していた九鬼は、唇を噛み締めた。

「まあよい…。不意討ちは、好まん」

「チッ」

九鬼は小さく舌打ちした。

「フツ……。それよりも、気づかんか？ 闇の波動が漂っている」

十夜の言葉にはっとして、九鬼は気を探った。

「馬鹿な！？」

そして、あり得ない波動を感じた。

「やっと、気付いたか」

十夜は、九鬼から少し離れ、

「闇の波動の中に」

「月の波動がある！」

「それも、とてつもない力を感じる」

「生徒会長！」

そばにいた早奈英が、叫んだ。

「チッ！」

九鬼は銀閣寺の坂の手前で、川沿いを走った。

所謂、哲学の道だ。

「夏希！牧野さんを頼む！」

ハンカチを握りしめ、ぼおっとしていた夏希は、事情がわからない。

「生徒会長！あたしも」

早奈英の言葉を、

「今は、駄目！」

九鬼は遮った。

走る九鬼の背中を見つめながら、十夜は鼻を鳴らした。

「変身できるかな？だが…それでも行く。それでこそ、我が好敵手」

走りながら、九鬼は乙女ケースを突きだした。

「お願い！みんなを守りたいの！」

九鬼の願いが通じたのか…乙女ブラックへと変身できた。

「みんなを傷つけさせない！」

九鬼は変身しながら、蹴りを繰り出す。

哲学の道で、生徒達を待ち構えていた敵に。

「ルナティックキック！0式！」

川沿いの道！

何もない空間に、乙女ブラックの蹴りが炸裂する。

しかし！

ふっ飛んだのは、ブラックの方だった。

ブラックは、哲学の道の横にある川へと落ちた。

大して水かさはないが、深さはある川底に激突したブラック。

水飛沫が上がり、シャワーのように降り注ぐ哲学の道の石畳に、きらきらと輝く人型が、水を弾いた。

「来たか」

十夜は離れた場所から、その様子を眺めていた。

「きゃあ！」

十夜のそばで、白々しく悲鳴を上げてみたが…蘭花はすぐに止めた。

乙女グリーンのビームの数倍の破壊力を持つ光線が、前に突きだした両手から放たれた。

光の速さで、光線はブラックを消し去るはずだった。

突然現れた新たな光が、プラチナボンバーを跳ね返した。

「何！？」

乙女プラチナの体に、光線が当たったが、跳ね返り、近くの民家数件を消し去った。

「き、貴様は！」

プラチナは、光線が当たったことより、ブラックの前に立つ戦士にたじろいだ。

「乙女シルバー！」

遠くから、傍観していた蘭花が近くの手摺に走り寄り、身を乗り出

した。

「馬鹿な！？乙女シルバーが、なぜここにいる！」

突然のシルバーの登場は、プラチナには予想外だった。

「シルバー！退いて！こいつは、あたしが…」

何とか立ち上がったが、ダメージの抜けきれないブラックは、シルバーを押し退けて、前に出ようとする。

「だけど…ブラック」

「あ、危ない！」

ブラックはシルバーを守るように、前に出た。

プラチナの蹴りが、ブラックに決まり、

ふっ飛んだブラックは九鬼へと戻った。

九鬼は、もともと水路であった川のレンガでできた側面に激突した。

「生徒会長！」

九鬼の方を見たシルバーに、プラチナの張り手が決まる。

「よそ見をするな！」

「きゃあ！」

軽い悲鳴を上げて、ぐらついたシルバーを見て、

プラチナは首を捻った。

「何だ？この感覚は」

プラチナは、自分の握力を確認すると、

「我ら乙女ガーディアンは、ほぼ同等の力があるはず…これ程、差があるはずは…」

「シルバー！」

九鬼は、激突した衝撃で、動けずにいた。

「だとすれば…」

シルバーは、にやりと笑った。

そして、シルバーをいやらしく見つめると、

「もともとの肉体の差！貴様？戦士ではないな」

ばきばきと拳を鳴らし、

「貴様を拘束する」

「乙女シルバーまで、手に入れば…恐れるものはない」

プラチナは、シルバーのにかけている眼鏡に手を伸ばした。

「シルバー！逃げろ！」

まだ動けない九鬼。

「乙女キック！」

突然、プラチナの死角から、乙女ブラックが現れ、蹴りを喰らわした。

「何！お、乙女ブラックだと！」

蹴りが首筋に決まっても、平然としているプラチナに、ブラックは冷や汗を流した。

「うるさい…蚊が」

ブラックを片手で払おうとした時、プラチナの顔面に、ビームが炸裂した。

「な！」

顔が爆発したが、プラチナにダメージを与えることはできなかった。

しかし、その攻撃は、プラチナの視界を一瞬奪った。

「まったく、うざいぜ」

乙女グリーンから戻った蒔絵が、ため息をついた。

「お、おのれ！」

プラチナの視界が戻った時、川底には誰もいなくなっていた。

「チッ！に、逃げたか！」

プラチナは舌打ちした。

「なんか、向こう…ずっと光ってるわね」

銀閣寺に、九鬼達と入れ違いに来ていた別のクラス一向は、坂の下  
の一角が、何度も輝くのを確認していた。

「なんか…映画の撮影でもしてるのかな？」

クラスメイトの言葉に、竜田桃子は首を思いつきり、横に振った。

「多分、違うと思う」

桃子は、その光に嫌な予感がした。平然と笑いかけたが、背中に悪寒が走った。

（絶対、行つては駄目）

桃子は、九鬼達に関わりたくなかった。

## 二人のブラック

九鬼を抱え、ジャンプした乙女ブラック。そして、それに寄り添うように、シルバーもジャンプしていた。

哲学の道から外れ、山側に逃げた三人。

夏希と蒔絵は、逆の方へ逃げたようだ。

まだ痛みが取れない九鬼を、参道の途中でおろすと、乙女ブラックは背を向けて、立ち去ろうとした。

「待って！」

九鬼は、乙女ブラックを引き止めた。

「あなたが、真乙女ブラックなのか？」

九鬼の言葉にも、乙女ブラックは振り返ることなく、一言だけ口にした。

「乙女ブラックは、もともと1人しかないいわ」

その冷たい口調に、辺りが凍り付く。

「あなたは、乙女ブラックではないわ」

その空気を切り裂くように、九鬼のそばにいたシルバーが、口を挟んだ。

「乙女ブラックは、生徒会長よ！あなたこそ偽物よ！」

その言葉に、やっとブラックは振り返った。

シルバーを睨み、

「そんなこと…あなたが、よく言えたものね」

「え」

予想外のブラックの言葉に、シルバーは驚いた。

「敵が、乙女ガーディアンを得た今…こちら側の切り札である乙女シルバーが、こんなやつでは…やつらに勝てない」

ブラックの言葉に、何も言えなくなったシルバー。シルバーは思わず、顔を逸らした。

「そんなことはない！勝つのは、あたし達よ」

九鬼は何とか、立ち上がることができるようになった。

ブラックを見つめ、

「乙女ガーディアン。月の女神を護る戦士。前後左右に、女神を囲むように立つ守護神。プラチナ、シルバー、ゴールド…そして、ダイヤモンド」

ブラックは、九鬼に体を向けた。

「乙女ソルジャーは、外敵を倒す為に、戦う実行部隊。最初のレベルは、女神を護る為に存在するガーディアンには、敵わない！しかし！乙女ソルジャーは、つねに戦う宿命を背負い！鍛えれば、無限の強さを得る可能性がある。そして、いずれは」

「乙女ガーディアンを超える存在になれると？」

ブラックは、微笑んだ。

「ああ…」

九鬼は頷いた。

ブラックは、九鬼を凝視し、

「それは、乙女ナイトのことか？」

「乙女ナイト…月を護る最強の戦士」

九鬼は感慨深げに、頷いた。その思いは、憧れにも似ていた。

「馬鹿らしい！」

ブラックは鼻で笑った。

「そんなのは、伝説だ。それに、乙女ナイトになれたかもしれない可能性があった…あんたが、こんな様子では…」

「あたしじゃ…無理。だけど、1人…なれるかもしれない戦士がいる」

ブラックは眉を寄せ、

「そんな者…どこにいるの？どこにも、いないわ？」

肩をすくめた。

「そうよ。ここにはいないわ。今は…だけど、もうすぐ来る」

九鬼の確信を持った揺るぎない瞳の輝きに、

ブラックは吸い込まれそうになった。

しかし、ブラックは無理矢理、顔をしかめた。

「あり得ない」

「いえ…」

九鬼は、首を横に振った。

「可能性はあると…あなたも思ってるはず」

「な！」

「だから、あなたがここにいる。姿を見せたのは、その可能性の為」

九鬼は、ブラックと見つめた。

二人の視線が絡み合う。

「フッ」

やがて…ブラックは笑うと、その場から煙のように消えた。

九鬼は、黒の乙女ケースを見つめた。

あと何回変身できるか…わからない。

ぎゅと乙女ケースを握りしめ、

「早く来い！里奈」

## 最強の敵

慌てて、家を飛び出したあたしは、駅へとダッシュしようとして、足を止めた。

「新幹線の切符がない！」

あたしは、頭を抱えた。

携帯代金も払っていないのに、新幹線の切符を買えるはずがない。

「そ、そうだ！」

あたしははっとして、思い出した。

「あれが、使える！」

乙女戦隊月影が、普段戦うところは、学校やその周辺が多い。

その為、戦隊ものによくあるメカが出てこないのだ。

それは、スポンサーにとっても悩みの種だった。

「スポンサーのテコ入れじゃなくて…乙女マシーンを使う時が来た

のよ」

あたしは、乙女ケースを突きだし…乙女レッドに変身すると、あるものを天に向けた。

「来い！月影号！」

それは、携帯である。

月影号は、携帯からの発信音を得て、大月学園の体育倉庫の奥から発進するのだ。

ワンタッチ機能にしておくと、ボタン一つで呼べるぞ。

しかし、レッドが何度押しても、月影号は来ない。

あたしは思い出した。

「携帯が止まってた」

仕方なく、常に常備している…今時珍しいテレホンカードを財布から、取りだし、

あたしは公衆電話を探した。

数分後、やっと見つめた公衆電話に駆け寄ると、あたしはテレホンカードを差し込んだ。

「もしもし！兜博士？」

「どうした？結城！今は、京都か？」

受話器の向こうにいるのは、大月学園化学の教師…兜又三郎である。

別名 マッドキャベツ。

髪の毛が、キャベツみたいな為、あだ名がついた。

「…って！博士の説明はいいって！」

苛つくあたしに、兜は笑いながら、

「もしかして、相変わらずの遅刻か？」

「あ、あのさ！もう尺が残ってないのよね！」

「それに、この着信は、公衆電話！携帯も止まってるか！お約束だな」

楽しそうな兜の口調に、あたしはキレた。それに、携帯にかけると、

異常に残高が減っていく。

「もう時間がないだよ！早く京都に行かないと、あたしの出番が！」

「ハハハ！」

一通り笑ってから、兜は言った。

「心配するな。今、送ったから」

「ぎゃあああ！」

兜とレッドの声が、重なった。

電話をかけていたレッドに向かって、天から何かが突っ込んで来た  
と思っただけ、

月影号だった。

月影号は、右翼でレッドのスカートを引っ掻けると、そのまま……ま  
た、天へと舞い上がった。

「ま、またかい！」

いつもの如く、パンツを見せながら、あたしは空を飛んでいく。

公衆電話から、残高がゼロになったテレホンカードが、差し込み口から、虚しく飛び出していた。

「ど、どうして!」

あたしはムーンエンジーで、体を覆うと、右翼に引っ掛かっていたスカートを、風の抵抗を受けながらも、何とか外した。

すると、月影号は、あたしを残して、前方に飛んでいった。

中に浮かぶあたしの眼下に、広がる地元の町並み。

猛スピードで落下して行くあたしの下に、Uターンして来た月影号が静止した。

空中で、ちゃんと運転席に乗り込むことができた。

月影号は、ロケットに羽をつけたような形をしている。

「行くわよ!」

あたしは、オートマ車と同じような仕組みをした月影号のシートに座ると、ハンドルを握った。

月影号に、行き先をプログラムする必要はない。

まるで、磁石のように乙女ソルジャーの発しているムーンエネルギーに吸い寄せられ、

勝手に、乙女ソルジャーのもとへ飛んでいくのだ。

「これなら…安心」

あたしは慣れないハンドルを握りながら、ほおつと一息をついたのも束の間！

いきなり加速する月影号。

空を飛びながら、新幹線よりも速く…リニアモーター並みのスピードで飛んでいく。

「変身いてなかったら…死んでる！」

風よけがないから、もろに風圧が顔に当たった。

だけど、ムーンエネルギーで顔をおおったから、もう余裕！

と、安心したあたしは、突然月影号が進路を変えたことに気づいた。

「え！？うそお！」

ハンドルを切ろうにも、びくもしない。

車体の下へ向くと、そのまま…月影号は、着陸の体勢を取り始めた。

「……じゃない！」

「来たか…」

月影号の波動を感じ、男は顔を上げた。

背中しか映っていないため、顔は見えなかった。

「どうなってるのよ！」

あたしは京都ではなく、見知らぬ山の中に降りることになってしまった。

月影号が降りていく場所は、巨大なダムである。

某有名な長。県のダムだ。某知事だった人が、揉めたことで有名だ。

「こんなところ！乙女が、1人で来る場所じゃない！」

あたしの絶叫は、ダムの方から飛んできた光の玉に、かき消された。

「きゃあ！」

光の玉が当たった瞬間、緊急脱出システムが作動し、あたしはシートを突き破って飛び出してきたバネに弾かれ、空中へとほりだされた。

「パラシュートもないんかい！」

乙女ソルジャーであるからいいものの！

普通の人間なら、どっちにしても死んでいる。

「乙女ウィング！」

背中からムーンエナジーを噴射させ、翼のような形を取ると、あたしは青空を疾走した。

「ムーンエナジーを充電していて、よかった」

飛びながら、ほおつと胸を撫で下ろした。

九鬼から、ムーンエナジーの使い方を教えてもらい、使い方がわかってからは、結構楽になった。

しかし、今は昼間である。

あまりムーンエナジーを使う訳にいかない。

あたしは、ダムの上に着地すると、学生服に戻った。

攻撃された月影号は、爆発しながら、ダムへと落ちていった。

「ああ… テコ入れがあ…」

あたしが、合掌していると、刺すような殺気が胸を射ぬいた。

「な！」

昔のあたしなら、それだけで怯んだはずだけど、今のあたしは違う。

乙女ケースを構え、殺気が飛んできた方を睨んだ。

ダムを挟んで、二百メートル程向こうに立つ人影。

「誰だ？」

表情もわからないが、なぜか笑ったように思えた。

その人物は、扇を描くように両手をゆつくりと広げると、足を動かさずに移動し、ダムに貯まった水の上で止まった。

そして、水の上を歩き出す。

「何!？」

あたしは、水の上を歩く行為よりも、足元から感じる波動に驚いていた。

「月の波動…ムーンエネルギー!？」

少したじろいだあたしの裸眼で、表情を確認できるようになった時、

あたしは絶句した。

「お兄ちゃん…」

それは、紛れもなく…兄、結城哲也であった。

哲也はにやりと笑うと、

「結城里奈…いや、乙女レッドよ。大人しく、その乙女ケースを渡してもらおうか」

あたしの瞳を凝視した。

今だかつて、そんな冷たい哲也の目を、あたしは見たことがなかった。

肉親に向ける目じゃない。

「ど、どうして!わ、渡さなきゃならないのよ!」

強がってみたけど、足が震えていた。

今まで、敵と対峙した時にも感じなかった…恐怖。いや、異質の恐怖が、あたしを襲っていた。

なぜなら、その目には純粋な殺意しかないからだ。

怒りも憎しみもない。

肉食獣が、獲物を狩るのに、感情は必要ない。

「お兄ちゃん！」

そう呼ぶことで、あたしはその恐怖から逃れようとした。

「そうだったな…里奈。俺は、お前のお兄ちゃんだったな」

いつのまにか、哲也はあたしの後ろに移動していた。

「なっ！」

驚きと恐怖で、思わずあたしは、乙女ケースを握り締めた。

哲也は冷静に、乙女ケースを見つめると、無表情でこう言った。

「お前に、チャンスをやろう」

哲也は、あたしから離れると、指を鳴らした。

「敗北というチャンスを」

いつのまにか、哲也の後ろに、数十体の巨大なものが姿を現した。

「え!？」

あたしは、そのもの達を見ることが、少し我に返った。

「いけ!ご当地マスコットキャラクター軍団。」

哲也の号令に合わせて、体を動かす…マスコットキャラクター軍団。

あのネズミや…青いネズミ…ネズミ。輩!さらに、あの奈良三兄弟や、彦××や、バ。タン星人!白い悪魔や、宮崎のあれが、着ぐるみとなって勢揃いしていた。

「ご当地マスコットキャラクターじゃないのもいるって!と、言うより!」

あたしは後退り、

「著作権は大丈夫なの?」

映画の予算を心配した。

「著作権など!我々、ダークメイトに関係あるか!」

あの世界に一匹しかいないと、豪語する黒いネズミが、殴りかかってくる。

「うわっ！夢の国なのに！」

あたしは、黒いネズミのパンチをかわした。

青いネズミは、ポケットに手を入れた。

「じゃじゃじゃん！どこでもチェンソー！」

鋭い目付きで、斬りかかってきた。

「ほおほおほ」

後ろに回ったバ。タン星人が、あたしのスカートをハサミでめくって、笑い声を上げた。

単なる変態のあえぎ声にしか聞こえない。

「舐めるな！」

あたしは、バ。タンの顔面に、後ろ蹴りを入れると、マスコットキヤラクター軍団から離れた。

「着ぐるみの癖に！」

あたしは、乙女ケースを突きだした。

「装着！」

眼鏡が飛び出し、あたしは乙女レッドに変身した。

と同時に、鹿の角を生やした三兄弟の1人が突進してきて、あたしの胸を触った。

至近距離で見ると、あの顔は変態にしか見えない。

「は、は、は、恥じらいの膝！」

あたしは、膝で鹿の角のやつの顎を突き上げた。

気絶したようだが、着ぐるみの為わからない。

「乙女の胸に……」

あたしが一息ついていると、またスカートがめくられ、バ○タンが笑っていた。

「て、てめえは死ね！」

あたしのかかと落としが、バ○タンの頭をかち割った。

（パワーが上がった！？）

マスコットキャラクター軍団との戦いを、観察していた哲也は、乙女レッドの変化に気づいた。

(恥じらいの…乙女レッドか)

そして、フツと笑った。

「著作権違反野郎どもが、かかってこいや!」

キレたあたしに向かって、白い悪魔がサーベルを抜いた。ビームでは、できていない。

彦。。。んも、剣を抜いて向かってくる。

青いネズミはチェンソー!

他に詳しく書いたら、問題になる。

「しゃらくさい!」

あたしは、乙女ケースを突きだした。

「兵装!」

あたしの声に呼応して、乙女ケースが剣になった。

「乙女ソード!」

「うりゃあ!」

乙女ソードで、白い悪魔のサーベルをへし折ると、彦。。。んの額に突き刺した。

リアルに開いた穴から、血が吹き出した。

あたしは、後方にジャンプすると、日本刀に似た乙女の刀身を、マスコットキャラクター軍団に向けた。

研ぎ澄まされた刀身に、マスコットキャラクター軍団の姿が映る。

あたしは、左手の人差し指と薬指を剣先に添えると、叫んだ。

「乙女のたしなみ！三日月の型」

一斉に、襲いかかってくるマスコットキャラクター軍団に向かって、あたしは一回転し、乙女ソードを一振りした。

「舞え！斬撃！乱舞」

刀身から飛び出した三日月の形をした手裏剣のような光が、マスコットキャラクター軍団の体に炸裂し、三日月の傷をつけた。

あたしは、マスコットキャラクター軍団に背を向けると、二本の指を刀身に添いながら、鏝まで落とした。

「爆撃…」

あたしの言葉に呼応したかのように、三日月の傷が輝きを増すと、爆発した。

「お、おやじにも、斬られたことがないのにい！」

白い悪魔の断末魔だった。

黒焦げになったマスコットキャラクター軍団を足で退かしながら、あたしは哲也に近づいた。

「お兄ちゃん！」

乙女ソードを前に突きだすと、あたしはきりつと哲也を睨んだ。

「これで、著作権は大丈夫…じゃなくて！そこを退いて！あたしは、京都にいくんだから！」

「ほおなるほど」

馬鹿にしたような哲也の言い方に、あたしはカチンときた。

「お、お、お兄ちゃんだって！」

声が上がらず。

「京都にい、かなくちゃいけないんでしょ！」

その言葉に、哲也は苦笑した。

「お前は、何も知らないな…」

「な、何を！」

「俺は、今回の修学旅行には参加しない！代わりに、教頭が参加している」

「え！？」

目を丸くしているあたしに向けて、哲也は右手を広げた。

「俺は、お前と戦う為に、ここにいる！」

「き、きいてないよぉ」

あたしは、家に帰りたくなった。

「敗北が嫌ならば、死あるのみ」

哲也の右手に、光の粒子が集まってくる。

「ムーンエナジー！？」

あたしは、その光を知っていた。

広げた手のひらをゆっくりと閉じると、光は圧縮され…光輝く乙女ケースとなった。

あまりの輝きに、あたしは一瞬目を瞑った。

眼鏡をかけてなかったら、危なかった。

「変身…するわよ」

哲也の声に、呼応して、光の眼鏡が飛び出すと、

哲也は乙女ソルジャー…いや、乙女ガーディアンに変身した。

「ま、まさか…お兄ちゃんが！」

それは、あたし達のように戦闘服を着るとかのレベルではなかった。

豊満なバスト！引き締まったウエスト！桃のようなヒップ！

そして、淡い栗色の髪。

「え！え！」

あたしは、困惑した。

剣で、指差し…、

「あ、あんだ…誰よ」

「フッ」

乙女ガーディアンは、笑った。

「お、お兄ちゃんは！」

あたしは、お兄ちゃんを探した。

目の前にいる乙女ガーディアンは、明らかに女だ。

それも、ナイスバディの大人の女。

「お、お兄ちゃん！」

慌てるあたしを見て、乙女ガーディアンはため息をつき、

「相変わらず…理解力の乏しい妹だわ。だから、国語もあんな程度で…それから…」

しばらく、あたしの知られざる成績をせきだらに告白する乙女ガーディアンに、あたしは恐怖した。

「も、もしかして…女のストーカー…！」

あたしがまた剣で指差した瞬間、乙女ガーディアンは拳を突きだした。

その風圧で、あたしは数センチ後ろに下がった。

「え！」

乙女ガーディアンはわなわたと、全身を震わせると、拳を握りしめ、

「誰が、妹のストーカーになるか！」

と力んだ後、大きく肩を落とした。

「仕方がない。一から、説明してあげる！あたしの名は、乙女ダイヤモンド。人間名でいうなら、結城哲也。でも、今は女だから…結城徹子でいいかしら？」

「結城徹子！？」

あたしは思わず、口に出してしまった。

「乙女ガーディアンは、女神を直属で守る戦士。その力を、すぐに発揮できるように、男がかけたら、女になるのよ。身も心もね」

「結城徹子…」

あたしの背中に、悪寒が走った。言葉に出すだけで、気持ち悪い。

べ、べつに、世間にもしかしたら、いっしゃるかもしれない結城徹子さんがキモいわけでなく…

前にいる相手が気持ち悪いのだ。

まるで、兄がオカマバーで働いてる時の…源氏名みたいじゃない。  
でも、徹子はいわ！捻りがないわ！

あたしは乙女ソードを握り締めると、上段に構え、

「名前に！捻りがないだろ！」

そのまま、渾身の力を込めて、乙女ソードを振り落とした。

「そうね」

乙女ダイヤモンドは、避けることもなく、乙女ソードを肩に受けた。

「徹子は…かわいくないわね」

乙女ダイヤモンドは顎に手を当てて、考え込んだ。

「え」

乙女ソードを振り抜くことなく、刀身が真っ二つに折れた。

「じゃあ…里香にしましょう！あんたが、里奈だから」

乙女ダイヤモンドは微笑みながら、斬りかかってきたあたしの鳩尾に拳を叩き込んだ。

「な」

全身に痺れが走った。

「里奈…知ってた？あんたの名前…あたしがつけたのよ」

「ああ…」

あたしの耳に、その言葉は聞こえていたが、脳には達しなかった。

あたしは、一撃で意識をかられた。

変身が解け、膝から崩れ落ちていくあたしを、左腕で受け止めると、

乙女ダイヤモンドは眼鏡を外した。

「里奈…」

哲也は気を失ったあたしの顔を、覗き込んだ。

乙女ガーディアンに長時間…変身していると、哲也は本当の女になつてしまう。

そうになると、変身を解いても、男には戻れない。

男の哲也が、乙女の力を使うには、そのくらいのリスクが必要であつた。



逃走！

「大体：京都にまで来て、あんな変態や化け物と戦わなくちゃならないのよ」

1人ボートを漕ぐ桃子。

別に、メンバーと離れた訳ではない。

5人一組で、行動している為、桃子だけが単独でボートに乗ることになってしまったのだ。

デートスポットとしても有名な嵐山。

桃子達一行は、鈴虫寺を参拝した後…ここ、嵐山にきたのだ。

ちなみに鈴虫寺とは、一年間鈴虫が見れることで有名だが、

縁結びでも有名で、普段からカップルや女性達で長蛇の列ができている。

境内に入ると、有難い説法を聞かされ…最後に幸福と書いたお札を貰うことができる。

そのお札は、彼氏彼女ができると、お寺の入りにいらっしやるお地蔵様に、お札を返しに来なければならない。

確か…郵送もできたはずだ。

なぜ…そんなに詳しくて、うるおぼえかと言いますと！

原作者は、返したことないからだ。

知り合いに、ただ鈴虫が一年中見れるときいたので、その寺に行った原作者は絶句した。

カップルや女友達が、むちゃくちや並んでいたからだ。仕方なく、その中で1人腕を組む。

いきなり降りだした…ぱらつく雨の中でも、並び続ける作者を、はなから見ると、

どんなに相手がほしいねんと突っ込みを入れたくなるが…悲しいかな…

作者は説法を聞くまで、縁結びとは知らなかったのだ。

その汚点も、今…花開いた。

「って！肝心の鈴虫寺の画面がなんて、なかったでしょうが！」

桃子は思わず、個人的な回想に突っ込んでしまった。

壮大な広々とした桂川をせき止めた中で、1人寂しい桃子は、

多分あの時の作者と、同じ気持ちだろう！

そうだ！そうに違いない！

「あたしは、寂しくないです！あたしは、京都に１人で来ないし！」

.....。

かくして、竜田桃子の過酷な戦いは、決まったのであった。

「え？」

桃子が、ナレーションに驚いていると、

突然、目の前の水が盛り上がり、

巨大ないちごが飛び出してくると、体に生えた無数の蛇が桃子に向かって、襲いかかってきた。

「や、八つ当たりじゃない！」

桃子が叫んだ。

「わが名は、再生魔神へびいちご！寂しい１人旅の怨念が、私を復活させた」

へびいちこの全身から生えた蛇が、桃子の体に絡みつけ、這い回る。

「き、気持ち悪い！」

絡み付いた蛇達は、ボートから桃子空中に浮かべた。

「大きいお客様にも、サービスしなければ！」

へびいちごは一度、桃子を水の中につけると、

また空中に浮かべた。

制服が透けて、ピンクのブラが画面にアップにある。

「あの時の雨は、もっと…冷たかったぞ」

へびいちこの言葉に、哀愁が漂う。

ボートに乗った黒タイツの下っぱ達が、桃子のクラスメイトやカッ  
プルに襲いかかる。

特に、カップルには激しく水をかけて、いらがらせをしている。

「あ、あたしは…ただ…平穩に学生生活を送りたかったただけなのに  
」

桃子の体が、ピンク色に輝くと、絡み付いた蛇達を引きちぎった。

「乙女ハンマー！」

桃子は乙女ピンクに変わると、巨大なハンマーをへびいちごに叩き込んだ。

水飛沫が上がり、へびいちごは頭の天辺から、へこんで潰れていく。ハンマーを離すと、もう一度押し込むように、ハンマーに蹴りを入れた。

そして、その反動を利用して、ジャンプすると、川をせき止めている柵を飛び越え、その向かうにある橋：渡月橋の手摺の上に着地した。

「兵装！」

ピンクの乙女ケースを突きだすと、巨大なライフルに変わった。

「狙い撃つわ」

桃子は、ライフルについたスコープから、人々を襲っている下っぱ達を次々に撃った。

百発百中で、下っぱ達を撃ち抜いた。

「きいいー！」

カン高い声を上げ、巨大な影が、渡月橋の向こうから飛んでくるのが、気配でわかった。

桃子は、照準を影に向けた。

スコープに一瞬、手摺の上を走ってくる影をとらえたが、すぐに消えた。

「チッ！」

桃子は、ライフルを上に向け、照準をつけずに引き金を弾いた。

桃子の頭上を、巨大な緑の猿が飛んでいた。

ライフルから出た銃弾は、空中で横に移動した猿に当たることはなかった。

くるりと回転すると、桃子の後ろに着地した。

「我が名は、抹茶モンキー！乙女ピンク！貴様の命を貰う！」

「うるさい！」

ピンクは引き金を続けて弾いたが、残像が残る程のスピードで動く抹茶モンキーには当たらない。

二車線はある巨大な橋の上を行き交う車は、銃声にパニックになる。

そして、両側から、数えきれない程の下っぱの大群が現れ、走ってくる。

車は突然、出現した大群に、急ブレーキを踏み、ハンドルを切った。けどその為に、車はぶつかり合い、大事故になった。

「兵装！」

ピンクは、ライフルを一回転にさせた。

「乙女マシンガン！」

形が変わり、マシンガンになった武器を、抹茶モンキーに向かって連射した。

「げ！」

さすがに、驚いた抹茶モンキーは、背を向けて、逃げ出した。

「待て！」

ライフルから発射される銃弾の嵐は、抹茶モンキーには数発当たったが、それ以外は下っぱや、関係ない人々にも当たりそうになった。

「この野郎！」

桃子は手摺から飛び降りると、逃げる抹茶モンキーに向かって走りながら、撃ち続けた。

パニック状態が広げる嵐山。

橋から美空ひばり記念館の前まで移動し、さらに名物のコロッケ屋さんを通り過ぎたが、まだ仕留めなれない。

「死ねえ！」

しかし、ムーンエナジーには、限りがある。

カチカチ。

「え！」

玉が尽きるとともに、乙女ピンクは桃子に戻った。

電柱や、通りに並ぶ店の中に隠れていた下っぱ達が、状況を確認してから、ぞろぞろと出てきて、桃子を包囲していく。

「変身が解けたか！」

抹茶モンキーは足を止め、振り向くと、

両手をクロスさせた。

鋭い爪が飛び出すと、抹茶モンキーはジャンプした。

「くらえ！抹茶大切断！」

爪で、桃子を引っ搔こうとしたが、突然抹茶モンキーの全身から、血が吹き出した。

どうやら、結構当たっていたようだ。

抹茶モンキーは、大爆笑を起こした。

抹茶モンキーは倒した。

しかし、桃子は下っぱ達に囲まれてしまった。

絶体絶命だ。

「死ねえ！」

早奈英を背負いながら、走る九鬼を、取り囲む下っぱ軍団。

住宅地を疾走しながら、攻撃をかわす九鬼の動きに、下っぱは舌を巻いた。

「こ、こいつ！」

ナイフを突きだすが、九鬼の蹴りで、ナイフは飛んでいく。

「こいつは、人を背負ってるんだぞ！」

家屋の屋根から、下っぱスナイパーが、九鬼の頭に向けて、発砲した。

しかし、九鬼は乙女ケースで銃弾を弾いた。

「何!？」

スナイパーの位置を確認した九鬼は、マンションの中に逃げ込んだ。

「追え!」

階段を登った九鬼は、三階の踊り場から、ジャンプした。

「生徒会長!」

思わず目をつぶった早奈英を背負いながら、飛び降りた九鬼の真下には、先程のスナイパーがいた。

「な!」

驚いたスナイパーは、上に銃口を向ける前に、九鬼の膝がスナイパーの顔面にヒットし、鼻をへし折った。

そして、素早く猟銃を奪い取ると、マンションの踊り場に姿を見せた下っぱの肩を撃ち抜き、新たに銃弾を込めると、下にいる下っぱ達の足を撃ち抜いた。

「しっかり、捕まってる!」

九鬼は、隣の家ベランダにジャンプすると、さらにその先の塀に着地し、そこから路上へと降り立った。

すると、新たな下っぱが哲学の道の方から走ってくるのが見えた。

九鬼は舌打ちすると、早奈英を背負いなおし、駆け出した。

「抜け道に行くわ…あそこなら」

横に寺や学校がある比較的広い道に出た九鬼は、南禅寺へと向かう道を走っていた。

「いかさへんでえ！」

お寺に頭を下げ、参拝客を装っていた巨大な携帯電話が、九鬼の行く手を阻んだ。

「我が名は、再生魔神ポケ Howardin！今回は、携帯電話は止まってへんでえ！毎月楽々のカード払いにしたからや！」

ポケ Howardin の画面に映った人差し指が、九鬼を指差し、

「さあ！恥じらいのレッドはん！今度こそ、パンチラをネット世界の晒しもんにてやるわ！ハハハ！」

高笑いをするポケ Howardin は、はっとした。

「そんなアホな！」

とんでもない勘違いに気付いたのだ。

「レッドはんやおまへんやないんかい！」

ポケハウダインが気付いたときには、九鬼の回し蹴りがポケハウダインの画面に突き刺さっていた。

「し、主人公と…絡むんやなかったんでっか！き、脚本と違うや…おまへんか…」

一撃で崩れ落ちるポケハウダイン。

「だったら…再生魔神になるオハー…うけへんかったのに…」

九鬼は、ポケハウダインを倒すと、すぐに走り出した。

「携帯電話に、蹴りって…無料修理してくれへんやろな…。最近、機種変更高いし…」

ポケハウダインは、背中から倒れ、

「わてって…下っぱより…弱いんちゃう…」

ポケハウダインの画面に、涙が映り、

「予想外です」

CMの台詞を言って、ポケハウダインは大爆発を起こした。

「あ、あたしの携帯！」

寺内に隠れていた半田が現れて、もとの大きさに戻った携帯を手に取り、

「ソ。トバ。ク…に持っていないくちゃ…」

じっと見つめると、

「自然に壊れたは…無理があるわね」

深くため息をついた。

「もうすぐだから！」

早奈英を背負いながら、走る九鬼の目に、緑に覆われた広い公園のような境内が見えてきた。

大寂門を抜け、左に曲がれば、南禅寺内に入ることができる。

「待て！」

門を抜けてすぐ…また、行く手を阻むもの達がいた。

白い豆腐に足が生えた…謎の物体。

「我らの名は、湯豆腐三兄弟！よくも、父ちゃんを！」

「よくも、母ちゃんを」

「よくも父ちゃんか！母ちゃんを！」

三兄弟ははっとして、輪になり話し出した。

「あれは、父ちゃんだろ？」

「いや、母ちゃんだよ」

「でも、いつしよにこされたから…ある意味、兄ちゃんじゃない？」

一番小さい豆腐の言葉に、おおーっと感心すると、

「でも…姉ちゃんの方がよくない？」

三兄弟は悩み出した。

「兄ちゃんより…姉ちゃんの方がいいな」

2つの意見が、決まりかけた時、

一番小さい豆腐が口を挟んだ。

「僕らは、男なんかな？」

その言葉に、2つははっとした。

頷き合つと、

「勿論、あたしは女よ！」

「このすべすべの豆腐肌は、女の証よ！」

そうよそうよと頷き合う2つに、また小さい豆腐が言った。

「根本的に、豆腐に性別はあるの？」

その質問に、はっとする2つ！

その間に、九鬼は南禅寺の中に入った。

国の文化遺産に指定されている三門の前を走り抜ける。

絶景かな絶景かな！

と石川五右衛門が、言ったといわれている場所。

実際は、年代が合わないらしいが…。

現在の門は、一度火災を消失したものを1628年に、大坂夏の陣で死んだ武士をともらう為に、藤堂高虎が再建したものである。

九鬼が門の前を通り過ぎた後、大分たってから、下っぱ達が姿を見せた。

「だから、無理矢理でもあるで、よくなあゝい」

「女でよくなあゝい！」

「わかったわ」

三兄弟の意見が、統一された時には、

彼らの出番はなくなった。

「お姉ちゃん…冷めちゃったね」

そして…彼らは、湯豆腐ではなくなった。

「まったく…どうして、あたし達が、参加しなければいけないのよ」  
三門の下で、腕を組み、ため息をついているのは、相原理香子だ。

「仕方ないじゃない。大月学園の先生が…何人も退任したからね」

理香子の隣にいるのは、橘楓は京都マップを見つめながら、

「あたし達の学校と、姉妹校だから…それに、大月学園の理事長は、あたしのおばあちゃんでもあるし…」

「そうなんだあ〜」

理香子は背伸びをしながら、あっさりと流しかけた言葉に、はっとした。

「え!」

理香子は、楓の顔を覗き込んだ。

「そんな話…あたし、聞いてないけど!」

驚く理香子に、楓は京都マップから目を離さずに、

「後付けだから…」

「後付け?」

「そつよ」

楓は、広げていた京都マップを畳むと、

「あたし達が、他サイトで出ている小説を、作者が書く暇がないから…理香子ラブの作者が、原作者権限を使って、この映画にねじ込

「んだよ」

「え！」

理香子は、驚いてみせると、

「あ、あたしと中島のラブストーリーは、どうなるのよ！」

楓にすがり付いた。

「知るか！あたしも、この世界でやっていけるか…わからんのに」

「講義よ！講義！」

理香子が1人、わめいていると、

2人の目の前を、黒タイトルの集団が通り過ぎていった。

理香子と楓は、その集団を目で見送った後…互いに顔を見合わせた。

「何？今の？何なのよ！」

軽いパニックになる理香子に、楓は京都マップを差し出した。

それは、京都マップを装った台本だった。

それを受け取った理香子は、そこに書かれた台本に目を通した。

「乙女戦隊…月影？」

理香子が眉を寄せていると、目の前を巨大な木綿豆腐が走っていく。

「ヒーローものよ」

楓は、理香子の肩に手を置くと、

「一応：パラレルワールドみたいな感じで頑張りましょう」

「ええーっ！」

嫌な顔をする理香子に、

「仕方がないでしょ！あたしらは、シリーズ化しなかったんだから」

楓は、理香子の両肩に手を置くと、

「生き残る為に、世界に馴染むわよ」

握る手に力を込めた。

「下がうるさいみたいね」

三門の上に登った夏希と蒔絵は、１メートル程の幅しかない本堂を囲む通路に、身を潜めていた。

「やつらも、重要文化財には手を出さないでしょ」

夏希は安心したのか…大欠伸をした。

綱を伝いながら、直角に近い階段を上がり、たどり着いた安らぎの場所で、ずっとぼおつとしていたくなる。

夏希は、ついさっきの乙女ガーディアンとの戦いも忘れそうになる。

蒔絵は、ずっと携帯をいじっていた。

誰にメールをしてるんだと、ちらつと携帯を覗いて見た。

メールではなく、RPGを無音でやっていた。

どうやら、修学旅行中に、クリアを目指しているらしい。

「…」

夏希は、蒔絵から目を外すと、

三門から見える京都の町並みを眺めた。

古都と言われるが、見下ろす町並みは、そうは思えない。

バスで前を通った京都タワーが、目に入った。

「九鬼…大丈夫かしら？」

夏希は、ばらばらになった九鬼達を心配した。

だけど、九鬼なら…大丈夫と、なぜか思えた。

「きつと…大丈夫」

だけど、夏希は…九鬼が変身できないことを知らない。

「あっ」

近くから、声がした。

反射的に、夏希は声がした方を見た。

「あ」

夏希も、声を出してしまった。

階段を上げてきたばかりの男子学生と、目があった。

その男子学生は、清水寺であつた少年だつた。

ハンカチを拾って貰い…たった一瞬、目が会っただけの少年を、なぜ覚えていたのか…。

それは、簡単だった。

一目惚れだろう。

「あ、ああ…」

口ごもる夏希に、階段から通路に完全に体を出した男子学生は、頭を下げた。

「どうも」

男子学生は、頭を下げた。

「さ、先程は、ありがとうございました」

夏希は頭を下げた。

「い、いいですよ！あんなくらいで頭を下げられると…こっちが困ります」

はにかみながら、両手を振る照れた仕草に、

夏希はきゅんとなった。

はっと見は、あんまり男前ではないけど、誠実そうで好感が持てた。

夏希の隣で、携帯ゲームに勤しむ蒔絵は、男子学生に見向きもしない。

「あのお〜」

夏希と、男子学生は自然と話だした。

三門の上は、なぜか夏希達…三人しかいない。

数分間雑談した後、男子学生は、いきなり携帯を見ると、慌てだした。

「やばい！もう降りないと…」

男は夏希に頭を下げ、

「下に、友達を待たしてるんですよ。俺だけが、上を見たいと言ったから…」

階段に戻ろうとする男を、夏希は思わず止めてしまった。

「あ、あのお…」

夏希は呼び止めたことに、自分で驚いた。

だけど、せつかくの行動だ。

思い切って、きくことにした。

「お、お名前は？」

その質問に、男はしばらく夏希を見つめた後、優しく微笑んだ。

そして、ゆっくりと口を動かした。

「中島…中島登」

「中島…さん…」

夏希は、言葉を頭を刻むように呟いた。

中島は頷くと、

「じゃあ…」

通路に開いた穴に、体を沈めた。階段を降りるのだ。

「中島…登」

なぜか…また会えるような気がした。

「中島…登」

名前を何度も繰り返す夏希に、時絵は携帯の手を止め、夏希を見ることなく、一言口にした。

「やめとけ…」

「え？」

しばらくぶりに聞く蒔絵の声に、夏希は驚いた。

蒔絵は携帯をしまつと、歩き出した。

夏希の前を通る時、

「今の男の目の奥…」

蒔絵は目を細め、

「影が見えた」

先程気づいた中島の瞳の奥を、思い出していた。

「影？影って、何よ！」

夏希がきいても、もう蒔絵は答えることなく、階段を降りていった。

「じゃあ…行こうか？」

一応、理香子達が見ているクラスは、九鬼達とは別だった。

自由行動だが、なぜか理香子についてくる女生徒達と観光巡りをしていた。

「次、どこいかれるんですかあ？」

キラキラした目で、理香子を囲む生徒達。

「そうだなあ」

顎に手を当てて、悩む理香子はそんな生徒達の視線なんて気づかない。

（なんというか…持って生まれたオーラというか…）

楓の周りには、生徒達は来ない。

西の相原理香子。東は、九鬼真弓か黒谷蘭花。

美人として、地域で有名だが、

アイドルである蘭花と、どこか孤独と鋭さを持つ九鬼とは違い…理香子には、他の2人にはないものがあつた。

人を惹き付けるのだ。

しかし、当の本人に自覚はない。

姫と言えば、理香子。

それは、姉妹校である大月学園にも知れ渡っていた。

（そんな姫が…冴えない男が好きなんて…）

楓は何気なく、三門の上にかかる出入口に目をやった。

ちょうど降りて来た男を見つめ、

（そうそう！あんな冴えない……！？）

楓は、目を疑った。

「中島！？」

自分が声をあげる前に、理香子が声に出していた。

「うそお！」

楓は振り向き、理香子を見た。

（あの反応は、本物だ）

「中島！！」

理香子は、生徒達を掻き分けて、中島に向かって叫んだ。

聞こえているはずだが、中島は答えない。

背中を向けて、三門の柱を回った。

「おい！中島！」

理香子は走った。

そして、柱の角を曲がった。

「え」

だけど、中島はいなかった。

柱の太さは、三メートルくらいだ。

そんなに早く消えるはずもないし、隠れる場所もない。

楓は柱を回らずに、三門の下をくぐり抜け、反対側に回った。

しかし、どこにも中島の姿はなかった。

「中島……」

理香子がきよろきよると周りを確認していると、

柱の入口から、蒔絵が出てきた。

少し遅れて、夏希が姿を見せた。

そして、柱の横で立ち竝む理香子に気付いた。

「あっ！ 姫だ」

「こつちよー！」

南禅寺の端…目立たないところに、水路閣という建造物があった。

よくサスペンスドラマで、バックに使かわれる煉瓦造りのモダンな建物は、南禅寺という寺院の中にあるには、不似合いであるが、

木々の間に、緑が染み付いた橋のような建造物を見た瞬間、人々は異国情緒に包まれてしまう。

九鬼は、水路閣の下をくぐり抜けると、石段をかけ登った。

水路閣は琵琶湖からの疎水を運んでおり、

京都の川はすべて南に流れているのに、この上だけは北へと流れている。

まっすぐ上がると、南禅院に入るが、九鬼はさらに右に曲がると、一気に水路の上に出た。

静かな空間に、水音だけが響いていた。

深さは二メートル以上はあり、その下を水が激しく流れており、左手は山、右側は下から生える木々でわからないが、水路の側面になっ  
ており、普通に落ちる。

山手からも、右からも生えた木々と伸びた枝が、天然のアーチとなり、奥を見えなくしていた。

昼間でも薄暗くひんやりした空間は、京都でも異世界を思わせた。

一般の観光客は、奥まで行く人は少ない。

昔は、なかなか通り抜けられなかったが、今は抜け道がある。

関西電力の発電用水路の建物があり、広大な溜め池にぶち当たるのだ。

九鬼は水路の上を走り出した。

山側ではなく、右手の道を。

数センチしかないとはいえ、地元の人や犬の散歩に使う人もいる。

左右の道を挟む…水路の幅は一メートル以上はある。

数メートルの間隔で、鉄の細い板が橋のようになっている。

人のジャンプ力では、その橋を飛びながら、渡るには少し無理があるだろう。

木々のアーチの下：水音だけが響く静寂の空間を走る九鬼の前に、突然誰かが現れた。

行く手を阻むのは、加奈子だ。

その手には、乙女ケースが。

「装着」

どめ色の光が、木々のアーチからの木漏れ日に照らされて、乱反射した。

九鬼は、山側にジャンプすると、岩肌に早奈英をもたれさせ、再び水路を飛び越え、右手に着地した。

「九鬼！」

そして、乙女どめ色に変身した加奈子がかかってくるのを、右手を突きだして、待ち構えた。

## 水が流れる空間で

「生徒会長！だめ！」

早奈英の制止をきかずに、九鬼はカウンターを狙う。

乙女ソルジャーになれないならば、相手の力を利用するしかない。

「九鬼真弓！お前がここに来るのは、わかっていた。なぜなら、昔！お前は、あたしにここをススメていたからな！」

まだ一年生だった頃、九鬼は加奈子に語っていた。

短い異空間である…この場所が好きだと。

「この前は、邪魔が入ったが！」

走り寄る乙女どめ色を追走するように、無数の包丁が飛んでいた。

「お前の狙いは、わかっている！この多さには、カウンターはとれまいて！」

「クッ」

九鬼は奥歯を噛み締めた。

変身して、ムーンエナジーを使えたら、防ぐことは可能だが、今は

できない。

左右に逃げようにも、狭い水路閣の上で避けることはできない。

「生徒会長！」

早奈英は不自由な足で、山肌にもたれながら、何とか立ち上がると、あるものを突きだした。

それは、シルバーの乙女ケース。

「装着」

早奈英の体をシルバーの光が、包むと…銀の眼鏡と戦闘服を着た乙女ガーディアンが、出現した。

「何！？」

目を見開いた乙女どめ色の目の前に、着地すると、

「乙女バリア！」

九鬼を庇うように、両手を広げた。すると、銀色の壁が出現した。

包丁は、壁に突き刺さると、塵と化した。

そのまま、シルバーは自分がつくった壁を拳で突き破ると、乙女どめ色に襲いかかる。

「また貴様か！」

どどめ色は、拳を握り締めると、

「どどめパンチ！」

「シルバーパンチ」

二つの拳が交差し、腕が絡まった。

クロスカウンターのような体勢に、なった2人。

互いの拳は、互いの頬にヒットしていた。

「な……」

よろけるどどめ色と違い、シルバーは完全に、膝を地面についでいた。

カウンターのダメージは、明らかに、どどめ色の方にあつたはずだが、見た感じはシルバーの方がダメージが大きそうに見えた。

「早奈英さん！」

九鬼は、乙女ケースを握りしめ、

「装着」

と叫んだが、ケースは開かない。

「い、こいつは…」

どめ色は肩で息をしているシルバーを見下ろし、

「面白い」

口許を緩めた。

そして、膝をついているシルバーを蹴りあげた。

「まさか、そんなところで乙女ガーディアンのが、手に入るとはな！」

大笑いすると、倒れたシルバーに向かって、手を伸ばした。

「早奈英さん！」

変身をあきらめた九鬼はジャンプすると、シルバーを飛び越え、どめ色に膝をいれようとした。

「邪魔だ！」

どめ色が右手を払っただけで、九鬼は吹っ飛び、水路をこえて山肌に、肩から激突した。

「お前の相手は、後でしてやる」

どめ色は、ゆっくりとシルバーの眼鏡に手を伸ばす。

「今は、ガーディアンのを手に入れるのが、先」

「さ、早奈英さん…」

九鬼は何とか、もう一度攻撃しようとしたが、体が動かない。

「早奈英さん！逃げて！」

九鬼の叫びは、突然上がった水飛沫によって、かき消された。

九鬼とどめ色達の間には流れる水路の疎水から、突然現れた二つの腕は、

一つは、どめ色の顔面を強打し、

もう一つは、どめ色の足首を掴むと、バランスを崩させ、水路閣の上から、どめ色を落とさせた。

「なに！」

突然のことで、数メートル下に落下していくどめ色。

「あれくらいで、死ぬとは思えんが…まずは、逃げるぞ」

二つの腕は、どめ色を落とした後、九鬼が来た方へ戻っていった。

そこに立つものは！

「十夜さん」

九鬼は何とか、立ち上がると、水路を飛び越え、シルバーを抱き上げた。

十夜は、肘に戻った腕の感触を確かめてから、九鬼に向かって、笑った。

変身を解いて、早奈英に戻ったシルバーを背負うと、九鬼は十夜とともに、水路閣の上を走り抜け、

水道局の施設を抜けると、トコッロの線路跡地を飛び越え、国道へと出た。

そして、信号を渡ると、河原町へ向かう道を曲がった。

「十夜さん…ありがとう」

後ろにいる十夜に、振り向こうとした九鬼の視線の端に、太陽の光が照り返すのが映った。

九鬼は反射的に、乙女ケースを突きだした。

「勘違いするな」

十夜が横風に振るった日本刀の研ぎ澄まされた刃が、九鬼の顔：数センチ向こうで、妖しく輝いていた。

「俺は…ただ、貴様が他のやつにやられるのが、許せないだけだ」

「十夜さん」

日本刀と乙女ケースがせめぎ合う。

「お前を倒すのは、この俺だ」

十夜は日本刀を引くと、一回転させた。

すると、日本刀は消えた。

「フン」

鼻を鳴らすと、十夜は九鬼の瞳を見つめ、

「俺の中にいるあいつが、疼いただけだ。今度は助けんし、斬る！  
例え、変身できなくてもな」

強い意思を示した。

「十夜さん…」

九鬼も十夜を見つめた後、頷いた。

「フッ」

十夜は視線を九鬼から外し、背中にいる早奈英に向けた。

まだ顔色が悪い早奈英を、目を細めてみつめ、

「人間とは、不憫だな…。我々ならば、悪くなったパーツを取り換えればいいだけだが…」

「人は、あなた達と違うわ!」

九鬼は、十夜を睨んだ。

十夜は肩をすくめ、

「まあ…どうでもいい。こいつが、シルバーでもな」

苦笑しながら、九鬼に背を向けると、歩きだした。

「俺は、お前と…結城里奈さえいれば…それでいい」

九鬼は、去っていく十夜の背中を見送った。

その背中に、戦士の哀愁を感じながら…。

「九鬼さん…あ、あたし」

やっと落ち着いて、顔色がよくなった早奈英に、九鬼は微笑んだ。

「いいのよ…心配しないで」

九鬼は、手に持つ…黒い乙女ケースに目を落とした。

## 夜の狭間

「今日、お昼頃に起きた…嵐山での乱射事件は、現れた怪人達よりも、ピンクの戦闘服を着た謎の人物によるものと、確認が取れました」

何とか、怪人達の追っ手を逃れて、集合場所にたどり着いた大月学園。一行は、京都の外れにある温泉街で、宿を取るようになった。

そこは、奈良寄りで、急流滑りで有名な観光地のそばでもあった。

しかし、着いた時は夕方でもあり、急流滑りは予定には入ってなかった。

「尚…戦闘服の容疑者は、突然行方を眩まし、その場からいなくなりました。そして、周囲は突然、空から降ってきた鋼鉄のたらいによって、一時パニック状態に陥りました。幸い…タライは、怪人達だけを直撃。気を失った怪人達は、警察に連行されましたが…」

旅館内のロビーで、ニュースを見ていた蘭花は呟いた。

「乙女タライか…」

乙女タライ！

変身が解けてしまう不慮の状況を想定されて考えられた…乙女ピンクの最後の技である。

敵わないと、土下座した瞬間、空から鋼鉄のタイヤが周りを囲む敵目掛けて、落ちてくるのだ。

敵は、普通土下座した相手に目が向く為…まさか、頭上から鋼鉄のタイヤが落ちてくるとは、思わない。

その盲点をついた攻撃なのだ。

「戦闘服の容疑者による乱射で、一部店の看板が破壊されただけで…怪我人は、でていません。怪人は、嵐山以外でも、現れた模様です。ので、住民の皆様は、ご注意を…」

蘭花は、テレビのチャンネルを変えた。

他愛もないお笑い番組にすると、テレビの前のソファに腰かけた。

そこには、アシスタントの1人として、司会者の後ろに立つ自分が映っていた。

自分の愛想笑いつてやつは、客観的に見ると、ムカつくものである。

でも、蘭花は冷たい視線を画面に向けながら、番組を見た。

「あれは、絶対！中島だつて！」

引率を終え、旅館に入ってきたのは、理香子と楓だった。

「でもね…ここにいるとは…」

楓は、首を捻った。

2人の声に気付き、蘭花はソファーから、玄関に振り返った。

「絶対！中島だよ。あたしが、中島を見間違うはずがないじゃん！」

妙に、自信満々の理香子に、少し呆れながら、

「まあ…そうかもしれないけど…」

一応、肯定した。

蘭花は、すぐにテレビに体を向きなおすが、2人の会話を聞いていた。

「あつ！なんか信じてないでしょ！」

「信じてるよ」

段々とこたえるのが、邪魔くさくなってきた楓。

蘭花は、2人の会話を分析していた。

（あれは…広陵学園の姫！姫が、好きといえば…あの中島か？確か…母方は…）

考えを巡らしていると、蘭花はいつのまにか、2人の会話が止まっていることに気づいた。

「あ、あれって…黒谷蘭花じゃない？」

楓のひそひそ声に、理香子は首を捻った。

「誰？」

「誰って…今売り出し中のアイドルよ。知らないの？」

「興味ない」

理香子は、そういう存在にまったく興味がない。逆に、楓にきいた。

「あんた…アイドルに興味あるんだ…」

意外そうな理香子に、楓は顔をしかめ、

「別にないけど！姉妹校の生徒だよ。学校でも、有名よ」

「そうなんだ〜。ふう〜ん」

理香子は、両手を首の後ろに回すと、旅館の奥に向かって歩きだした。

楓はため息をつき、心の中で思った。

（まあ…アイドルでもない…あんたが、有名の方が凄いただけだね）  
均整で理想的なプロポーションをした理香子の後ろ姿を見つめながら、そつりゃあそうかと、楓は納得した。

理香子の後を、小走りで追う楓が、フロントからいなくなったのを確認すると、蘭花はソファから立ち上がった。

「姫が、ここにいて…あいつの血筋も、この地に来ている？」

蘭花は、理香子達が去った廊下を見つめ、

「やはり…そうなのか？」

しばらく凝視していた。

「あああ！結局、結城来なかったね」

旅館の月の間で一泊することになった九鬼、夏希…時絵と早奈英。

蘭花だけは、別の部屋に振り分けられていた。

九鬼は、早奈英以外の乙女ケースを月が見える窓際に置いた。

早奈英の正体を誰にも、教える気はなかった。

それは、早奈英が戦う為に乙女ガーディアンになった訳ではないからだ。

それに、乙女ガーディアンのケースは、ムーンエネルギーを補充する必要はなかった。

月の女神を護る為に、存在するガーディアンには、特別に衛星が備えられていた。

月の見えなくても、その衛星が絶えず、月の光を集め、ガーディアンに送り続けているのだ。

九鬼は、黒い乙女ケースを見つめ…そっと表面を撫でた。

充電はできるようだが…。

「駄目だ！また携帯止まってる」

里奈に電話をかけていた夏希は、例のアナウンスを聞いて、ため息をつきながら、電話を切った。

「ちゃんと払えて、いうのー！」

夏希は、テーブルの上に置かれている急須に、ポットからお湯を注ぎ、お茶を飲んだ。

「…」

蒔絵は畳に寝転んで、携帯をいじっていた。

早奈英は、座布団の上に座っていた。その目は、九鬼の背中を映していた。

「まだ…時間があるわね」

食堂に集合する時間まで、まだ30分くらいある。

夏希はお茶を飲み干すと、

「やっぱり、お茶より…なんか、炭酸系が飲みたい！」

夏希は、立ち上がった。

「買ってくる！」

部屋を出ていこうとする夏希に、九鬼は青の乙女ケースを差し出した。

「夏希！これを」

「いいよ」

夏希は断った。

「すぐ、そこだし」

自動販売機は、旅館を出て、曲がり角のそばにあった。

「で、でも、危ないわ」

「大丈夫！」

九鬼の心配を遮って、夏希は部屋を飛び出した。

早奈英は目で、夏希が出ていくのを見送った。

「あたしは、コーラ」

ぼそつと言った蒔絵に、

「あいよ！お金は後でね」

夏希はこたえながら、部屋のドアを閉めた。

「まったく…心配症なのよね。九鬼は」

誰もいないフロントから、飛び出した夏希は、旅館の門を抜け、薄暗い道で輝く自動販売機に向かって、走り出した。

一応、気を探ってみるが、気配はない。

そそくさと、自動販売機の前に来た夏希は、お金を自動販売機に入れた。

「まずは…コーラと」

ボタンを押し、落ちる音がしたので、しゃがんで、取りだし口に手を差し入れた。

しかし、取れない。

「あれ？」

コーラの缶は掴んでいる。だけど、取れない。

「あれ？あれ？引つかかっているのかな？」

缶を取ろうと格闘している夏希の頭の上から、笑い声がした。

「はははは！まさに、引つかかったな！五月雨夏希！」

「え？」

しゃがみながら、上を向いた夏希に、自動販売機が話しかけていた。

「わたしは、魔神自動販売機！お前達が、喉が渇くのを昨日から待っていたのだ！」

「魔神！？」

夏希は慌てて、手を抜こうとしたが、抜けない。

「ははは！」

魔神自動販売機は高笑いをし、

「わたしの中に、手を突っ込んだ者は、決して逃れることのできない蟻地獄ホールド！貴様は、罠にはまったのだ！はははは！」

笑いが止まらない魔神自動販売機。

しかし！

「取れた！」

夏希は、取りだし口から腕を抜くことができた。

「なにいい！」

驚く魔神自動販売機をつぶらなセンサーに、夏希の手が映った。

魔神自動販売機は、手をアップで映すと、怒りだした。

「き、貴様！コーラを諦めたのか！」

「まあ…いいや…」

夏希は、しばらく魔神自動販売機を観察した後、別の自動販売機に向かって走り出した。

「き、貴様！百二十円払ったんだぞ！惜しくはないのか！」

「もういいよ！」

夏希は別の自動販売機に、千円札を投入した。

「か、金持ちがあ！お金の有り難みを知れ！」

ガタン！

普通に、コーラを取り出した夏希には、もうどうでもよかった。

「おのれえゝ。マイナーな銘柄しかおいてないと思い、馬鹿にしゃがって！」

魔神自動販売機は、1人では動けない。

「スタッフゝスタッフゝ」

と呼んでも、来ない。

搬入スタッフがいないと、移動はできない。

自分の分のジュースも買った夏希が、魔神自動販売機の前をスキップしながら、通ると、

「すまない！中央にある緊急ボタンを押してくれ！」

魔神自動販売機は、夏希に懇願した。

しかし、夏希は完全無視だ。

「き、貴様！困ってる人がいたら、助けるのが、ヒーローではないのか！」

夏希はもう、魔神自動販売機の相手をする気はなかった。

旅館に入ろうとした夏希は、入口の敷居が少しだけでていることに気付かなかった。

「きゃ！」

つまづいた夏希の手から、コーラが飛び出し…地面に転がった。

「もお！」

慌てて拾おうと、しゃがんだ夏希の目に、誰かの足元が見えた。

その誰かも屈むと、手を伸ばし、こっちに転がってきたコーラを拾い上げた。

「はい」

夏希に向かって差し出されたコーラを受けとるよりも、

夏希は自分に向けられた優しい眼差しに、体が動けなくなった。

「よく物を落とすね」

「中島さん！」

微笑む中島が、目の前にいた。

夏希の鼓動が高まった。

夏希は、中島から思わず目を逸らした。

（ま、まさか！こんなところで、中島さんに会っなんて…）

夏希の顔が赤くなる。

（あたし達は…運命の赤い…）

夏希はちらりと、中島の手を見た。

（赤い…糸で結ばれているんじゃないの！）

中島の手にあるコーラは、確かに赤い。

「あ、あのお…」

夏希は立ち上がり、コーラを受けとると、中島の顔を見つめた。

「…？」

見つめ合う2人。

「あのお…ですね…」

夏希が言葉を続けようとした時、

後ろから声がした。

「夏希！」

帰りが遅い夏希を心配して、九鬼が門から飛び出して来た。

「す、すいません！」

九鬼の声に気付き、夏希は恥ずかしさから慌て出した。

「夏希！」

飛び出して来た九鬼は、2つの乙女ケースを持っていた。

「九鬼！ど、どうしたの？」

白々しく、九鬼に駆け寄った夏希に呆れ、

「あなたの帰りが、遅いから…」

「ご、ごめん、ごめん」

「うん？」

九鬼は、夏希のそばにいる中島に気づいた。

中島は微笑むと、頭を下げた。

九鬼も頭を下げた。

「さあさあ！部屋に戻って！」

照れた夏希は九鬼の背中を押して、無理矢理旅館の方へ戻す。

門を潜る前に、夏希は中島に手を振った。

中島も手を振り返す。

夏希は気付いてなかった。

中島は、九鬼が現れてから、その手にあった乙女ケースをじっと見つめていたことに……。

「遅い！」

蒔絵は携帯から、目を離さずに、文句を言った。

「い、ごめん」

夏希は謝りながら、コーラを蒔絵に渡した。

時絵がコーラを受け取り、蓋を開けると、

コーラは噴き出した。

コーラまみれになる時絵の顔に、眼鏡がかかると、乙女グリーンに変身と同時に、乙女ビームが発射された。

「じ、ごめんなさい！」

乙女ビームは、開いていた窓から、月に向かって放たれた。

その光を見つめながら、背を向けて歩きだした中島と、入れ違いうに、理香子が旅館から出てきた。

「花火？」

ビームに気を取られた理香子は、中島の後ろ姿に気付かなかった。

理香子は首を捻りながら、自動販売機に向かう。

魔神自動販売機の前に立って、じっと見つめてから、

「ろくなものがないわね」

理香子は、さらに向こうの自動販売機に走った。

奈良へ

お約束の温泉に、夏希や蒔絵…蘭花の入浴シーンのワンカットが、画面に映る。

なぜか、半田先生だけが、全裸でポーズをつけていた。

勿論、大事なところは石罅で隠されている。

次は、就寝シーン。

部屋に敷いた布団に、思い思いの格好で寝る月影メンバー。

九鬼だけが、窓のそばに立ち、月明かりに照らされている乙女ケース達を見つめていた。

そんなこんなで、次の日。

朝ご飯を食堂で終えた一向は、旅館から少し離れたバス停留所を目指した。

途中、魔神自動販売機が置かれていた場所には、何もなくなっていた。

だからと言って、夏希は別に気にもしていなかった。

それよりも、中島との運命の再開に興奮していた。

バスに乗り、一同は近鉄京都駅へ向かう。

そこからは、近鉄電車で、奈良駅を目指す。

一時間程、揺れていると、大月学園の生徒達は、近鉄奈良駅についた。

そろそろと女の集団が、階段を上がり…奈良の地に姿を見せた。

駅前の行基像の前で、生徒達は集合する。

「今から、自由時間だ！その際は、ちゃんと班毎に行動するように。夕方、ここに集合しろ」

熊五郎の言葉で、生徒達は散らばった。

「それにしても…なんて、自由行動が多いのよ」

理香子のぼやきに、

「番組の都合よ」

楓がこたえた。

駅前から、奈良公園まではなだらかな坂になっていた。

「君達も、生徒達をよろしくな」

熊五郎は、引率者である理香子と楓に言った。

「わかりました」

楓が返事をする、理香子の周りに人だかりができた。

「相原せんぱあゝい」

アイドルを見つめるように、目をきらきらさせた女生徒達。

「どこいけます」

しなをつくる女生徒の中に、竜田桃子もいた。

「姫様」

桃子は、理香子の大ファンだったのだ。

「自由行動か…」

九鬼は、早奈英を車椅子にさせながら、

「そちらの方が、有難い」

呟いた。

敵は、あたし達を狙ってくるだろう。

それに…加奈子に、早奈英の正体がばれてしまった。

「九鬼さん？どこにいかれますか？」

九鬼の横に、蘭花が来た。

「そうですね。あたしは、引率者ですから、皆さんの行きたいところを案内しますわ」

九鬼は笑顔で、こたえた。

「そうですか…」

蘭花は腕を組み、九鬼に背を向けて、少し考え込むと、

「奈良って…確か…かぐや姫伝説の発祥の地ですよね」

また九鬼の顔を見た。

「ええ…でも、ここからは遠いですけど…」

「広陵の地でしたね」

妖しく微笑む蘭花のそばん理香子と楓達が、通った。

「確か…姉妹校の名前も、広陵…」

「…」

九鬼は、探るような蘭花の瞳に、気付いた。

「偶然かしら？」

クスツと笑った蘭花の印象に、九鬼は危険なものを感じた。

「まさか…」

九鬼は、車椅子を背にすると、蘭花を睨んだ。

「ダークメイトか」

「違うわよ」

すぐに否定すると、蘭花は肩をすくめ、

「まさか…あなたのような偽者に、ダークメイト呼ばあにされるなんてね」

「何？」

凄む九鬼に、蘭花はあるものを見せた。

「そ、それは！」

啞然とする九鬼の目の前に、黒い乙女ケースがあった。

「あたしの偽者が、真の乙女ブラックであるあたしを、ダークメイ  
トと言うの？」

蘭花は嘲るように、笑った。

絶句して、何も言えなくなる九鬼に、

「乙女ケースに、選ばれた…あたし達戦士と違い、あなたは部外者  
だけど、今までのあなたの功績は、評価してるわ」

「…」

九鬼は、拳を握り締めていた。体の震えが止まらない。

「それに…あなたはもう、変身できない。だから、もう…あたし達  
に任せて、もう引退したら、どうですか？」

何も言い返せない九鬼に代わって、早奈英が叫んだ。

「それは、違うわ！九鬼さんは！」

「いいのよ。早奈英さん」

九鬼は、早奈英の言葉を遮った。

「牧野さんでしたっけ？」

蘭火は、九鬼の横を通り過ぎると、車椅子の前に立った。

「こんな体ですけど…あなたも、乙女ケースに選ばれた戦士…。泣き言は許しません。あたしが、月影に加わったからには、今のようならけた風潮は、なくしますので」

ちらりと、九鬼を見ると、蘭花は奈良向けて歩き出した。

「どうしたんだ？」

いつものまにか、たこ焼きを買った蒔絵が、隣にいた。

「え？」

いつになく、真剣な蒔絵の口調に、九鬼は驚いた。

「あいつより、あたしはお前が好きだ。うざいを通り越してるお前がな」

蒔絵は、たこ焼きをパクつきながら、奈良公園に向けて歩き出した。その後ろを、夢見心地の夏希が、ふらふらと続いていく。

九鬼は、車椅子を押して、歩き出そうとした。

すると、後ろから、呼ぶ声が聞こえた。

九鬼が振り返ると、熊五郎が走り寄ってきた。

「九鬼！お前、平城山を知らないか？昨日から、帰ってないんだ。一応、半田先生には、連絡はあったらしいんだが…」

「そうですね…。あたしは、知りませんか？」

「そうか…。一応、引率者が減ったから、何かあったら、頼むわ」

「はい」

九鬼は頷いた。

そして、頭を下げた後、蒔絵達の後を追った。

奈良駅から、真っ直ぐ奈良公園を進んでいき、春日大社の手前で左に曲がると、

世界遺産である東大寺へと続く道に入る。

左側に広大な公園と、右手にはお土産屋が並んでいる。

我が物顔で道を塞ぐ鹿。

他の学校の生徒や、クラスメイトが、鹿と戯れる中…。一目散に、大仏殿を目指す月影一行。

たこ焼きから、お好み焼きにスイッチした蒔絵。

南大門の石段を登る為、九鬼は車椅子を持ち上げた。

向かって右にある吽形。左にある阿形。

高さ8・4メートルある像は、わずか69日で作られたと言われている。

九鬼は、その圧巻な姿に圧倒された。

左の阿形の遥か上には、板場がある。

あまり知られていないが、昔そこに盗賊が、住んでいたのだ。

また車椅子を持ち上げ、南大門を降りると、大仏殿は目の前だ。

「大仏見るのに、金かかるんかよ。やめて、焼きそば買おうぜ」

罰当たりなことを言う蒔絵。

「うん？」

九鬼は、車椅子を止めた。

「生徒会長！」

早奈英も気付いた。

「闇の波動！？」

先頭を歩いていた蘭花も、足を止めた。

「え？」

ぼおっとしていた夏希の前に、立ち上がった鹿がつぶらな瞳で、見下ろしていた。

鹿は蹄で、夏希の顔を殴ろうとした。

「夏希！」

九鬼の叫びに、夏希ははっとしたが、よけない。

「危ない」

誰かが飛び出してきて、夏希に体当たりをした。

夏希を抱き締めて、転がったのは、中島だった。

「中島さん！？」

中島は立ち上がると、驚く夏希の手を取って、走り出した。

「逃げるよ！」

「え！？」

夏希は戸惑いながらも、中島に引かれ、走り出した。

大仏殿の前にある池に沿って、右側に向かって走っていく。

「夏希！」

九鬼が後を追おうとしたが、近くにいた観光客が周りを囲んだ。

そして、頭を黒いタイツを被ると、下っぱになった。

奈良駅から、真っ直ぐ奈良公園を進んでいき、春日大社の手前で左に曲がると、

世界遺産である東大寺へと続く道に入る。

左側に広大な公園と、右手にはお土産屋が並んでいる。

我が物顔で道を塞ぐ鹿。

他の学校の生徒や、クラスメイトが、鹿と戯れる中…一目散に、大仏殿を目指す月影一行。

たこ焼きから、お好み焼きにスイッチした蒔絵。

南大門の石段を登る為、九鬼は車椅子を持ち上げた。

向かって右にある吽形。左にある阿形。

高さ8・4メートルある像は、わずか69日で作られたと言われている。

九鬼は、その圧巻な姿に圧倒された。

左の阿形の遥か上には、板場がある。

あまり知られていないが、昔そこに盗賊が、住んでいたのだ。

また車椅子を持ち上げ、南大門を降りると、大仏殿は目の前だ。

「大仏見るのに、金かかるんかよ。やめて、焼きそば買おうぜ」

罰当たりなことを言う蒔絵。

「うん？」

九鬼は、車椅子を止めた。

「生徒会長！」

早奈英も気付いた。

「闇の波動！？」

先頭を歩いていた蘭花も、足を止めた。

「え？」

ぼおっとしていた夏希の前に、立ち上がった鹿がつぶらな瞳で、見下ろしていた。

鹿は蹄で、夏希の顔を殴ろうとした。

「夏希！」

九鬼の叫びに、夏希ははっとしたが、よけない。

「危ない」

誰かが飛び出してきて、夏希に体当たりをした。

夏希を抱き締めて、転がったのは、中島だった。

「中島さん!？」

中島は立ち上がると、驚く夏希の手を取って、走り出した。

「逃げるよ!」

「え!？」

夏希は戸惑いながらも、中島に引かれ、走り出した。

大仏殿の前にある池に沿って、右側に向かって走っていく。

「夏希!」

九鬼が後を追おうとしたが、近くにいた観光客が周りを囲んだ。

そして、頭を黒いタイツを被ると、下っぱになった。

「やれ!」

立ち上がった鹿の号令で、一斉に下っぱ達が襲いかかる。

その手に、お土産に大人気の木刀が握られていた。

お陰で、近所のお土産屋さんでは、売り切れだ。

その時、大仏殿に到着した熊五郎は、二本足で立つ鹿に驚愕した。

「し、鹿男！」

その呼び方に、キレた鹿の正拳突きが、熊五郎の顔面を炸裂した。

「失礼ね！あたしは、鹿女よ」

気絶した熊五郎を残して、鹿は九鬼達に向かって、突進してくる。

「お前達、人間に言いたい！いい加減、鹿せんべいになるものを  
作れ！鹿ワツフルかと、作れるだろが！」

九鬼は、車椅子を背にして構えた。

「できないなら、チョコ味とかつくれ！」

メスと言ってるのに、角が生えてきた鹿女。

「ハリケーン！ミクシー！」

何かが、間違っているネーミングで、角を突きだして、向かってくる。

「生徒会長！」

九鬼の後ろで、早奈英が叫んだ。

「あたし！これ以上！守られているだけなんて、嫌です！」

「早奈英さん！？」

早奈英は、乙女ケースを突きだした。

「装着！」

車椅子から飛び出した乙女シルバーは、九鬼を飛び越えると、鹿女の角の間に、蹴りを入れた。

「きゃあ！天然記念物に！」

ぶっ飛ぶ鹿女。

「早奈英さん！」

「はっ！」

乙女シルバーは、鹿女に向かって走り出した。

その後を追おうとする九鬼の前に、下っぱ達が立ち塞がる。

「死ね！」

下っぱの振り上げた木刀を、九鬼は体を横にするだけで避けると、

首に手刀を差し込んだ。

「う」

気を失った下っぱから、木刀を奪うと、じろりと周りを威嚇した。

その目の鋭さに、下っぱが怯んだ瞬間、九鬼は下っぱの群れに突進した。

「装着！」

乙女ブラックに変身した蘭花は、下っぱを蹴り倒した。

「ブラック…幻影」

一斉に、四方から木刀を突きだした下っ腹は、ブラックの体に簡単に突き刺さったことに驚いた。

だが、それは幻影だった。

ブラックの体を突き抜けた木刀は、互いの体突き合った。

スピードの乙女ブラックは、蘭花でも健在だった。

アイドルとして、多忙を究める蘭花は、足だけは人一倍使っていた。それが、蘭花の強みであるが、アイドルとしての弱点でもあった。

カモシカのようにしなやかな足は、少しアイドルには似つかわしくない。

幻影で、敵の攻撃をかわし、包囲網から脱出したブラックは、大仏殿の屋根の上に、着地すると、身を屈めた。

「残念だけど…まだ戦う気はないのよね。下っぱくらいで、貴重なムーンエナジーを消費できないわ」

「早奈英さん！」

シルバーと鹿女を見失った九鬼は、夏希とは反対方向に池に沿って走ると、上へと向かう石段を、下っぱと対峙しながら上がっていった。

広大な東大寺内を、下っぱ達が走り回っていた。

逃げ惑う人々と鹿の中で、南大門を潜ったばかりの理香子達は、目を丸くしていた。

逃げ惑う僧侶に、木刀で襲いかかる下っぱ達。

「どうなってるのー！」

状況を理解できない理香子と違い、妙に納得する楓。

「これが、戦隊ものというものかあ」

何度も頷く楓の後ろで、わなわなと拳を突きだし、震える桃子。

「あたしはただ…姫といっしょに、観光をしたいだけなのにいい！」

桃子は、下っぱ達を睨み、乙女ケースを取り出した。

「装着！」

変身と同時に、マシンガンを兵装した乙女ピンクは、下っぱに向けて、乱射した。

「うりゃああ！」

銃弾の雨が、大仏殿前に降り注ぐ。

逃げる下っぱ。逃げる僧侶。逃げる観客客に、逃げる鹿。

「あつ！昨日の犯人！」

楓は、嵐山乱射事件を思い出した。

「姫！今のうちに！」

ピンクの言葉に、楓と理香子は逃げた。

取り巻き達は、もうとつくに逃げていた。

お水取りで有名な二月堂の急な階段を上り、九鬼は下つぱを蹴散らしながら、奈良を一望できる有名な舞台の上に来た。

二月に行われる星祭りでは、夕刻になると、本堂に万灯明を灯し、星曼荼羅を掲げる。その炎が燃える姿は、舞台の下から見ると、幻想的である。

「フン！」

九鬼の蹴りを喰らった下つぱが、舞台から飛び落ちると、綺麗に整えている芝生の坂を転がっていく。

九鬼が舞台の上で、下つぱを相手にしている時、階段を上がった右奥のトイレから、誰かが出てきた。

ちなみに、トイレのそばに有名なお茶屋があり、作者の学生時代の憩いの場所である。

「九鬼！」

トイレから出て来たのは、加奈子だった。

「装着」

乙女どどめ色に変身した加奈子が、舞台に向かおうとした…その時！

お茶屋の暖簾の下から、箸が飛んできた。

どどめ色の肩に当たった。

「何奴！」

二月堂のお茶屋は、わらび餅がうまい。甘さを抑えた餡蜜と、透明のわらび餅とが絶妙である。そこにしかない行商味噌も、絶妙だし、釜に入ったお茶も旨い。

二月堂に行ったら、是非食べてほしい。

「まじうまー！」

わらび餅を頬張りながら、暖簾を潜って、姿を見せたのは…。

「蒔絵！」

予想外の蒔絵の登場に、驚くどどめ色。

「ひ、ひしゃしぶうりだあなあ〜」

まだわらび餅を喉に流していない蒔絵は、どどめ色に話しかけた。

「フッ」

どどめ色は鼻で笑うと、蒔絵を見つめ、

「何か用かしら？いつも、やる気のないあなたが、あたしに」

「うつつ…そうぐだあ……用がある！」

途中、わらび餅を飲み込んだ蒔絵は、どどめ色を睨んだ。

「何かしら？」

どどめ色は、腕を組み、

「いつも戦いに参加しないあなたに、あたしはシンパシーを感じていたわ。真面目に、何の報酬もない戦いに、いつも一生懸命な九鬼や、結城と違い…あなたは至って、マイペース」

どどめ色の眼鏡が、真上に来だした太陽の光に反射した。

「月影の中では、あんたが一番…あたしに近いと感じていたわ」

そのどどめ色の言葉に、蒔絵は顔をしかめ、頭をかいた。

「お前…まじ、だるいなあ！まじいゝだじるびっしゅだわ」

「何い！？」

蒔絵の予想外の反応に、どどめ色は眉を寄せた。

「確かにのを！戦いは、だりいよ！だ・け・ど・な！あたいはよお！尊敬してんだよ！リスペクト！」

蒔絵は、また頭をかいた。今度は少し恥ずかしそうに…。

「あいつらゝまじ！まじだろ！他人の為によおゝ！まじ！まじ！戦ってんだぜ。九鬼なんて、変身できなくてもよお！里奈も、ちよつと馬鹿だけど、あいつすげえよお！夏希も、まあそれなりになあ」

「何！」

予想外の蒔絵の言葉に、どどめ色は絶句した。

「てめえといっしょにすんなってことよ！あいつらを裏切ったてめえとな！」

蒔絵は、どどめ色を睨みつけ、

「普段はよお！あたいがいなくても、やつらが倒してくれるからさあ…まつ、いいかって思ってたけどさあゝ。てめえだけは、無理なんだよ！多分な！」

蒔絵は、乙女ケースを突きだした。

「あいつらは、てめえと真剣に戦えない！優しいからよお！だからさ！てめえは、あたいが倒す！」

「くっ！」

「装着！」

緑の光が、蒔絵を包む。

「乙女ビーム！」

変身と同時に、眼鏡から発射された光線を、どどめ色はとっさに、乙女アイロンで防いだ。

アイロンは、爆発した。

「チッ」

その爆発に、一瞬目を瞑ってしまったどどめ色の耳元に、声がした。

「許さねえ」

乙女グリーンの蹴りが、どどめ色の下っ腹を蹴り上げると、

どどめ色は、石段の下までふっ飛んだ。

「てめえだけは、あたいが倒す」

乙女グリーンは、一気に階段を飛び降りると、立ち上がったばかりのどどめ色に、パンチを叩き込んだ。

二月堂の下で、地面を転がるとどどめ色は、グリーンから距離を取ると、

「どどめ包丁！」

無数の包丁を召喚した。

そして、

「くらえ！乱れ桜！」

包丁達が一斉に、グリーンに飛びかかるようにするより速く、グリーンは右手を振るった。

グリーンの手に、のこぎり状の光の輪ができると、それを投げつけた。

光の速さで、その輪は包丁達を切り裂いた。

「え！」

光の輪は、消えると同時に、どどめ色の戦隊服に亀裂が入り、血が噴き出すと、どどめ色は倒れた。

「つ、強い……」

変身が解け、どどめ色は加奈子に戻った。

「伊達に、てめえらの戦いを端で見てた訳じゃねえよ。てめえの攻撃パターンくらいよめるぜ」

蒔絵の余裕の態度に、どどめ色は納得した。

「なるほどね……。逆に、こっちは……あんたの戦い方を知らない……クク……」

加奈子は、楽しそうに笑った。

そんな加奈子を訝しげに見つめるグリーンに、

加奈子はあるものを手に取り、示した。

それは、黒いサングラスだった。

「そ、それは？」

蒔絵は異様な妖気を、サングラスから感じていた。

「仕方がないわ…。こちら奥の手を使うしかないわね」

加奈子は、サングラスをかけた。

「いけない！」

反対側の屋根のある階段を降りながら、下っぱを背負い投げにした九鬼は、舞台下の芝生を挟んで、対峙している2人に気づいた。

「あの力は、危険だ」

九鬼は、階段を飛び降りる如く、走り出した。

「闇の力…思い知るがよいわ」

サングラスをかけた瞬間、色が濃いために見えないはずの眼球が、赤く輝いたのが、わかった。

「闇の女神…災禍<sup>サイカ</sup>の力を知れ！」

鱗のような鎧が、全身を包むと、巨大な蝙蝠の羽を広げて、災禍は空中に飛び上がると、グリーンに向けて、両手を突きだした。

その手のひらで、空間が圧縮されていく。

圧縮された空間は、球体のようにになると、周りの光を取り込み始めた。

「ブラックホール…アタック！」

「ブラックホール！」

グリーンは絶句した。

その技は、光線技主体のグリーンには天敵だった。

「チッ！」

グリーンは舌打ちした。

「永遠の闇をさ迷え！」

災禍の手から、黒い光球が放たれる瞬間、

九鬼はジャンプした。

「お願い！装着して！」

黒い光が、九鬼を包み…乙女ブラックへと変身した。

「ルナテイクキック零式！」

飛びながら、空中で足を突きだすルナテイクキック零式が、災禍の脇腹を蹴った。

「な！」

発射する体勢を崩された災禍は、自分の作り出した黒い光球の吸い込む力の渦に、巻き込まれた。

乙女ブラックは、地上に着地すると同時に、九鬼に戻った。

災禍を吸い込んだ光球は、すぐに消えた。

「九鬼！」

グリーンから、蒔絵に戻ると、九鬼に駆け寄った。

「か、加奈子は死んだのか？」

九鬼は立ち上がりながら、首を横に振った。

「多分…生きてるわ。今の技は、ブラックホールっていつでも、疑似ブラックホール…。本当のブラックホールができれば、この星ごとなくなってしまう。多分…あの光球に、吸い込まれたものは、どこかに幽閉されるだけ」

九鬼は、災禍がいた空間を睨み、

「その場所を作ったのが、やつら…ならば、自分の技ではやられないわ」

九鬼は額に流れた汗を、手のひらで拭くと、

「でも…しばらくは、加奈子はここに現れないはず…」

少しほっとした九鬼。

しかし、息をつく暇もなかった。

突然、飛んできた鉄の鎖が、蒔絵に巻き付くと、二月堂の前から、飛ばされた。

「うわあ！」

「蒔絵！」

林の向こうに、飛んで消えていく蒔絵の方へ走ろうとした九鬼の足元に、鋭い鎌が突き刺さった。

「チッ」

九鬼は足を止め、鎌が飛んできた方を見た。

法華堂：別名三月堂の方から、鎖鎌を持った魔神が姿を現した。

「和が名は、魔神かまいたちごっこ！」

巨大なたちごっこは、高笑いをし、

「ははは！変身できるグリーンより先に、貴様を切り刻んでやるわ！」

鎖を振り回して、九鬼に向かってくる。

九鬼はその間に、アスファルトに突き刺さっている鎌を思い切り、足で踏みつけた。

「貴様！足をどける！」

九鬼が思い切り踏みつけている為、たちごっこは、鎌を抜けない。

「お、おのれえ！」

引つ張つてもびくともしない為に、たちごっこは鎖の方を投げつけ、九鬼の右腕に巻き付けた。

「こうなったら、いたちナックルパンチを、お見舞いしてやるぞ」

前足を握り締めたいたちごっこのは、巻き付けた鎖を引っ張った。

九鬼は、もう一度鎌を踏みつけた後、引っ張られる力に逆らうことなく、いたちごっこ向かってジャンプした。

そして、いたちごっこの頭上を飛び越える瞬間、鎖を操り、いたちごっこの首に巻き付けた。

そして、いたちごっこの後ろに着地すると、鎖を引っ張った。

「うぐう！」

いたちごっこの首が絞まる。

九鬼はさらに、思い切り引っ張った。すると、刺さっていた鎌が取れ、そのまま勢い余って、飛んできた。

「え！」

驚くいたちごっこの額に、突き刺さる鎌。

九鬼は、腕に絡み付いた鎖を外すと、

いたちごっこの方に振り返ることなく、大仏殿の方へ坂をかけ降りて行った。

「早奈英さん！」

九鬼は、早奈英の身を案じていた。

恋しくて

「中島さん！」

中島に腕を引かれ、逃げる夏希の後ろを下っぱ達が、追いかけてくる。

その下っぱ達は、乙女ピンクに追いかけているのだが…それに、夏希は気付いていない。

そばに、中島がいる為、夏希は乙女ブルーに変身できなかった。

大仏殿の右手から、坂を登っていく夏希達の前から、別の下っぱ達がかかけ降りていく。

「こつちだ！」

中島に手を引かれ、入ったところは、巨大な鐘がある場所だった。

鐘は大きく、中に3人は余裕で入る。もし落ちて、閉じ込められたら、脱出はできないだろう。

鐘の前で、夏希を庇うように立つ中島。

「心配しないで、僕が守るから」

中島は安心させようと、優しく話しかけた。

「中島さん！あたし！」

夏希は悩んでいた。ここで、変身していいのか。

「きい！」

下っぱの1人が、黒タイツに石を入れた武器を振るい、襲いかかってきた。

「危ない！」

中島は、夏希を抱きしめ、背中を向けた。

石は、中島の肩を強打した。

「くー！」

顔を歪め、痛がる中島を見た時、夏希は決意を決めた。

「よくも！中島さんを！」

夏希は中島から離れると、前に出た。

乙女ケースを突きだし、

「そうちゃ……」

変身しようとした時、後ろから乙女ケースをひったくられた。

「え!？」

戸惑う夏希の前に、乙女ケースを持った中島がいた。

「中島さん？」

夏希はまだ…状況が理解できなかった。

「よくやった!中島よ」

上から、出現した下っぱの群れから、半田が現れた。

「半田先生!」

夏希は、半田の姿を見て、理解した。

「も、もしかして…中島さん…?」

「…」

中島は答えない。突然、目が虚ろになり…無表情になる。

「こいつは、我々の僕だ!」

半田の言葉を、

「うそ…」

夏希は信用できない。

「中島さん！」

「馬鹿か！あんなのような貧乳が、モテると思ったのか！」

半田は笑った。

「うそよ！」

夏希の叫びにも、中島は答えない。

「中島さん…騙したの？」

夏希の瞳から、涙が流れた。

「オホホホ！騙される方が悪いんだよ！」

半田の言葉に、夏希は鐘の前で崩れ落ちた。

「ひ、ひどい…」

そんな夏希の姿を、楽しそうに見ていた半田は、中島に近づき、

「さあ！乙女ケースを、こちらに」

しかし、中島は乙女ケースを離さなかった。

「どうした？中島！こちらに…」

半田が力づくで、乙女ケースを奪おうとした時、

凄まじい銃声が辺りを切り裂いた。

「うりゃあ！」

興奮状態となっている乙女ピンクが、マシンガンを乱射して、広場に現れた。

「チッ！」

銃弾の一発が、肩をかすった為、半田は中島から離れた。

「あたしと、姫の時間を邪魔するなあ！」

乱射しながら、走ってくる乙女ピンクから、半田と下っぱは逃げるように、周りに散らばった。

「待ちやがれ！」

ピンクは、逃げる下っぱ達を追いかけていく。

鐘の前には、崩れ落ちた夏希と、中島しかない。

まだ中島の手には、乙女ケースがあった。

そこだけ静かになった空間に、

ピンクの後ろを追いかけて来た理香子と、楓が姿を見せた。

「中島？」

理香子は、中島と…そのそばで泣き崩れる夏希を見て、息が止まった。

「あたしの…乙女ケースだけが、目当てだったんですか？」

夏希の言葉に、こたえない。

夏希は立ち上がると、中島の手にある乙女ケースを、取り返そうとする。

「返して！あたしの乙女ケースを返して！」

しかし、中島は強く握り締め、離すことはない。

「返して！返してよ！」

無表情の中島は、まるで手だけが別の人格があるかのように、離すことはない。

その時、パチンと激しい音が、鐘を鳴らしたかの如く、広場に響き

渡った。

「女の子に、涙を流させるなんて…最低だよ」

2人の間に入った理香子は、平手打ちを中島にした。

「理香子…」

楓は少し離れた場所から、理香子達を見ていた。

「最低だよ」

理香子は中島の手から、乙女ケースを奪い取ると、夏希に返した。

夏希は、中島と理香子を交互に見ると、

理香子に頭を下げ、走り出した。

涙を拭うことなく、夏希は乙女ケースを突きだした。

飛び出した眼鏡が、涙を隠し…乙女ブルーに変身した夏希は、観光客を襲う下っぱ達に向かって走り出した。

「乙女スタンガン！」

「中島…何やってるの？こんなところで」

冷静な口調できく理香子に、中島は無言でこたえた。

「あたし…こんな中島見たくなかった…」

その言葉に、中島は理香子の顔を見た。

そして、信じられない言葉を口にした。

「お前なんか…知らない」

その他愛ない言葉は、理香子の心を簡単に破壊した。

「な…」

言い返す言葉が出ない理香子を残して、中島は歩き出した。

楓の横を通り過ぎる中島の顔を、

楓は見つめた。

声をかけようとしたが、その光なき瞳に、楓は絶句した。

理香子はその場で、動けなくなった。

涙も出なかった。

女の子を泣かす中島。

自分を知らないという中島。

それは、自分の知ってる中島とは思えなかった。

だから、涙が流れないんじゃない。

涙が流れない程…傷は深いのだ。

涙が流れる方が…外に出る方が楽なんだ。

流れない悲しみは、心の底に残り続けるから。

## 絶対絶命

「早奈英さん！」

シルバーの気を感じない。

しかし、九鬼は南大門をこえたところで、魔神鹿女の死体を発見していた。

東大寺から離れ、国道に向かって走る九鬼の横合いから、黒い物体が飛び出し、道を塞いだ。

「我が名は、魔神鹿のフン！1号！」

さらに後ろにも、同じ魔神が現れた。

「我が名は、魔神鹿のフン千二十号！」

その番号が表すように、魔神鹿のフンの数は、信じられない程いた。

まるで奈良公園には、魔神鹿のフンしかないように思えた。

「どけ！」

九鬼は、回し蹴りを魔神鹿のフン1号に食らわした。

「何なの！これ！」

下っぱ達を追いかけて回し、南大門まで戻ってきた乙女ピンクは、絶句した。

巨大な鹿のフンが、辺りを埋め尽くしているのだ。

「しゃらくさいわ！」

ピンクは乙女ケースを突きだし、

「兵装！」

武器に変えた。

「乙女ミサイル！」

それは、ミサイルランチャーだった。

「くらえ！」

ミサイルが発射され、爆発した。

お土産屋やうどん屋に、飛び散った大量の鹿のフンが、降り注いだ。

「死ねえ！」

ピンクは、ミサイルをまた発射した。

その攻撃はのちに、嵐山乱射事件に続く…鹿のフィンミサイル事件と呼ばれた。

「きりがない！」

一体一体は、弱いが…数が半端ではなかった。

それに、倒しても増えているように感じた。

鹿のフィン包囲網の外にいる鹿達が、糞をすると…出来たてほやほやの鹿のフィンが誕生していた。

その生まれる早さは、半端ではない。

戦いは、数時間にも渡り…もう夕方に近づいていた。

「どこかに…親玉がいるはずだ！」

途中、自動販売機で、カロリーメイトを買い、水分を補助しながら、九鬼は親玉を探していた。

「ククク…」

鹿のフィン達が、暴れ回る中…鹿せんべいを売る売店のおばあちゃん

は、含み笑いを漏らしていた。

「わかるまいて…あたしが、鹿のフンを操っているとはな」

鹿せんべいを売るだけでなく、鹿せんべいとはし大会にも出場経験のある富子65才は、

ベテランの俳優だった。

しかし、主役をはったことはない。

今回は、孫の智也君七才の希望をきき、彼が好きな乙女戦隊月影のオーディションを受けていたのだ。

月影側ではなく、敵方になってしまったが、スクリーンには映ることが出来る。

これで、孫も喜ぶだろう。

「じゃあ、行ってくるよ。智也」

奈良の地へ向かう祖母に、智也は言った。

「おばあちゃん…。ぼく、グリーンが好きだから、蒔絵ちゃんだけは、傷つけないでね」

孫の言葉に、富子は頷きながら、頭を撫で、

「大丈夫じゃよ！蒔絵ちゃんには、手をださんからのう」

そう誓った富子の前に、

「鹿せんべいをくれ」

小銭に差し出す蒔絵がいた。

「な！」

富子が絶句した。毎週、孫と見ているから、蒔絵の顔を見間違っは  
ずがない。

それに、周りを魔神鹿のフンに囲まれて、近くに鹿などいないのに、  
鹿せんべいを買いに来るなんて、常識ではあり得なかった。

（ま、まさか…正体がばれた）

しかし、まだわからない。

「はい…ありがとうね」

富子は、小銭を受けとると、鹿せんべいを渡した。

緊張が走る。

富子は、蒔絵の顔を見れない。

「こ、これはまじおかしいぜえ！」

不満気な蒔絵の口調に、富子是我慢できなくなり、正体を晒した。

「よくわかった！わたしが、鹿せんべい売りではなく、鹿フンの親玉だと！」

椅子から立ち上がり、赤いタイツを被った富子の耳に、信じられない言葉が聞こえてきた。

「これよ！草はいつてんじゃん！食べねえよ！交換しろ！」

「え」

赤タイツの富子と、蒔絵は目が合う。

「てめえ！怪人だな！人に、変なもん売りやがって！」

「ち、違う！」

弁明しようとする富子の前で、怒りの蒔絵がグリーンに変身した。

と同時に、発射された乙女ビームが、富子を直撃した。

（智也…おばあちゃん…グリーンと絡めたよ）

富子がやられたと同時に、鹿せんべいの箱に偽装されていた魔神鹿のフン製造装置は、破壊された。

奈良公園を埋め尽くしていた鹿のフンは、もとの大きさに戻った。

「まったく！こんなもの食えるかよ！」

蒔絵は、遠くにいた鹿に、せんべいを投げた。

ちなみに、鹿せんべいは食べられません。

「消えた……」

魔神鹿のフンが消えたことに、ほっとするのも束の間……。

体力を使い果たした九鬼の前に、光輝く戦士が姿を見せた。

「九鬼真弓！今日は、お前の最後の日だ！」

沈みゆく太陽が、若草山が左に見える広大な公園の彼方に沈んでいく。

もうすぐ、月が昇る。

しかし、その前にいる敵は、今までの魔神と比べ物にならない。

乙女ガーディアン…

乙女プラチナ。

変身できない九鬼の運命は！？

## 繋がる手

「理香子…」

茫然自失状態になっている理香子のそばに来た楓は、ゆっくりと話し出した。

「あの目は…おかしいよ。多分、中島はさっき見た怪人達に、操られているんだよ。絶対」

楓の言葉にも、しばらく反応しなかった理香子はやがて、静かに微笑んだ。

「ありがとう…楓」

「理香子…」

その微笑みが、楓には悲しかった。

「あたし…」

理香子は体を、楓に向け、

「あんな言葉じゃ…納得しないから！」

そして、両拳を握り締めると、

「あたし！もう一度…中島と話してみる！いえ、話したい」

「うん！」

理香子の決意に、楓は頷いた。

「探そう！中島を！」

「うん！」

2人は頷き合い、走り出した。

中島が消えた方へ。

「月よ…あたしに、力を！」

九鬼は、乙女ケースを握り締めた。

「これが、最後でも構わないから！」

姿を見せたばかりの月の光に照らされて、九鬼の願いが叶ったのか…乙女ブラックへと変身した。

「来い！その中途半端な力でな！」

乙女プラチナは悠然と、両手を広げた。

（いつまで、変身できるか…わからない！）

九鬼は走りながら、短期戦を挑むことに決めた。

「ルナティックキック零式！」

ジャンプしたブラックの蹴りを、プラチナは胸板で受け止めた。

ブラックはキックが決まると同時に、回転し、地面に両手をつけると、逆立ちの格好で足を曲げ、

そして、プラチナの顎目掛けて、足を突き上げた。

「ルナティックキック二式！」

しかし、プラチナの顎が少し上に上がったただけだ。

ブラックは、バク転をすると、今度は飛び上がり、

「ルナティックキック三式！」

爪先を軸にして、駒の如く回転した。

「舐めるな！」

二の腕で、三式を受け止めたプラチナは、片手だけでブラックをはね飛ばした。

ブラックの体が、中に舞う。

まだ真上に来ていない月を背に受けて、ブラックはプラチナの頭上に飛翔する。

「ルナティックキック四式！」

右足を月に向け、ムーンエナジーを補給する。

「別名！月影キック！」

重力を利用した直下型の蹴り！

月影キックが、プラチナの頭の上に突き刺さる。

「な、何！？」

ブラックは絶句した。

「舐めるなど言っている」

顔を上げたプラチナは額で、月影キックを受け止めていた。

プラチナのムーンエナジーが、ブラックの足に絡みつく。

「フン！」

気合いだけで、吹き飛ばされたブラックの体が、中に舞う。

「プラチナボンバー！」

「乙女バリア！」

とつさに、ムーンエナジーで盾を作るが、プラチナから放たれ衝撃波は、バリアを突き破り、ブラックの体を直撃した。

受け身すら取れない形で、ブラックは奈良公園の芝生に激突した。

地面が吹き飛び…クレーターのような穴ができ、

その中で、ブラックは九鬼に戻っていた。

「呆気ない…」

プラチナは首を回すと、ゆっくりと九鬼のもとへと歩いていく。

「貴様に、月影を名乗る資格はない。この地で、死ぬがよいわ」

厚化粧のおかまのような顔を歪めて、プラチナが含み笑いを浮かべた。

「九鬼！」

先程の九鬼の落下の衝撃音を聞いて、夏希と蒔絵…そして、蘭花が走ってきた。

「フン！中途半端の次は、出来損ないか！」

プラチナは、九鬼の前に立つ3人を見つめ、

「折角の獲物だ。乙女ケース！頂くぞ！」

「あたし達を舐めるな！」

夏希はプラチナにすごんだ後、後ろにいる蘭花に顔を向け、

「黒谷さん！危ないから、下がって！」

「フッ」

その言葉に、蘭花は笑った。

夏希はまだ…蘭花の正体を知らない。

蘭花は大人しく下がると、衝撃で出来た穴の中にいる九鬼の方に体を向けた。

「装着！」

珍しくやる気のある時絵も、夏希とともに変身する。

そして、

「乙女ビーム！」

「乙女スタンガンマックス！」

至近距離からのビームの直撃と、スタンガンの電撃を受けるプラチナ。

しかし！

「クズどもが！」

プラチナは、気合いで跳ね返した。

「きゃあ！」

ふっ 飛ぶ2人。

その時、プラチナのこめかみに、何かが当たった。

「うん？」

プラチナの眼鏡がスコープになり、遠くの方でこちらに、銃口を向けている乙女ピンクをとらえた。

また銃弾が、プラチナの眼鏡に当たった。しかし、プラチナは微動だにしない。

「蠅が五月蠅いわ！」

プラチナの手から、光の糸が飛び出すと、数十メートル離れた岩陰

から、乙女ライフルで狙撃していたピンクが、いぶりだされた。

「乙女念動力！」

ピンクの体の中に舞うと、まるで釣竿で釣られた魚のように、倒れているブルー達のそばに引き寄せられた。

「ハハハ！これで、三匹！今日は、大漁だ！」

高笑いをするプラチナの前で、立ち上がった三人は、各々の乙女ケースを突きだした。

「兵装！」

乙女ケースが武器に変わる。

「乙女青竜刀！」

「乙女ミサイル！」

「乙女キャノン！」

三人は武装した。

「くらえ！」

グリーンの中身にショルダーバッグのように装着されたキャノン砲が、照準をプラチナに向けた。両肩に乗るような姿になった…二本の砲台から、強力なビームが発射された。

「ファイヤ！」

ピンクは、ミサイルランチャーを発射した。

すべての攻撃が、プラチナに直撃した。

「よくも乙女の恋心を利用したな」

ミサイルによる爆風が治まる前に、ブルーの青竜刀が月の光を受けて輝く。

「乙女ダイナミック！」

上段に振り上げた青竜刀を、一気に振り下ろした。

衝撃波が、プラチナを切り裂いた。

「なるほど…」

プラチナの体は、乙女ソルジャー達の攻撃で、1メートル程後ろに下がっていた。

爆風が消えると、右肩から腹にかけて傷が走っていた。

「戦士としての…第一段階は、超えているのか」

不敵に笑いながら、プラチナが手を傷口にかざすと、

戦闘服はもとに戻った。

「しかし…これくらいの攻撃では、乙女ガーディアンに傷一つつけ  
れんわ！」

プラチナは気合いを入れると、戦闘服が盛り上がった。

「見せてやろう！乙女ガーディアンの力をな！」

「え…」

一瞬にして、目の前から消えたプラチナは、一番後方にいたピンク  
の鳩尾に、拳を叩き込んだ。

「フン！」

拳が光り、ピンクの体が月の下に舞った。

「戦闘服の丈夫さに、感謝するんだな」

そして、地面に落下したピンクは、動けなくなった。

落下の衝撃より、拳の痕が残る鳩尾からの痛みが、全身を痺れさせていた。

「乙女ビーム！」

グリーンは咄嗟に、背中を向けているプラチナに、ビームを発射した。

「フン！」

プラチナは振り向くと、左手を突きだし、手のひらでビームを跳ね返した。

「だったら！」

グリーンの手にノコギリ状のリングが出来ると、プラチナに向かって、投げつけた。

「乙女スフラッシュ！」

光のリングが、無軌道で中に舞うと、プラチナに斬りかかる。

「いい技だが！」

プラチナの拳が輝くと、

「どりゃあ！どりゃあ！」

無数の拳がオーラのように現れ、軌道を読めないリングを破壊した。

「プラチナボンバー！烈風！」

「な」

風が頬を当たったと、脳に情報がいく前に、無数の拳がグリーンを連打した。

「馬鹿な…」

ふっ飛ぶながら、グリーンは今の攻撃が信じられなかった。

芝生を削りながら、地面を転がるグリーン。

「よくも！グリーンとピンクを！」

ブルーは、青竜刀の切っ先を前に向けると、プラチナに突進した。

「甘い」

プラチナは指先で、青竜刀を掴むと、片手でブルーごと持ち上げると、

後方に投げ捨てた。

「きゃあ！」

背中から、地面に激突するブルー。

プラチナは倒れている乙女ソルジャー達を見回し、両手を広げた。

「素晴らしい！乙女ガーディアンのか！」

そして、月を見上げ、

「月よ！口惜しかろうて！本来ならば、月を守る力が！月を破壊する為に、利用されているのだからな！」

大笑いをした。

「恨むならば！無力な貴様の戦士達を恨むがよいわ！」

月の力を得て、さらに輝く乙女プラチナが、夜になり静まりかえった…奈良公園の広大な春日野園地内に、妖しい姿を晒していた。

圧倒的な力で、乙女ソルジャー達を駆逐する乙女プラチナの姿を尻目に、

蘭花はクレーターののような穴の中にいる九鬼を見下ろしていた。

「どうするの？生徒会長。あなたの大切な学園の生徒であり…仲間である乙女ブルー達が、殺されるわよ」

他人事のように言う蘭花の口調に、変身が解けた九鬼は何とか首を動かし、穴の縁に立つ蘭花を見上げた。

「あ、あなたこそ…いいのか…。乙女ソルジャーは…5人いなければ…真価を発揮しないはずだ…」

「そうね」

蘭花は軽く肩をすくめ、

「だからこそ…今までの月影は、真の力を発揮できずに、個人技だけが特化した。まあ…ブラックが偽者だったし…」

その言葉に、九鬼は蘭花を軽く睨んだ。

「だったら、どうして！出てこなかった！」

九鬼の怒気を含んだ言葉に、蘭花は少し九鬼の顔を見つめた後、ブルー達の方へ顔を向けた。

何度倒されてても、ブルー達はプラチナに向かっていく。

「あたしは理事長の孫…。学園の先生に、やつらの幹部がいる為、なかなか動けなかったのよ。それに…アイドルでもあるしね」

「…」

九鬼は、蘭花の横顔を見つめた。

「やつらから、乙女ケースを奪い…学園に逃げ込んだ半月ソルジャーの行動は、偶然ではなく…必然」

蘭花は、黒い乙女ケースを取りだし、

「つまり…学園にある乙女ケースは、五つ！あなたの持つケースは、何？どこから得たの？あたしは、それがわからなかった」

逆に、蘭花が九鬼を睨み、

「そして、乙女シルバーの登場！ガーディアンシリーズで確認されていたのは、2つだけ！大月学園に保管されていたダイヤモンドと、広陵学園にあったプチチナ！」

蘭花の手にある乙女ケースが、月の光を得て輝いた。

「いずれ目覚める月の女神を護る為、戦士の為に残された力！しかし、その2つは…やつらに奪われた」

「だから…」

九鬼はふらつきながらも、立ち上がった。

「月は、シルバーの力を復活させた。やつらに対抗する為に…目覚めかけている女神を護る為に…」

「女神…それだけが、わからない…。あなたは、知っているのか？」

九鬼の問いに、蘭花は首を横に振った。

「さあ…」

そして、真上の月を見上げ、

「でも…近くにいるはず…。目覚めはじめた女神が…」

「あたしは…」

九鬼は、穴から出ようとする。

「今は…女神よりは…あの子達を守りたい」

だけど、九鬼の体のダメージは回復しておらず、足にきていた。

また倒れそうになる九鬼の腕を、屈んだ蘭花の手が掴んだ。

「黒谷さん？」

「生徒会長…。あなたの力が必要よ」

九鬼は蘭花の言葉に、目を見開いた。

「い、いいのか？あたしは…あなたの…」

「フッ」

蘭花は一度目を瞑った。そして、ゆっくりと開けると、口調を変え、笑顔で答えた。

「何言ってるのよ！今日は、あなたとあたしで、乙女ブラックよ」  
明るく言う蘭花に、九鬼は苦笑すると、倒れそうだった体を起こし

た。

そして、真っ直ぐに穴の中で立つと、微笑みながら、改めて手を差し出した。

蘭花も無言で、その手を握り締めた。

「行きましょう」

穴から出た九鬼と蘭花は、ゆっくりと歩き出した。

「勝てるの？」

蘭花の質問に、九鬼は頷いた。

「あたしのすべてをかけたら……」

九鬼は、何度も立ち上がるグリーンとブルーを軽くあしらっているプラチナを睨んだ。

「いくわよ！」

九鬼の号令に、蘭花は頷くと……2人は走り出した。

「九鬼…」

グリーンは片膝をつきながら、走ってくる九鬼を見つめた。

「く、黒谷さん…？」

ブルーは腫れた目で、黒谷を見た。

「装着！」

突きだした2つの乙女ケースが輝き、

2人の乙女ブラックが出現した。

「お、乙女ブラックが2人！？」

動けないピンクが、驚いた。

「ブラック！いくぞ！」

九鬼ブラックの言葉に、

「おお！」

蘭花ブラックが頷いた。

まったく同じ姿をした2人が、プラチナに向けてジャンプした。

「ほお」

感心したように頷くと、プラチナは2人の乙女ブラックに、体を向けた。そして、にやりと笑うと、

「たかが、クズが2人になっただけで！何ができるか！」

また両手を広げた。

「とお！」

2人のブラックが、ジャンプした。

「ダブルブラック！キック！」

「また！アホの一つ覚えの蹴りか！」

胸板をさらけ出し、蹴りを受け止めようとする。

「効くかあ！」

笑うプラチナに蹴りが決まる瞬間、ブラックは九鬼に戻った。

「九鬼！」

ブルーが叫んだ。

誰もが、九鬼の変身が解けたと思った。

九鬼は叫んだ。

「乙女ブラック！ファイナルキック！」

九鬼の右足が、太陽のように輝いた。

よく見ると、九鬼の右足の先だけが、ブラックのままだった。

乙女ブラックの力そのものを、敵に喰らわす。

乙女ソルジャー最後の技。

生身をさらす為、技を放つことさえ危険な技。

「馬鹿な……」

2つの蹴りを喰らった瞬間、プラチナはふっ飛んだ。

中に舞う…2つの影。

一つは虚空に消え、

もう一つは芝生に転がると、

初老の男に変わった。

「そ、そんな…あり得ない！乙女ガーディアンの方が！」

狼狽える男の顔を見たとき、ブルーは絶句した。

「き、教頭！？」

苦労してきたか…鮮やかな白髪に、鯉のように目が離れた顔をした教頭は、あるものがないことに、気づいた。

「眼鏡がない！乙女ガーディアンの眼鏡が！力が！」

芝生に膝をつけ、眼鏡を探す教頭の後ろに、誰かが立った。

「探しても…無理ですよ」

その声に、はっとした教頭が振り返り、顔を見上げた。

「結城先生！一緒に探してくれたまえ！私の眼鏡が…ない…」

立ち上がり、哲也にすがりつこうとした教頭の背中から、血が噴き出した。

「え？」

教頭は、自分に起こったことがわからなかった。

哲也は、教頭に笑いかけ、

「あなたは…乙女ガーディアンの資格を失った…」

「そ、そんな馬鹿な…」

教頭の胸から背中まで、哲也の右腕が貫いていた。

「あなたはもともと…プラチナとのシンクロ率が低かった。それでも、無理矢理…変身していた」

冷たい哲也の言葉に、教頭は最後の力を振り絞って、哲也の首に手をかけた。

「私は…魔將軍だぞ！それに、小娘どもに負けてもいない…」

「フツ…」

哲也は首を絞められながら、笑った。

「あなたは、乙女ガーディアンの資格を失った…。それだけで、敗北を意味する」

「わたしは…幹部ぞ！それに、今まで…組織の為にいいい！」

教頭が、思い切り指に力を入れた瞬間、

哲也の体が輝き出した。

「敗北者には、死を！それが、ダークメイトの掟だ！」

乙女ダイヤモンドに変身した哲也が、拳を握り締めると、

教頭の体は爆発した。

「酷い」

ブルーは顔を伏せた。

「チッ！」

グリーンは舌打ちをし、

「乙女ダイヤモンド…」

蘭花ブラックは、絶望した。

「諸君！」

ダイヤモンドが腕を払うと、まとわりついた血は綺麗に取れた。

そして、一步前に出ると、乙女ソルジャー達を見回し、

「先程の不完全な乙女ガーディアンを、お見せしたことを詫びよう」

頭を下げ、

「ここからが…本当の地獄を…」

顔を上げると、ダイヤモンドは女になり、

「味合わせてあげる」

妖しく微笑んだ。

「お、終わったわ…」

蘭花ブラックは膝から、崩れ落ちた。

「ウフフ…」

ダイヤモンドは、楽しそうに笑うと、

蹴りを放った後…倒れ、動けない九鬼を見つめ、

「最後まで…何をするかわからない…九鬼は、奥の手を使い、燃え尽きた！そして！」

ダイヤモンドが、後ろを振り返ると、さっきまでなかった巨大な十字架が地面に突き刺さっていた。

そこに磔にされている者は…。

ブルーは一瞬、息が止まった。

「そ、そんな…」

ダイヤモンドは口元を緩め、笑った。

「最後の希望も潰えたでしょ？」

十字架にかかっていたのは、結城里奈だった。



他が為に

「さよなら…乙女戦隊月影」

乙女ダイヤモンドは、乙女ソルジャー達に向かって、突進した。

「うざいんだよ！」

グリーンの乙女スフラッシュが束になって、ダイヤモンドに襲いかかる。

「フッ」

ダイヤモンドは笑った。

ノコギリ状の光のリングは、ダイヤモンドの体に当たると、砕け散った。

「ダイヤモンドは砕けない」

「乙女マシンガン！」

片足をつき、ピンクはマシンガンを乱射したが、ダイヤモンドの体はすべてを跳ね返す。

「あたしは、月の女神の最後の防波堤！あらゆる攻撃を防ぎ！あらゆる敵を駆逐する！」

「きゃあ！」

ピンクに近づくダイヤモンドは、至近距離でマシンガンの弾丸を受けても、びくともしない。

「4人のガーディアンの中で、先頭を走り！女神の為の道を開く！それが、乙女ダイヤモンドよ！」

ダイヤモンドの拳が、マシンガンを破壊し、ピンクの横腹を突き上げた。

再び中に舞うピンク。

「乙女ビーム！」

グリーンのビームを、微動だにせず、ダイヤモンドは受け止めた。

「あたしに、防御はない！ただ……」

ビームを受けながら、ダイヤモンドは悠然を歩いて来る。

「この拳で、叩き壊すのみ！」

ダイヤモンドの右ストレートが、グリーンの顔面を狙う。

咄嗟に、両腕でガードしたが、

腕が吹き飛んだと思った程の衝撃を受け、グリーンは自分では気づかいうちに、数百メートル向こうの川に、落ちていた。

「乙女ダイヤモンド…」

蘭花ブラックは、一步も動けなくなっていた。

「月の最強の戦士…。他のガーディアンや乙女ソルジャーのように、武器も技もない…。なぜなら、そのすべてが最強だから…。ただ殴るだけで、すべてを破壊する。前世紀…彼だけで、闇の勢力の3分の1を破壊したといわれる勇者…」

蘭花ブラックの足が、震えていた。

「そ、そんな…勇者が！」

蘭花ブラックの目の前に、ダイヤモンドが移動した。

怯えるブラックを見て、

「もう戦士ではなくなった者には…最初の死を」

「いやああ！」

ブラックの絶叫が、夜の奈良公園にこだました。

「うん？」

ダイヤモンドの拳は、ブラックに決まっていなかった。

「ブルー！」

青竜刀を盾にして、ブラックとダイヤモンドの間に割って入ったブルーは、ダイヤモンドを睨み付けながら、

「黒谷さん…あなたはまだ…戦いに慣れていないわ。ここは…あたしに…」

青竜刀は折れたが、ブルーは別の武器を取り出した。

「乙女スプレー！」

催涙ガスを煙幕にすると、ブルーはブラックの手を引いて、駆け出した。

「おのれ！ちょいざいな！」

「ブルー！」

ブラックは、ブルーに声をかけた。

「わ、わかってる！逃げられないって！だからこそ！」

ブルーが、ブラックとともに走りながら、来たところは…。

「だからこそ！あんたが、必要なの！」

十字架の下。

「里奈！」

ブルーは、十字架に磔にされた里奈に向かって、叫んだ。

しかし、気を失っている里奈は答えることはなかった。

十字架の上で、輝く月もまた、

ただあるだけで、ただ…無言であつた。

（もう…戦えないわ）

すべての力を使い果たし…九鬼真弓は動けなくなっていた。

（もう…力も失った）

九鬼は心の中で、笑った。

（我ながら、よくやったわ。こんな…中途半端な力で…）

九鬼の脳裏に、今までの戦いが走馬灯のようによみがえる。

九鬼は微笑み、

（もう十分よ…九鬼真弓…あなたは、よくやったわ）

全身から力が抜けていく。

（もう…十分よ…）

自らを納得させ、眠りにつこうとした九鬼は、

突然目を開けると、齒をくいしばった。

（な、何を言ってるんだ！あたしは！）

九鬼のかすれた視界に、まだ戦っているブルーやブラックの姿と、十字架にかけられた里奈の姿が映る。

（戦え！戦わなくちゃ！みんなが、戦っている！あたしも…いかなくちゃ！）

しかし、九鬼の心も虚しく…もう、指先一本も動かない。

（お願い！）

九鬼の目から、悔し涙が流れた。

（くそ！）

涙が流れたことが、悔しかった。

（涙を流す力があるなら…腕の一本でも動け！）

九鬼は目だけを動かし、乙女ケースを探した。

（もう一度…あたしに、力を！）

動かない手に力を込めた時、

温かいぬくもりとともに、九鬼の全身に力が戻ってきた。

「こ、これは？」

九鬼の手に置かれたのは、黒の乙女ケースではなく、銀色の乙女ケース。  
「ス。」

「やっと…あなたにお返しできます」

九鬼の手に、銀色の乙女ケースを置いたのは、早奈英だった。

早奈英は涙を浮かべながら、

「半年ほど前…交通事故に遭い…あたしは、全身の自由を失いました。そんなあたしを…あの日、あなたは訪ねてきた。この乙女ケースを持つて！」

早奈英の瞳から、涙が溢れ、

「乙女ガーディアンは、女神を護る為に、装着者に強靱な肉体を与

えてくれます！変身しなくても、ケースを身につければ…車椅子に  
乗れるくらいに回復させてくれる」

早奈英は涙を拭うことなく、九鬼を見つめ、

「生きることに、絶望していたあたしは…乙女ガーディアンの中で  
…あなたのおかげで、生きる力を取り戻しました」

早奈英は、銀色の乙女ケースに手を添えながら、

「この力で…あたしは…病室のベッドの上から…学園に帰ることが  
できた…」

早奈英は乙女ケースを撫で…すぐにその手を止めた。

「だけど！その為に…あなたは！あたしに、この乙女ケースを渡し  
た為に！大した力も出ない…訓練用の乙女ケースで、戦わなければ  
ならなくなつた！」

「早奈英さん…」

早奈英は絶叫した。

「あたしが、学園の生徒で…あなたが、生徒会長というだけで！あ  
なたは！あなたは……。だけど、あたしは！」

「…」

九鬼は、何も言えなくなつた。

「うっっっ…」

早奈英は口を、乙女ケースに触れてない手で押さえると、嗚咽した。  
涙は止めどなく…流れた。

「あたしだけ…守られていいわけがないわ。あたしだけが…」

早奈英は涙を拭った。表情を引き締め、

「今日、初めて…あたしは、戦いました。だけど…あなたのように戦えなかった」

早奈英は、九鬼に微笑みかけ、

「あたしは、戦士じゃない」

ぎゅっと乙女ケースを握り締めると、手を離し、

「この力を、お返しします」

ゆっくりと立ち上がった。

「その力を…みんなの為に…。あなたが、守れる…多くの人の為に…使ってください…」

そう言うと、早奈英は崩れ落ち…気を失った。

今まで、ガーディアン力で抑えていた痛みが、戻ってきたのだ。

「早奈英さん！」

九鬼は立ち上がり、地面に激突する前に、早奈英の体を受け止めた。

そして、その動けなくなった体を抱き締め、

「ごめんなさい…。あたしに、もっと…力があれば」

九鬼は早奈英を抱き締めながら、遠くにいるダイヤモンドを睨んだ。

「早奈英さん…。あなたから、受け取った力で…みんなを守る！」

九鬼はゆっくりと、早奈英を芝生の上に寝かすと、近くに落ちていたブラックの乙女ケースを拾い上げた。

そして、早奈英の鳩尾辺りに、乙女ケースを置いた。

「変身はできないけど…ムーンエネルギーは補充できる。少しは、痛みを和らげてくれるはず」

九鬼は早奈英を見つめながら、立ち上がった。

「行ってくるわ」

早奈英に背を向けると、全身の調子を確認するに、一步一步踏み締めて、ダイヤモンドに向け、歩いていく。

「待ちな！」

九鬼の後ろから、声がした。

振り返ると、魔神軍団がこちらに道路の向こうから、走ってくるのが見えた。

「九鬼真弓！」

先頭にいるのは、鎌が突き刺さったままのかまいたちごっこだった。

「我ら！魔神軍団が、貴様の命を貰う！」

かまいたちごっここの後ろには、湯豆腐三兄弟改め…木綿三兄弟がいる。

他にも、台車に乗った魔神自動販売機！代替えポケハウダイン！

鹿おっさんなど…魔神軍団は総勢30体！

九鬼は、芝生の上で眠る早奈英を見ると、引き返そうとした。

「待て…」

九鬼の前に、十夜が現れた。

「一度、前を向いた足を止めるな」

十夜は、九鬼と早奈英の真ん中に立つと、

「やつらは、俺に任せろ」

「十夜さん…」

「勘違いするな！」

十夜は九鬼を睨むと、

「貴様を倒すのは、俺だ」

その手にある銀色の乙女ケースに、目をやり、

「新しい力を手に入れたか…面白い！」

十夜は嬉しそうに笑いながら、日本刀を召喚した。

「やつを倒し、最強の戦士になれ！そして、最強となったお前を、最強の俺が倒す！」

十夜は、魔神軍団に向かって歩き出した。

「その予定…裏切るなよ」

「十夜さん…」

「フン！」

十夜は鼻をならすと、早奈英を守るように、彼女を背にして立ち塞

いだ。

「ここからは、行かす訳にはいかぬわ」

十夜は日本刀を、魔神軍団に向けた。

「お前は！」

代替えポケ Howard インは、十夜を見て、目を丸くした。

「久しいな…ポケ Howard イン」

十夜は唇の端を、吊り上げた。

「う、裏切り者が！」

ポケ Howard インの言葉に、いたちごっこははっとした。

「ま、まさか！お前は！」

十夜を指差し、震え出した。

「フン！俺は、裏切ってはいない！貴様らが、俺を裏切った！しかし、俺は魔神！月影を斬る！それは、組織の為でなく、俺の中にある悪の為！」

十夜は日本刀を、立てに構えると、唸るように声を出した。

「いゝ」

そして、日本刀を横にすると、叫んだ。

「ハンダー！」

十夜の姿が変わる。

メタリックなボディに、単眼の血のような赤い瞳を、魔神軍団に向けた。

日本刀を一振りすると、右足を前に出し、

「シャドウィハンダー…見参！」

「く！」

魔神軍団は、シャドウィハンダーの全身から漂う殺気にたじろいだ。

それは、乙女ソルジャーにはない…悪の殺意だった。

シャドウィハンダー…十夜小百合は、

破棄された魔神ジュウトウホウィハンダーと、月影ロボを合体させ、作られたアンドロイドである。

月影ロボと合体している為、シャドウィハンダーはムーンエナジーを使うことができた。

日本刀が、月の光を受けて輝いた。

「参るぞ！」

シャドウィハンダーは、魔神軍団に斬りかかった。

## 悲しみを背負うもの

「中途半端！中途半端！」

九鬼の前に、下っぱ達が立ち塞がる。

しかし、九鬼は歩みを止めず、そのままのスピードを保ち、下っぱ達に向かって歩いていく。

「出来損ない！」

襲いかかってきた下っぱ達を、両腕の動きだけでいなしていく。

その動きは、合気道に近い。

相手のバランスを、少し崩してやるのだ。

下っぱ達を投げながら、九鬼の目は、真っ直ぐにダイヤモンドを見つめていた。

「馬鹿な！」

ブラックを殴り、倒れてもしつくく足を掴んでくるブルーの頭を踏みつけていた乙女ダイヤモンドは、下っぱ達が簡単に、蹴散らされていくのに気付いた。

五十人くらいいた下っぱ達は、全員…芝生の上に転がっていた。

立っている者は、九鬼以外いない。

「貴様！復活したのか！」

ダイヤモンドは九鬼が復活したことや、下っぱを全員倒したことよりも、

近づいてくる九鬼が、まったく息を乱していないことに、驚愕した。

「先程と…違う」

そして、明らかに別人のようなプレッシャーを感じ取っていた。

「九鬼…！」

ブルーは何とか顔を動かして…近づいて来る九鬼を見た。

「装着！」

九鬼は、銀色の乙女ケースを突きだした。

黒い光に包まれて、九鬼は乙女ブラックになったと思った刹那、

ダイヤモンドはふっ飛んだ。

一瞬にして、間合いを詰めた乙女ブラックは、膝を突きだし、ダイ

ヤモンドをブルーから突き放したのだ。

「乙女ブラック…」

ブルーがそう見えたのも、束の間だった。

月に照らされて、乙女ブラックの姿が変わっていく。

まるで、酸化していたシルバーが、磨かれて…輝きを取り戻すように。

九鬼は、月に手を伸ばした。

「この世にある…すべての悲しみを背負いたい！すべての人の悲しみを背負う為に…一筋の涙になろう」

九鬼は突き上げた手を、前に出し、握り締めた。

「月夜の涙！乙女シルバー！参上！」

乙女シルバーとなった九鬼が、月明かりの下で、人々の涙を拭う為に今、戦う。

「乙女シルバー…」

殴られ、倒れたブラックがシルバーを見た。

「き、貴様が…乙女シルバーだとお！」

一瞬で、シルバーの前に来たダイヤモンドのパンチが、シルバーを貫いた。

「チッ」

ダイヤモンドは舌打ちした。

それは、シルバーの残像だった。

「ルナティックキック二式！」

シルバーは背中を折り曲げ、ブリッジの体勢から、全身をバネにして、ダイヤモンドの顎目掛けて、足を突きだした。

「ぐあっ！」

顎を突き上げられて、ダイヤモンドの体の中に舞う。

シルバーも両手を跳ね上げ、そのままジャンプすると、

ダイヤモンドの両脇に足を差し込み、ダイヤモンドの足を掴むと回転した。

「乙女ドライバー！」

ダイヤモンドの頭が、地面に激突した。

芝生を削り、首から上が突き刺さる。

シルバーは、すぐにダイヤモンドから離れると、とどめをささずに間合いを取った。

「凄い…」

何とか立ち上がったブルーは、シルバーを見て…感嘆した。

（す、すごい！）

冷静に、地面に突き刺さっているダイヤモンドを睨みながら、九鬼は心の中で感動していた。

（これが、乙女パワー！？）

男である九鬼は、ムーンエナジーで武装はできたが…身体中に曲がれるパワーを感じることができなかった。

しかし、乙女ガーディアンであるシルバーの装着者は、眼鏡の力で強制的に女に、体を変化することになる。

乙女ガーディアンの力を発揮できるのは、女だけだからだ。

九鬼は女になった体よりも、漲る力に驚愕していた。

（やれる！）

九鬼は確信した。

「なめるなよ！ガキが！」

地面から、顔を引き抜いたダイヤモンドは、すぐさま殴りかかってくる。

シルバーはフツと笑うと、無防備に両手を落とした。

「貴様！ノーガードは、乙女ダイヤモンドの特権ぞ！」

ダイヤモンドの拳が、シルバーを襲う。

シルバーは避けない。

誰もが、拳がヒットしたと思った瞬間！

シルバーの後ろで、背中から落ちたダイヤモンドの姿があった。

「何！？」

ダイヤモンドは、自分に起こったことが、信じられなかった。

「フン！」

シルバーは鼻を鳴らすと、ダイヤモンドに振り向いた。

「王者の拳が知らないが！そんなただ殴りかかるだけの攻撃が、あたしに通用するか！」

シルバーはまたノーガードで、ダイヤモンドの前に立つと、

「乙女ダイヤモンド…いや、結城先生！あたしと、あなたとでは、潜り抜けた修羅場の数が違う！」

凄んで見せた。

「く、潜り抜けた…修羅場が違うだとお！年下の高校生が！人生の先輩に向かって！」

ダイヤモンドはすぐに立ち上がると、常人では見ることでできない速さで、攻撃を繰り出してくる。

拳が、足が、見えない。

しかし、シルバーには当たらない。

「例え…速くても！」

シルバーは、足を払った。

バランスを崩し、ダイヤモンドが転ぶ。

「軌道が読み易い！単純だ！」

シルバーはいつのまにか、上空に飛び上がっていた。

「な！」

絶句するダイヤモンドに、向かってシルバーは叫んだ。

「月影キック！」

流星の如く、シルバーの蹴りが落ちてくる。

それは、光の速さだ。

「ぐあ！」

避ける時間もなく、月影キックを喰らったダイヤモンドはふっ飛んだ。

芝生の上に着地したシルバー。

「速さは、あたしの方が上だ」

スピードのブラックをさらに超えた速さを見せた…乙女シルバー！  
しかし！

「ははは！」

ふっ飛んだダイヤモンドは、平然と立ち上がった。

「確かに、わたしの攻撃は、お前に当たらんようだ。スピードも上！だがしかし！」

ダイヤモンドは、両手を広げた。

月影キックが当たったところには、傷一つ…ついていない。

「乙女シルバーの力を持ってしても、我が体を傷つけることはできない！それが、何を意味するのか…わかるか？」

不敵な笑みを浮かべるダイヤモンドに、シルバーは舌打ちした。

ダイヤモンドは楽しそうに、笑いだし、

「続けるか？ガーディアン同士の…永久に続く終わらない戦いを！」

「く！」

「ははは！お前にスピード！そして、わたしには…強大な力と防御力！月の力を得て、無限とも言われる活動時間を要する乙女ガーディアン！互いに、戦えば…時などすぐに過ぎるわ！」

ダイヤモンドの美しい宝石のような戦闘服が、ムーンエナジーを補充すると、きらきらと星空のように輝いた。

「乙女シルバー…いや！生徒会長九鬼真弓よ！わたしと、無限に戦う覚悟はあるのか？」

いやらしく笑いながらきくダイヤモンドに、

シルバーは肩をすくめ、

「ご冗談を！修学旅行は、二泊三日しかないのよ。そんな暇はないわ。それに…」

今度は、九鬼が笑いかけた。

「本当のようね…見えないのは…。お陰で、助かったわ」

シルバーは、後ろで倒れているブラックとブルーに、振り向かずに叫んだ。

「ブラック！ブルー！彼女を頼む」

シルバーの言葉に呼応したように、

十字架にかけられていた里奈の手枷や足枷が切れた。

「き、貴様！いつのまに！」

ダイヤモンドは、後ろを見た。

十字架から自由になり、落ちる里奈に向かって、ブラックとブルーが走る。

「させるか！」

邪魔をしようとするダイヤモンドの前を、シルバーが塞いだ。

「いかせない！」

シルバーとダイヤモンドは、組み合うことになる。

「言ったはずだ！パワーでは、上だと！」

ダイヤモンドは力任せに、シルバーをねじ伏せようとする。

何とか踏ん張り、シルバーとダイヤモンドの居場所が入れかわる。

しばらく踏ん張っていたが、シルバーは力負けし、腰を落とした。

「このまま！押し潰してやろうか！」

ダイヤモンドが力を込めたその時、

シルバーは逆に力を抜いた。

抵抗を受けていた体が、思いがけない出来事に、勢い余って、前のめりになる。

バランスを崩したダイヤモンドの腹に右足を置くと、シルバーは力の流れに逆らうことなく、ダイヤモンドを投げた。

それは、巴投げに近かった。

投げられ、背中から地面に激突したダイヤモンドに対して、間髪をいれずに、飛んだシルバーは…落下しながら、膝をダイヤモンドの戦闘服の硬さが、薄い首筋に叩き込んだ。

「里奈！」

ブルーが、十字架から落ちた里奈をキャッチした。

体を揺すっても、里奈は起きない。

「任して」

ブラックは、里奈の後ろに回り、両肩を握ると、気合いを入れた。

「大人しくしてもらわよ！」

膝を叩き込んでから、シルバーは足を首に絡めると、ダイヤモンドに関節技を決めた。

「な、なんの時間稼ぎだ？例え、里奈が気づいたところで…何も変わらんわ！」

ダイヤモンドは首を絞められながら、せせら笑った。

「他の2人は、わたしが倒した！里奈が加わったからといって、現

状は変わらんぞ！」

「そうかしら？」

シルバーは、足に力をいれながら、

「あなたは、乙女の底力を知らない……。それにね……」

シルバーは、公園の真ん中を流れる川の方を見た。

「まだ……誰も、倒されてなんていないわ」

「何！？」

「うつうつ……」

まるで……数週間、眠りについてたような感覚の中、あたしは目覚めた。

「京都にいかなくちゃ」

まだ頭がはつきりしない。

「里奈！」

ブルーが抱き付いて来た。

嬉しさからか…あたしを思い切り、抱き締めた。

乙女ソルジャーに変身しているから、尋常ではない力で、ぎゅっとされた為、余りの痛みに、あたしははつきりと意識を取り戻した。

「ブルー！ギブ！」

「あつ！ごめん！」

ヒロインなのに、あたしはもう少しで、泡を吹いて…二度目のフェイドアウトになるところだった。

ぜいぜいと息をしながら、あたしは後ろにいるブラックに言った。

「九鬼も止めてよね！こいつ、加減を知らないからさ」

振り返ったあたしは、首を捻った。

「九鬼？」

後ろにいる乙女ブラックは、スレンダーな九鬼と違って、少し丸みがあった。

あたしが首を傾げていると、少し離れたところから、九鬼の声がした。

「里奈！変身して、乙女レッドに！」

「え！九鬼？」

あたしは、声をした方を見た。

ダイヤモンドの首に、足を絡めているシルバーの戦士に、ぎよつとなった。

「ひ、ひよつとして…乙女シルバー！？」

伝説の戦士は、ダイヤモンドの首を極めていたが…立ち上がったダイヤモンドに強引に引き離された。

「く！」

ダイヤモンドはシルバーの顔を掴むと、そのまま締め上げた。

「九鬼が…乙女シルバー！？」

まだ状況を把握できないあたしを置いて、ブルーが走り出した。

「シルバーを離せ！」

拳を振り上げたブルーより速く、一筋の光線がダイヤモンドの背中を直撃した。

「グリーン！」

びしょ濡れになりながらも、川から上がってきたグリーンはビーム

を放った後、乙女ケースを突きだした。

「兵装！乙女キャノン！」

二つの砲台が、ダイヤモンドに向けられ、さらに、両手をクロスさせ、突きだした。

「乙女ビーム！レインボーショット！」

二つのキャノン砲と、両手、さらに眼鏡から、ビームが発射されると、ダイヤモンドの背中に直撃した。

シルバーはその隙に、ダイヤモンドの腹を蹴って、アイアンクローから脱出した。

「まだよ！」

先程まで、倒れていたピンクが立ち上がると、

「乙女ミサイル！乱射！」

ミサイルを続けて、数発発射した。

ダイヤモンドに全弾命中した。

「凄い……」

学園では、決して見れない……破壊力が大きい技の連打に、あたしは驚いていた。

「みんな！」

シルバーが、乙女ソルジャー達に叫んだ。

「里奈の周りに！そして、里奈は変身して！」

「う、うん！」

あたしは、制服のポケットをまさぐった。

もしかしたら取られているかと思ったけど、乙女ケースはちゃんとあった。

あたしは、乙女ケースを突きだし、

「装着！」

変身した。

「ルナティックキック零式！」

爆風が晴れる前に、シルバーの蹴りがダイヤモンドをふっ飛ばした。

着地すると、シルバーは飛んでいくダイヤモンドに向かって言った。

「もしかしたら…回収されている可能性もあったが…やはり兄妹！まだしていなかったか」

「乙女スフラッシュ！」

グリーンは、光のリングを放つと、レッドのそばに走った。

「みんな！レッドを囲んで、乙女ケースを突きだして！」

シルバーも、レッドのもとに向かう。

「そして！転送と叫んで！」

シルバーに言われた通り、レッドを囲んだ乙女ソルジャー達。

「急いで！」

シルバーは、乙女ソルジャーを守るように、前に立った。

4人は頷き合うと、自然と声を合わせて、叫んだ。

「転送！」

乙女ケースから、それぞれの色の光が放たれ、輪の中心にいるあたしに当たった。

「させるか！」

あれだけの攻撃を喰らっても、無傷なダイヤモンドがあたし達向かって、突進してくる。

「行かせない！」

シルバーが回り込むと、サッカーのディフェンスのように、ダイヤモンドの足を引っかけた。

「体が…熱い…」

レッドの戦闘服に火がついたように、炎のようなオーラが上がった。凄まじいエネルギーが、あたしの全身を駆け巡っているのが、わかった。

「乙女ナイトの誕生よ！」

「乙女ナイトだと！」

足をかけられたが、踏ん張ったダイヤモンドは、シルバーの頬に裏拳を叩き込んだ。

戦闘服から、形が確認できるだけの闘気を放っているあたしの姿を見て、

ダイヤモンドは高笑いをした。

「失敗だな！莫大な力を、コントロールするだけの器ではないわ！」

「レッド…」

あたしの姿を見て、ブルーが心配そうな顔を見せた。

「確かに！乙女ナイトになるには、経験値も…レベルを低い！だから、他の乙女ソルジャーの力を貰い、無理矢理変身した！」

シルバーの回し蹴りを、ダイヤモンドは片手であしらうと、レッドを見た。

「強大な力も、宝の持ち腐れだな！」

シルバーの脇腹に蹴りを入れて、吹き飛ばすと、笑いながら…あたしに近づいていった。

「憐れな妹よ…今、楽にしてやろう！」

## 乙女ナイト

「あ、熱い…」

膝を落としたあたしを見て、ダイヤモンドの攻撃でふっ飛んだシルバーが叫んだ。

「自分を保って！あなたなら、できるはずよ！」

「あ、熱過ぎる…」

力が溢れる自分の体を、あたしは制御できなかった。

まるで、サウナに冬山登山の格好で入ってるようなものだ。

頭がくらくらして、ぼおっとしてきた。

あたしは崩れ落ち、両手を芝生につけた。

「駄目…」

目がかすれ、自分の手も見えなくなってきたとき、あたしを照らしていた月の光が、前に立った者によって遮られた。

「せめて…一撃で、楽にしてやろう」

あたしの目の前で立ち止まったダイヤモンドは、拳を握りしめた。

「レッド！」

グリーンが叫ぶ。

転送で、力をレッドに送った為に、月の下でも、

まだムーンエナジーが体に行き渡らず、4人の乙女ソルジャーは動けなかった。

「恥じらうのよ！」

ブルーが叫んだ。

乙女レッドは、恥じらえば恥じらう程…パワーを無限に上げられるのだ。

「馬鹿め！」

ブルーの言葉に、ダイヤモンドはせせら笑った。

「いつもの如く！パンツでも見せて、恥じらうのか？」

ダイヤモンドは両手を広げ、

「ははは！残念だったな！乙女ガーディアンであるわたしは、男で

はなく、今は女になっている。わたしに見られたとして、何を恥じらうか！女同士！恥ずかしいはずがない！」

確信を持って、断言したダイヤモンドの前で、

あたしは、小刻みに震えながらも、いつのまにか立ち上がっていた

「な、何だって！」

その震えは、怒りからだった。

揺らめいていた闘気が安定すると、

戦闘服が、真紅に輝く。

「あ、兄が！女になることが！」

あたしは拳を振り上げた。

「一番、恥ずかしいわ！」

渾身のパンチが、ダイヤモンドの胸元に炸裂した。

あたしのパンチを受けたダイヤモンドは、絶句した。

胸元に拳の跡が残ると、そこからダイヤモンドの戦闘服に亀裂が走っていたのだ。

「あり得ん！」

戦闘服のダメージを見て、ダイヤモンドは初めて、狼狽えた。

今の一撃に、結構な力を込めたようで、あたしの体から、乙女ナイトのパワーがなくなりかけていた。

もともと自分で、ナイトになった訳でないから、力が安定していないのかもしれない。

「レッド！」

シルバーが走ってくると、あたしに向かって、両足をつけながら、ジャンプした。

「残りのナイトの力を、あたしに！」

シルバーの言葉に頷くと、

あたしの体に残る乙女ナイトの力を放出するかのようになり、シルバーの両足を蹴り上げた。

「月影！」

シルバーの足が、オーラで燃え上がる。

「だが…まだ！砕けてはいない！」

ダイヤモンドは天を見上げた。

「貴様の攻撃を避ければ…！？」

シルバーの光速の蹴りを見切ろうと、眼鏡をスコープに切り替えたダイヤモンドが、見たものだ。

月の下に浮かぶ…無数のシルバーの姿だった。

「残像！？」

啞然とするダイヤモンドに向けて、無数の流星が落ちてくる。

「流星キック！」

とシルバーが叫んだ時には、その身は地上に降り立っていた。

「ば、ば、馬鹿な…」

ダイヤモンドの戦闘服が砕け散り、

哲也に戻ると、

そのまま崩れ落ちた。

ダイヤモンドの戦闘不能を確認した乙女ソルジャー達は、歓喜した。

「やったあ！」

ピンクが両手を上げ、

「よ、よかったあ……」

ブルーもその場で座り込むと、ない胸を撫で下ろした。

「フッ」

ブラックは鼻を鳴らし、

「だりくなあ！」

グリーンは大あくびをした。

「お兄ちゃん……」

あたしは嬉しかったけど、倒れた兄を見ると、心が傷んだ。

そんなあたしを、心配げに見たシルバーは、全身の力を抜いた。

「何を安心している？」

シルバーは突然聞こえた声にはっとして、後ろを見た。



誘う闇へ

「加奈子…」

シルバーは、いつのまにか姿を見せた加奈子を見つめた。

「乙女シルバーの力を得たか！どこまでも、お前！先にゆくな！」

加奈子は悔しそうに、齒ぎしりをした。

シルバーは、加奈子の方に体を向けた。

「だけどな！」

加奈子は、シルバーを睨み付け、

「真の力は、あたしにある！」

黒いコンタクトレンズを指先に取り出すと、両目につけた。

「うわあああ！」

その瞬間、絶叫を上げた加奈子の目から、黒い霧のような力が噴射された。

それは、加奈子を包みながら、膨張し…5メートル程の大きさの竜になった。

「い、いかん…災禍様は、まだ闇の力を…抑えられない…」

ダメージから、動けない哲也は、加奈子の変身に唇を噛み締めた。

「ぎえええー！」

人とは思えない奇声を上げたドラゴンの姿になった災禍の口から、灼熱の息吹が放たれると、

右後ろにあつた若草山が燃え上がった。

明らかに、あたし達がいる方向ではない。

「暴走している…」

ブラックは、ドラゴンの様子を見て、呟いた。

「このままでは、奈良公園が焼け野原になるわ！」

シルバーの言葉に、あたしは一步前に出た。

「止めるわよ！あたし達の力で！」

ドラゴンを睨み、拳を握りしめた。

「でも…あたし達にもう…力はないわ」

ブルーは、自分の力を確かめるように、手を見た。

「月が出て、ムーンエナジーを補助できるとはいえ…力を使いすぎた。万全な状態になるには、あと数分は…」

「そんな時間はないわ!」

あたしは、ブラックの言葉を遮った。

「悩んでる時間も、躊躇う暇もないの!」

あたしはただ…ドラゴンを見ながら、

「あたし達なら、できる!あたし達、6人なら!」

その言葉に頷いたシルバーが、あたしの横に立つ。

「小細工なんていらない!ただ全力でいくわよ!」

あたしの言葉を理解したブルーとグリーンも、横に立つ。

「あ、あたしも!」

流されやすいピンクも、横に立つ。

そんな5人を見て、ブラックはフツと笑うと、

「わかったわ…。これが、あなた達なのね」

横に並んだ。

「いくよ！みんな！」

あたしの号令に、

「おう！」

みんながこたえたと同時に、一斉に走り出した。

ドラゴンに向けて、助走をつけると、

6人はジャンプした。

「月影！」

6人の右足が輝き、闇を切り裂く。

「キック！」

6つの光が、1つになり、巨大な槍と化した。

その時、暴走するドラゴンの前に、1人の男が飛び込んできて、両手を広げた。

「中島さん！？」

キックを放つブルーは、盾になるつもりの中島に気付き、驚いた。しかし、6人のキックは止まらない。

ドラゴンも、こちらを向くと、闇の息吹を吐き出した。

「駄目え！」

月影キックと、闇の息吹に挟まれる形になった中島に向かって、飛び付いて来た1人の少女。

「姫様！？」

ピンクは絶句した。

飛び込んできたのは、理香子だった。

「中島……」

中島を抱き締めた理香子の体を、光の球体が包んだように見えた。蹴りを放ってから、コンマ数秒の出来事だ。

6人の月影キツクは、光の球体をすり抜け、

闇の息吹を押し返すと、ドラゴンの全身を貫いた。

「うぎゃあ！」

加奈子を包んでいた闇のオーラが吹き飛び、

変身が解けると、芝生の上を転がった。

6人の乙女達は、芝生に着地した。

「そ、そんな…馬鹿な…」

加奈子の両目にはめられていたコンタクトレンズが、落ちると…粉々に砕けた。

「ま、負けるものか！あたしは、あんたらには！」

加奈子は立ち上がると、どどめ色の乙女ケースを突きだした。

「まだ…あたしには、これがある！そうちゃ…」

叫ぼうとした加奈子の腕を、哲也が掴んだ。

「災禍様…。今は引きましよう。この状況は、こちらにとって不利です。5人の乙女ソルジャーに…2人の乙女ガーディアン…」

「ふ、2人？」

哲也は導くように、視線を後ろに向けた。

その方向を見た加奈子は、絶句した。

「中島…大丈夫？」

何も考えずに、飛び込んだ理香子は…中島に自分から抱きつき、押し倒す格好になったことに気付いて、慌てて離れた。

「相原…」

中島は、起き上がることなく、月を見上げ、

「ありがとう…」

「えっ！あつと…」

素直にお礼を言われると、理香子は照れてしまう。

「べ、別に！た、助けようとお、思って…やったわけじゃないから！」

素直な返事ができなかった。そつぽを向く理香子に、中島は笑った。そして、ゆっくりと立ち上がると、理香子を見つめ、

「ありがとう…。だけど、相原に助けられるのは、今日で最後だ」

強い口調で、理香子にお別れの言葉を述べる。

「君が、その力を手に入れたんなら…俺と君は、戦う運命にある！  
さよなら、相原…」

中島はゆっくりと背を向けると、歩き出した。

「中島！」

訳がわからず、追いかけようとした理香子を、中島は一喝した。

「来るな！」

理香子はびくつと、身を震わせた。

そんな理香子を見れない中島は、顔をしかめながら、

「世界が…違っていたら…俺は絶対に…」

中島は唇を噛み締め、

「大好き…だったよ。理香子…」

「中島！待つて！あたしも！」

中島に走り寄ろうとした理香子の前に、三人の女が飛んで来て、道を塞いだ。

「この人達は！？」

前に立ち塞がる三人を、理香子は知っていた。

「久しぶりね。理香子さん」

そして、三人の後ろから、現れた人物に、理香子は仰天した。

「お姉さん？」

中島の姉であり、演劇部の部長である紅美子がいるなんて、予想外であった。

道を塞ぐ三人も、演劇部の部員である。

「話は、考えてくれたかしら？」

微笑みながら、きいてくる紅美子の質問に、理香子は眉を寄せた。

「え？」

「一応考えましたけど……」

理香子の後ろから、楓が前に出た。

「あなたなら…あたし達の幹部になれるわ」

「そうですね…」

紅美子は、理香子ではなく…楓に話しかけていた。

「か、楓？」

理香子は、楓の手を掴もうとしたが、

楓はそれを拒んだ。

「か、楓？」

戸惑う理香子に、楓は体を向けると、微笑んだ。

「理香子…いえ…」

楓はゆっくりと首を横に振った後、理香子を見つめ、

「乙女プラチナ」

「お、乙女…プラチナ!？」

楓に言われて、理香子は自分の姿に気づいた。

先程は、中島がそばにいた為、ときどきして自分の体のことなんて見る余裕がなかったのだ。

改めて見てみると、眩しい戦闘服を着ているし…眼鏡までかけていた。

視力がいいのに。

「さつき…あんたが、中島を助けようと飛び込んだ時…あんたを助けようと、どこからか、眼鏡が飛んできたわ」

「え！」

自分では、まったく気がつかなかった。

「乙女プラチナの適合者となり…我らを裏切りし、あなたに…弟をあげる訳にはいかないわ」

紅美子は腕を組み、理香子を軽く睨んだ。

「え？」

理香子には、意味がわからない。

「理香子…。あたしは…あんたと違って、居場所が少ないからさ」

楓は悲しく微笑むと、ぽかんとしている理香子に手を振り、

「じゃあね！理香子！」

あっさりと、紅美子のもとへ歩き出した。

「楓！待てよ！」

追いかけようとした理香子は、いつのまにか周りを黒い影に、囲まれていることに気付き、足を止めた。

春日大社の近くにある鹿の角切り場や、林の影から…百人以上の学生服の男女が姿を見せた。

「あ、あたしの学校の制服？」

それは、広陵学園の生徒達だった。

「これは…？」

シルバーは、周りを見回した。

あたし達も囲まれていた。

「クッ」

ブラックは、顔をしかめた。

「心配しなくてもいい」

哲也は疲れている加奈子に肩を貸しながら、警戒する乙女ソルジャ―達に、話しかけた。

「お兄ちゃん…」

あたしは、傷だらけになっている哲也の方を見た。

哲也は軽く微笑み、

「…彼らが束になっても、今の君達には、敵わない…」

「チッ！どけ！」

加奈子は、そんなことを言う哲也の肩を振りほどくと、  
シルバー  
を睨んでから、背を向けて歩きだした。

「災禍様」

理香子から離れた紅美子が、加奈子に向けて頭を下げた。

演劇部の部員の2人が、加奈子に近づくと、肩を貸した。

「…」

哲也是無言で、乙女ソルジャー達に背を向けた。

加奈子が去っていくと、広陵学園の生徒達も、その後にぞろぞろとついて行った。

乙女ソルジャー達だけを残し…奈良公園に静寂が戻った。

野生の鹿がいる為に、外灯の少ない公園内は、すぐに真っ暗になる。

明かりといえば、真上に浮かぶ…月しかなかった。

「フツ」

気を失っている早奈英のそばにいたシャドウイハンダーも戦いの終焉を感じ、日本刀を消した。

すると、シャドウイハンダーは十夜小百合に変わり、静かに歩きだした。

奈良公園から去っていく十夜の足下には、代替えポケハウダイン達の残骸が転がっていた。

そんな十夜の後ろ姿を、目で見送っていたシルバーは、眼鏡を取ると、九鬼に戻った。

そして、ゆっくりと頭を下げた。

「九鬼…」

あたし達も、変身を解いた。

九鬼は、もう姿が見えなくなった加奈子達が去った方を見つめた後、頷いた。

そして、芝生の上に横たわっている早奈英を抱き上げると、

「帰りましょう…あたし達も」

「うん！」

あたし達も頷いた。

次の日。

奈良駅前で…あたしは、信じられない事実に関頭を抱えた。

「もおゝ帰るの！」

「当たり前だ！二泊三日だから」

顔に包帯を巻いた熊五郎が、帰り支度をしながら、

「今回は、災難続きで…早く帰りたいよおゝ」

本音を漏らした。

「だって！あたしは、何もしてないよ！奈良に来たのに、鹿と戯れていないし！鹿せんべいもあげてないよお！」

嘆くあたしの肩に、蒔絵が手を置いた。

「安心しろ…鹿せんべいは、食べたものじゃない」

蒔絵の言葉に、夏希は呆れた。

「当たり前じゃない」

だけど！

「まじなの！」

あたしは驚き、蒔絵の顔を見た。

「まじだ！」

蒔絵は、お好み焼きをパクつきながら、力強く頷いた。

奈良から京都に出て、新幹線に乗り込んだ大月学園一行は、関西を後にする。

新幹線の窓際に座り、ぼおつと遠ざかっていく町並みを見つめながら、理香子の瞳から無意識に、涙が流れた。

行きは、隣にいた楓が…帰りはいない。

広陵学園も、修学旅行に来ていたらしく…楓は彼らと同流した。

昨日の戦いの後、眼鏡を外し、プラチナから理香子に戻ると、

乙女ケースを投げ捨てようとした。

しかし、早奈英を抱き抱えていた九鬼に止められた。

そして、九鬼の口から、乙女ソルジャーやガーディアン…そして、闇のことを教えられた。

その晩に泊まる旅館に入っても、理香子は九鬼の話を信じられなかった。

1人になった部屋で、理香子が崩れ落ちた時、

テーブルの上に、楓の置き手紙があることに気づいた。

どうやら、楓が先に来たようだ。

理香子は、その手紙ですべてを知った。

中島の家は、闇の女神と言われる平城山加奈子の親戚であり、

家族共々…ダークメイトに参加することになってしまった。

それは、中島自身も例外ではない。

そして…広陵学園も、ダークメイトの手に落ちたことを…。

楓もまた…彼らの誘いを断ると、広陵学園を退学しなければいけな

いことを…。

窓に映る自分の涙に気付き、理香子は慌てて拭くと、ピンクのチェインバックから、乙女ケースと昨日の手紙を取りだし、握り締めた。

「あたし…決めた！この力で、やつらをぶっ潰して…中島も楓も自由にしてあげる！」

理香子は、戦う意志を決めた。

そして、もう泣かないことも、心に誓った。

新幹線は、関西を抜けた。

終幕！そして・・・

修学旅行から帰ってきて、数日が過ぎた。

花束を持って、病院の廊下を歩く九鬼。

廊下の一番奥にある病室のドアを、軽くノックすると、

九鬼は中に入った。

「生徒会長！」

ベッドの上から、嬉しそうな顔を向けたのは、早奈英だった。

その手には、黒い乙女ケースが…。

微笑む九鬼。

体の状態は、回復に戻っており、そのスピードは早かった。

医者も驚いていたが、乙女ガーディアンになっていたことが、影響を与えているようだった。

早奈英の顔を見て、安心した九鬼は花を花瓶に入れ変えた後…しばらく談笑し、

長居は無用と、病室から出ていこうとした。

「また来るわ」

微笑みながら、ドアノブに手をかけた九鬼に、

早奈英が声をかけた。

「あたし…絶対に元気になります！だから、あたしを…」

九鬼は、早奈英の言葉が言い終わる前に、返事を述べた。

「あなたはもう…月影の一員よ」

その言葉に、早奈英は嬉しそうに笑顔になり、

「はい！」

力強く返事をした。

九鬼が病室から出ると、どこからか歓声が響いてきた。

それは、病院から遠く離れた…広陵学園から。

勿論、九鬼には聞こえない。

ただ前を向き、歩く九鬼には、雑音など気にはしていられなかった。

歓声が、すべての音楽をかき消した。

「え！」

新幹線を降りた理香子は呼び止められ…衝撃の出来事を告げられた。

そして、それを告げた熊五郎に、驚きの顔を向けた。

その美しさに、思わず顔を赤らめながら、熊五郎は頷き、同じことを口にした。

「君の…編入手続きは、完了している。君は、修学旅行を終えた時点で、我が大月学園の二年になる」

それは、驚愕の事実だった。

理香子は、何一つ知らされていなかった。

とうわけで、理香子は大月学園に通っていた。

廊下を歩く度に、歓声がわく。

そんな直接的な反応を、理香子は受けたことがなかった。

鈍感な理香子でも、照れてしまう。

「理香子さま」あ！」

モデルのような理香子の姿を見ようと、廊下から生徒が顔を出した。

（これが…女子校かあ）

理香子は、ため息をついた。

「姫様！」

その取り巻きの中には、うっとりとした表情を浮かべる桃子もいた。

「はい…。転入の手配は済ましております」

テレビ局の廊下を歩きながら、蘭花は携帯で話していた。

「彼女を、引率者に指名したことで…広陵学園の陥落時の混乱から、守ることができましたし」

蘭花は、関係者とすれ違う度に、携帯を下ろし、笑顔で頭を下げた。

蘭花は廊下を曲がり、人通りの少ない方を選んだ。

「心配いりませんわ。お婆様…。すべては、予定通りです」

蘭花は、にやりと笑った。

しばらく、携帯の声を静かに聞いた後、

「はい。もう…絞れました。2人までに」

蘭花は目を細め、

「そうです。まだ…目覚めていません。本人にも…自覚もないようです。月の女神の生まれ変わりであるかもしれないという…」

足を止め、廊下の壁にもたれた。

「広陵学園の件は、予定より少し…早かったですが、計画に狂いはありません。スパイも潜入させましたし…」

そこで言葉を切ると、

「気になることといえば…九鬼真弓が、シルバーの力を手に入れたぐらいです。彼女には、気を抜けません」

そう言うてから、しばらく蘭花はいはいと、話に答えていた。

「心配ありません。あたしが、乙女ブラックになりましたから…内部から、探りをいれます。え？酷いですわ…お婆様…。自分の孫に対して…腹黒なんて」

クスッと笑うと、

「あたしは、乙女ブラック。黒の戦士です。月の戦士でありながら、闇と同じ色を持つ者…。それは、あたし達…。代々、月の防人としての使命を全うしてきた…。黒谷一族も同じ」

蘭花は、虚空を睨んだ。

「心配いりませんわ。お婆様…。やつらにも、渡しませんし…。月影にも、邪魔させません」

蘭花は口元を緩め、

「月の秘宝のすべては…我々、黒谷一族のものに」

いやらしく笑った。

画面は変わり、広陵学園の体育館が映る。

先程から聞こえる歓声は、その中から響いていた。

「災禍！災禍！」

生徒達の歓声が、空気を震わす。

生徒達の目は、虚ろだ。

しかし、熱狂の仕方は、尋常ではない。

正面の祭壇には、2枚の巨大な写真が飾られていた。

一枚は、魔將軍ビューティーこと、桂美和子。

もう一枚は、魔將軍教頭こと、田中次郎だ。

「なぜ！2人は、死ななければならなかったのか！」

祭壇の前にいるのは、広陵学園の制服を着た加奈子だ。

その前には、中島と久美子が控えていた。

「闇の為に戦い！闇の為に生きた彼らが！私達の大切な友人が、なぜ！命を散らさなければならなかったのか！」

加奈子は、祭壇を叩くと、

「彼らを殺したのは、我らを邪魔する！月の使者ども！闇の領域を、光で照らす月の下僕達！」

加奈子の言葉に、殺せ殺せと野次が飛んだ。

しかし、その野次を、加奈子は祭壇を叩く音で遮った。

一瞬にして、静まりかえった体育館内に、加奈子の言葉だけが響く。

「しかし！」

加奈子は声を荒げ、

「それは結果的には、我々の為だ！次のステージに上がる我らの礎になったのだ！」

両手を広げ、

「我々は、彼らの為にも、ここに宣言する！」

瞳が赤く輝く。

「ネオ！ダークメイトの設立を！」

加奈子の瞳を見た生徒達は、一斉に足を揃え、背筋を伸ばした。

加奈子は大きく頷くと、右拳を天に突き上げ、叫んだ。

「ジーク！ダーク！」

加奈子の叫びに、整列した生徒達も続く。

「ジーク！ダーク！」

拳を突き上げ、叫ぶ。

何度も、何度も狂ったように…。

「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」  
「ジーク！ダーク！」

ジークダークの叫びの中、久美子の横にいる楓は、心の中で、毒づいていた。

（どこのコロニーの独裁者よ…）

「ただいま！」

家に帰ったあたしは、普通にキッチンへ急いだ。

兄とは、敵味方に別れたとはいえ、

家では普通に過ごすのが、暗黙のルールだった。

「今日のご飯は、何？」

台所で、晩御飯の仕込みをしていた哲也が、振り返った。

「あなたの好きなカレーよ」

「え!？」

カレーは嬉しかったけど、あたしは兄の顔を…いや、体を…全身を見て、絶句した。

「あ、ああ…」

兄を指差し、言葉にならない声を発するあたしに、兄は恥じらいながら、

「じろじろ見ないでよ。恥ずかしいわ」

兄は、女になっていた。

「ど、どうして…」

兄は舌を出し、

「乙女ガードイアの力を使い過ぎてね。男に戻れなくなったの」

「そ、そんな」

兄だった女は、頬に手を当てると、顔を真っ赤にして、

「これからは、里香って…姉貴って呼んでね」

と少し恥じらって見せた。

「い、いやああああ！」

あたしの絶叫も虚しく、

これからは姉と2人暮らしになってしまった。

「ところで、里奈…。あの日が始まったらいいのよ！どっしたらいのか…お・し・え・て・ね！」

可愛く言っ兄…姉に、あたしは悪寒が走った。

(い、一番…いやなことを…)

劇場版 乙女戦隊 月影

完。

## 特報

そして、特報！

「今日は、妹が迎えに来てるの！」

振り返るショートカットの学生に、微笑む九鬼。

「お姉ちゃん！」

校門の前で待ち、手を振る妹に駆け寄る学生。

それを見送る九鬼の目の前で、突っ込んでくるトラック！

「生徒会長！」

九鬼の目の前で、跳ねられる姉妹。

「可哀想に…姉は即死。妹の方も、寝たきりになるらしいわよ。高校の推薦が決まったのにねえ」

見舞いに来た九鬼に、心無い人の噂話が聞こえてきた。

「会長は、殺されたのよ。あの謎を追っていたから」

そう語った副会長も、死んだ。

校庭の時計台に張り付けにされて…。

なのに…どうして！

それを事故だと思うの！

周りの生徒達の反応がおかしい。

探っていた新聞部も、惨殺された。

部室に残る血の跡。

真相を掴もうとする九鬼に、学年主任が告げた。

「生徒会は解散だ！」

「どうしてですか！」

納得できない九鬼は、校内を走る。

「あたし1人でも！」

「あなたは、闇を恐れないのかい？」

呼び出された理事長室で、語られる真実。

「この学校には、闇を封じるものがあつた。しかし、それは何者かに、奪われた」

「新任の結城哲也です」

「あんたはいいよね。やることがあつてさ」

屋上で話す加奈子と九鬼。

「闇に対抗できるのは、太陽だと思うかい？」

兜博士がきく。

「違う！太陽の光は、闇を隠すだけだ！闇を照らすのは、ただひとつ…月だけだ！」

「た、助けて…」

放課後の階段の隅で、闇に食われていく生徒。

「あたし…何もできない」

嗚咽する九鬼に、闇が囁いた。

「次は、お前だよ」

理事長は言う。

「闇に対抗できるのは、月の光だけ…だけどねえ…」

兜博士は笑い、

「月の力を望むことは、できない。使うことができるのは…」

2人が口を揃えた。

「月に選ばれた者だけ！」

「お願い！あたしに力を！」

月を仰ぐ九鬼。

この物語は、結城里奈達が、学園に入学する前、

たった1人で戦い続けた戦士の物語である。

「あたしに！みんなを守る力を！」

「貴様！何者だ！」

闇の問いに、答える漆黒の戦士！

「あたしにはまだ…名などない！」

戦士の手刀が、闇を切り裂く！

「ただ…闇夜を切り裂く刃！お前達を斬る！刃と知れ！」

戦士が、飛翔する！

「ルナティックキック！」

オリジナルビデオ版！

乙女戦隊 月影

闇夜の刃―九鬼伝―

「いずれ！あたしの仲間達とともに、貴様らを必ず滅する！」

公開は未定です。

《月影通信》

皆さん！

今回の映画が、いかがでしたか・・・。

これから、月影はさらなる進化を・・・

・・・え！？

スポンサーがあばよの話を見て、お、降りたってええ！

下ネタが酷い！？

担当も笑ってただろが！

おい！

（落ち着いて・・・蘭花ちゃん）

という訳で、皆さん・・・

月影の打ち切りが決定しました。

さようなら・・・

バイバイって！

おい！

乙女戦隊 月影の明日はどこに！？

未完。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0428j/>

---

乙女戦隊 月影

2010年10月15日13時53分発行